



© 山口つばさ (講談社)

マンガ大賞2020決定!
選考員コメント掲載!

マンガ大賞
Cartoon grand prize
2020 マンガ読みが選ぶ2019年の一推!!

マンガ大賞2020 大賞受賞作品

月刊アフタヌーン / 講談社

「ブルーピリオド」山口つばさ

選考員コメント・1次選考

- 2019に発売された最新刊で、この本のテーマに関わる1つの出来事の結果がでる。それを見たとき、結果が分かったことよりも、この漫画がもう終わってしまうのかという淋しさのほうが強かった。いつの間にかものすごく感情移入をしてしまっていた。それはこの漫画が美大受験漫画で私が美術の教員だからだけではないと思う。この漫画を美大を目指す人に読んで欲しい。ものづくりに関わる人に読んで欲しい。そして、日々何かを表現しようともがく人に読んで欲しい。絵を描くだけでなく、歌でも、技術でも、対人でもなんでもよい。自分の気持ちを出したくて出たくて、苦しくて、苦しみの中に時折一筋光が差し込むような感覚をうけ、またもがくのをやめられない。そんな人に。ニッチな漫画と思いきやすべての人の愛読書になる可能性をひめた本。

鳥取県 高等学校 教諭 / 佐川 由加理

- 主人公の美大受験に臨む姿に勇気づけられる作品

自営業 / 小野裕子

- クリエイターの持つ苦悩の芯を食いすぎて息苦しくなる。すごい作品だと思うし間違いなくオススメしたいのだけど、話の密度というか純度が高すぎて正直コメントをまとめるのすらしんどい…。ひとつあるとすれば、最新6巻がちょうどキリの良いところで終わってるので、気になっている人は今が読みどきかと思います。

会社員 / 小野塚博之

- 美大受験という「他者との比較」が結果として出る領域での「自分の表現」でなんだろうと考えさせられる。このヒリヒリ感はすごい。

本読み / マサトク

- 美大受験で合格するために、悩み、葛藤し、苦しみ、それでも乗り越えようとする受験生達の姿に心が熱くなります。美大の受験は、難しいくらいしか知らなかったの、普通の受験とは一味違った姿が新鮮でした。

広告会社 プランナー / 平沼 良章

- 美大を受験するための努力と苦悩。主人公の八虎の挑む姿に引き込まれます！絵を描く、美術に向かい合う姿勢に心臓が驚つかみされます。

主婦 / 紺野 泉

- 決して順風満帆ではないからこそ諦めずにもがく姿に共感せざるを得ない。読めば読むほど熱くなる圧倒的なエネルギーが込められていて、衝き動かされそうになります。

教師 / 持丸宏司

- 「情熱」と「テクニク」という一見、相反する2つの要素を「美大受験」という一つの舞台に盛り込んだ。これで燃えないわけがない。

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

- 必死になってもがく主人公たちの姿、その最中で自分なりに見つけ出していく答えと、向上していく絵画技法。専門知識が無くても、読めば心に刺さる熱量溢れる作品。自分の好きなものが何なのか。それを誇ることができるのか。それを選んでつかみ取るだけの努力ができるのか。自信とは何なのか。十人十色とは言うものの、自分の個性とは何なのか。自分の弱さや、自分の中身を認めることの難しさ。そういったものを、美大受験という題材を通して投げかけてくる作品だと自分は感じた。

元書店員 / 杉 佳尚

- 画を描いたことがない私からすると、画って、センスのある人が才能に任せてすすすい、と描いているもので、人に説明できるものじゃないんですよ、という勝手な先入観がありますが。 いやいや！いろいろ考えてるし、それは画を描かないあなたにもわかるんだよ！では、そのための一番いい手法は、授業みたいにすることではない、実例と魅力的なマンガで届けますからね！と言ってくれる作品。なんでもそつなくこなしてきた今風にいうとコスパ重視少年が、きっかけに撃たれて、藝大受験に、邁進していく物語なのですが、出てくる課題は、ありとあらゆる具体的なモチーフが目の前に突きつけられ、そしてむせかえるような青春まっただなかの少年少女のドラマがその外側に展開してゆくのですが…！！ 2019 年中に出版された最大巻数の 6 巻までは！最低でも、読むのがおすすめ！

選考員コメント・2次選考

- 去年に続き、1位として票を投じる決断をした自分がありました。想像を超えて、その熱量を伝え続けてくれている作品なのだ、改めて痛感しています。去年も同じことを書きましたが「好きなことをする努力家は最強」だと私も感じています。自分にとって憧れで、目指したいものという気持ちがずっとどこかにあるから、刺さるのかな。きっと多くの人に響く何かを持っている、そんな作品です。

会社員 / 伊東敬祐

- これを読んでほくも絵を描き始めました！（半分ほんと）熱い！青い！最高！ちなみにウチの子供（8歳）のベスト1マンガらしいです。伝わってる！

作家 / 海猫沢めろん

- 技法、個性、才能、戦略、課題、心理、境遇……キャラクターごとにいろんな要素を掛け合わせて、藝大志望者の群像をこまやかにリアルに描き分ける手腕と構成が見事。ありがちな「天才 vs 秀才」といった構図を用いず、奇人競争とか異能バトルにも向かわず、題材に真摯に向き合い、読み応えのあるドラマを紡ぎ出す。楽しませていただきました。ちょうど山場を描ききったので、今が賞にふさわしい時期でもあるかなと思います。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 壁にぶち当たるたび、何かを得る。何かを得たと思ったら、また壁にぶつかる。様々な人物に触れて自分にはない視点に気づき、新たな価値観を得る。正解が分からない中で自身の情熱を糧に先へ先へと進んでいく。主人公たちが綴るこの熱い物語を追体験できることに感謝したい。

元書店員 / 杉佳尚

- 人生を変える何かに出会うこと、のめりこむこと、努力すること、挫折すること。天才ではない凡人が、人を羨み、焦り、失敗し、立ち上がる。学生目線、親目線、読者を選ばないとしてもワクワクする作品。たくさんの人に読んでもらいたい。

主婦 / 赤坂真実

- 理論化された芸術。今っぽい。

公務員 / 東くるみ

- 美大受験し合格することがどれだけ大変なことか、話は聞いたことがあっても、これほどとは思いませんでした。最高に熱い漫画です。

Books アイ茗荷谷店 / 野口忠義

- 簡単に言うと「描くことに目覚めた高校生が東京藝大入試を受ける」話なのだが、何なのだろう、この研ぎ澄まされた緊張感と興奮は。一般的なスポーツものよりもその「一瞬」にかかる後戻りのきかない緊迫感は強く、拳や剣を交えてもいないのに、バトルものよりもはるかに周囲と、さらになにより自分との厳しい戦いを繰り広げている。そして大きなピリオドである入試と連動して、人生という別の大きな枠組みでも、否応なしに決断と己の意思を示すことを迫られる若者たちの自信と怖れ、情熱と諦観がリアルに露出する。物語を駆動するのはパッションだが、もちろんそれのみで話が進展する大味な作品ではない。人類の営みとして古代より生まれ、蓄積されてきた芸術は、同時に研究や分析の対象となることで、現代ではそのことごとくが技法や素材といった要素として分解されてもいる。芸術表現は、主題と素材と技法の総合的な選択の上に成立するものでもあり、表現者は自らの引き出しを増やし、選択を繰り返すことで表現力を高めていくことが作中でとてもよくわかる。絵画でも彫像でもCGでもフィギュアでも、とにかく誰かの創造物に圧倒されたり目を奪われた経験があるならば、ぜひ手にしていただきたい作品です。

会社員 / 矢野耕次

- やりたいことが見つからないけど、見つけたい！そう思っている人みんなに読んでほしい作品です。 そもそも見つけることの難しさというのがありますが、この作品は見つけたあとの苦しさやそこに何を懸けられるかまで描いてあるので。 あと、単純にとってもコマ割りとかが好きです。

Migimimi sleep tight / 涼平

- 導入部で主人公が「絵」に触れる部分、「絵」を描くときの集中力、空気の感じ方とか。とっても懐かしいですし、学生の時、創作がとっても楽しかったことを思い出しました。そして…筆が重い、空気が重いという経験も思い出してきました><いま、会社勤めで この物語とは全く違う道ですが物事の掘り下げ方、前回のコピーだけではない新しいことをチャレンジしていく踏み出し方、周囲からの影響など、主人公の成長を読み進めていくと共に自分自身の今の状況と置き換えて「がんばらなくちゃ」と背中を押されています。…というか、手を引いてくれる感じなのか。まんが道のように、主人公のトライ and エラー、怠慢からの失敗など本当に身に染みる漫画です。

書籍課 / 鈴木寛子

- 狭き門である「芸大」の受験に集中する高校生、そのギリギリの精神状態と、ギリギリでありながらどうにか前に進んでいる様子を描く。この密度感はずい。

本読み / サイトウマサトク

- 藝大受験を通しての、画を描く楽しさ難しさつらさ自由さ、みたいな、私が味わったことのない感覚をリアルなディティールで次々たたみかけてきてくれることが特徴、といままでも何度も言ってきましたが、実はこの作品の核は、「寛容」にあるのでは。うまくやる、無気力、というところからスタートした主人公が、何かを目指しはじめた瞬間に、周囲の全員が「寛容」であることに、意識的にも無意識的にも気づいてゆくところの気持ちよさこそあれ、なのは。これってとてもリアルに今の世の中的で、つまり、一番寛容じゃなかったのは自分、自分の内面だった、ってことを指摘しているんじゃないでしょうか。それってストレートに、元気、でますよ。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

- 美大受験というフィルターを通じて迫る美術の営み。まるきりトンチンカンな自分にも、その楽しさや奥行きが伝わる序盤の面白さ。(以下ネタバレを含む感想) いや～～まさか藝大に受かってからの地獄のような自分探しまでもこんなにも刺さってくるとは！

往来堂書店 / 三木雄太

- 受験編が終わり、一段落。自分と向き合って出した答えは、尊さすら感じます。絵を描く喜びもそうでないものも、全てひっくるめて、素敵です。

教師 / 持丸宏司

- クリエイターの苦悩・心の内面といったものに真っ向から向き合う作品で、読んでいて息苦しくなるほど密度が濃く、純度が高い作品だと感じました。登場するキャラクターも皆個性的で、マンガらしく作品全体をカラフルに彩りつつも、時に主人公を成長させる「他者」としてしっかりバックボーンが描かれているところもとても魅力的です。

会社員 / 小野塚博之

- 揺さぶられる。美大受験を通してのドラマの中で、心の機微、弱さも強さもよく表現されているなあ。色々な絵の見方が少し変わる気がする。

フリーアナウンサー / 松尾翠

- 熱い青春の一ページ。胸にくる台詞の数々。ページを目から手が止まらなくなります！

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

- 昨年の候補時はあまりピンと来なかったのだがその後、巻が増え改めて読見返してみると面白さ爆発！ 今では虜に… 数ある美術系マンガの中でもトップクラスの熱さを持つこの作品 ぜひ！ オススメしたい。

LIBRO PLUS / 土屋修一

- 音楽を表現しようと試みるマンガはいくつかあったけど、「絵を描くこと」とはどういうことか、を表現するマンガはあまりなかったのでは。「美大受験」という業界モノとして楽しめる一方、表現する衝動、楽しさ、苦しさがありありと伝わってきて、心ゆさぶられます。古今東西、人はどうして絵を描かずにはいられなかったのか、という問いのヒントが見つかる気がします。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 美大受験（とその後）を主題とした作品ですが、すこしでも創作に関わったことがある人にはグサグサ〜と刺さるかと思います。八虎くん、そのつらさ、わかるよ…。

会社員 / 畑中瀬路奈

- デザインの論理と葛藤、挑戦と渴望。美術に目覚める高校生の底知れない努力と情熱を描いた作品。ブルーピリオドを読んだ後は、いつも何かに打ち込みたくなります。静かなのに感情が昂る、勇気を与えてくれるマンガです。

デザイナー・シンガーソングライター / 平松新

- デザインを生業する私からすると自分の絵に「わがまま」になれる瞬間があるかどうかはとても重要。そこをなんども主人公に問わせるこの美術漫画はある種残酷であり、なんだなんだ藝大って既にそんなに大変なの？ ヤバいじゃん！ ということを思い知らされる。美術大学受験予備校・入学試験、周りをはるかに巧かったり、秀でていたり、人生はある意味凹むことの連続。あえてそこに努力し向上することを話の主としたこの作品には王道のスポ根の精神が根付いている。でもこの戦い、私は入りたくない(笑)！

October Beast・代表 / デザイナー / 北山友之

- 主人公が伸びた分だけ壁にぶちあたっていく、その度にまた違った成長を見せる。本気で美術に向き合っている漫画だと感じる。キャラクターも魅力的で王道のおもしろさ まだまだ伸び代がある、これからがさらに期待できる良作。

HAIR MAKE LOUNGE tetote 代表 / 力丸真

- 画力、構成力ともに連載開始時から話題になって当然の内容だったが、巻がすすむにつれて一層の面白さ。

漫画読み / yama-gat

- 昨年も読んでいたのですが、続きを読んで八虎や仲間たちの成長や葛藤を感じました。芸術学科は受験したことはないのですが、長らく忘れていた試験のプレッシャーってこんなだったかな…と思いを巡らせました。ブレイクスルーの瞬間は漫画的でしたが、芸術ってこういうものなのかな…と思いました。続きも楽しみにしています。

株式会社スマイルアクス・営業大臣 / 岡村光徳

- 万能の主人公が絵画の世界に1からのめりこんで行く過程が非常に面白かった。実際に画力も凄い。

システムエンジニア / 三浦佑樹

- (今年は高校生モノが多いなあ) 将来も進路も定まらないちょい悪の高校2年生が、一枚の絵と出会って、自分に描きたいものがあることに気付く、、、青春ですねえ。「早朝の渋谷の景色って…静かで、青いんすよ」。自分がそう見えることを、自分がそう表現すること。そのために何を学ばなくてはいけないのか、どうやって家族に納得してもらうか、仲間と切磋琢磨していくか、等々。王道の展開と緻密な描写、現役の美大生の実際の絵を用いることによるリアリティ。今風です。

衆議院議員山尾志桜里事務所政策担当秘書 / 三葛敦志

- 実際、1位でもよかった。いや、自分が選ばないということは他の人が1位に選んだでしょう。

スタジオフーズ 代表取締役 / 小林智之

- 絵を描くことは自分と向き合うこと。音楽をつくることも、家をつくることも、ものづくりの全てが突き詰めればそこにあるように思う。あるいは何度も訪れる通過点として、当然のように何度でも自分と向き合うことになる。その苦しさ、ゆえに生きている実感と、夢中にいる楽しさ。それが見事に描かれているところが好きです。むしろありがたいです。

音楽家・「閃き堂」店主 / 谷澤智文

- 最新刊の芸大入試編がおもしろすぎました。デッサンをする、油絵を描くという動作は決して大きな動きではない。絵面的にまんがには描きにくいと思うが、しかし、作者は読ませるためのあらゆる工夫をコマごとにされていて、格闘まんがに迫る躍動感がある。入試終了後のこれからの展開から目が離せません。

菓子研究家 / 福田里香

- 美大という、一般の受験とは全く異なる世界を、様々な人々が織りなす人生劇で進むストーリーは、胸が熱くなりました。これからの主人公やその周りの人々が? どのような人生を歩んでいくのか。とても楽しみです。

広告会社 プランナー / 平沼良章

- 昨年は、この作品をちゃんと理解しきれなかった。よくある成長物語の美術版だと思ってたので。今回改めて通して読んで、主人公をはじめ登場人物たちの内面に切り込む鋭さに気づいたら全く違う作品に見えてきました。

会社員 / 林礼春

「あした死ぬには、」雁須磨子

選考員コメント・1次選考

- いつでも先輩の話というものが好きな私には、これから先の未来を語る、この漫画をあげずにはいられない。私は既婚だし、まだ40代ではないけど、本奈さんは働く女性で、すでに次のステージを生きようとしている先輩だ。

会社員 / 西尾 美里

- これを読んで、勝手に「自分だけが苦しいわけじゃない、みんなそれぞれいろんな立場でいろんな壁に当たるのだ」となぜか勇気をもらえたり、女性の体のことなどは意外と母親にも聞けないような内容なので、先輩の体験談かのようにためになるというか、これから訪れるかもしれないステージへの指南書として、楽しみに読んでいます。

bar 図書室 店主 / 岡部愛

- 個人的に今年40代に突入するので、身につまされ度1000%でした。タイトルに「死」という言葉が入ってはいたものの、こんなにハッキリと、自分の「死」を意識させられる話だとは思ってもみませんでした。雁須磨子さんが30代女子たちの姿を描いた『かよちゃんの荷物』はあんなに軽やかだったのに、40代を直視するとなるほどこういう重みが出るんだな、ということに驚きました。それは雁さんがいかに人間のリアルを描いているかということの証であると思います。容赦ない！

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- 現在2巻。主人公は、映画宣伝会社に勤める本奈多子（ほんな・さわこ）、42歳、独身。映画宣伝会社に勤め、ハードワークをこなす日々。多子の体調の変化や仕事、対人関係の悩みを通して日常を描く本作は、読めば身につまされること多々あり。だけどほんわりのほんとした雁さんの画風と相まって、しみじみおもしろいです。相変わらず「手書き文字」が読み逃がせません。

菓子研究家 / 福田里香

- 衝撃的なタイトル（笑 40代がテーマのこの作品。更年期障害も不整脈も不安なお年頃には刺さります。雁須磨子先生、昔から愛読しておりましたがタイトルとテーマを知った瞬間読まなきゃ！！となりました。主人公の本奈多子42歳のリアルな不安。同級生との再会に和み、十代から気持ちが変わってないはずだけど時はきちんと経っているあの感じ。あいかわらず、ほっこり上手くて面白いです。まだまだ先のことだと思いたいけれど思いのほか、近づいてきてしまうのかもしれない。（今年になって、大豆サブリ飲み始めました）

会社員 / 佐々木つむぎ

- 全編、わかるわかるわかるわかる！な共感の嵐……なのだが、その共感を主人公だけに抱かせるのではなく、まったく違う境遇、タイプの女性キャラクターそれぞれに抱かせるのが、本当にすごい。そのように感じさせること（この人の気持ちも、あの人の気持ちもわかる、わかりたいと感じさせること）こそが、マンガの持つ役割だとも思えてくる。著者・雁須磨子の人間へのフラットで冷静な、かつ、あたたかくやさしい視線が、それを可能にしている。

ライター / 門倉紫麻

選考員コメント・2次選考

- この作品を特徴づけているのは主人公がアラフォーであることです。でありながら、この作品が描いてくれているものは年齢に関係ない私達の「いま」の話なのがすごいと思います。何を大切に生きていきたいですか。

往来堂書店 / 三木雄太

- 男が読むべき女性の教科書。女性が読むべき共感の友達。

マネージャー / 樋口健

- このマンガに描かれていることがハッキリと「ささる」のは、おそらく特定の世代だけだと思う。自分の心身の不調や、周りで目にし始める死の輪郭、そういうのをいやでも感じざるを得ない年齢。自分がまさにこの世代なので、「本奈さんはわたしかな？」と重ねずにはいられなかった。これを読んでも、若い世代の方はピンとこない部分もあるかもしれない。でもいつか訪れるその日のことを想像してみたい。逆にわたしや本奈さんよりも上の世代の方は「そういう時もあったよね」とやさしく振り返ることができるのだろうか。生きていれば必ず死に近づいていくということに真剣に向き合えるきっかけになる本でした。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- なるほどこんな展開か！映画宣伝会社に勤める本奈多子（ほんな・さわこ）、42歳、独身が、2巻の最後のコマで決める展開のカタルシスたるや～すごくかっこいいわけでも、前向きなわけでもなく、あ～こんな感じで人生の進路を決めるって、実際にあるんじゃないかな。このテンションの何気なさ具合には寄り添える。アラフォー女子の仕事と日常を淡々と、しかし、芯を喰った表現で描いて感嘆しました。

菓子研究家 / 福田里香

- 主人公がだいたい同じ年代。置かれている環境はドンピシャではないけれど、なんとなく重なる部分がある。共感できるから面白いというのもなんだか乱暴な気がして、そういう言い方はあまり好きではないのだけれど、それでもこのマンガが訴えかけてくるものから目が離せないのです。

鳥取県立図書館・司書 / 野間勤

- 僕もこれから迎えていく年代。不安も煽られるんだけど、逆に読んでいて安堵感も得られる作品です。同じようなことを思っている人は多いのかもしれない、とか。ある意味、どんな人でもいつかは通る、通った道なの年齢性別関係なく読んでほしい作品です。

Migimimi sleep tight / 涼平

- 何か、気がつくとき、自分とシンクロしながら読んでいます。

有隣堂アトレ恵比寿店 / 桶谷佳代

- 一次選考でも投票しました。いつも雁須磨子先生の最新刊はチェックしてましたがこの作品は新境地だと思います。他人事じゃない感すごい。先日、よしながふみ先生との対談も拝見しましたがとても読み応えがありました。

会社員 / 佐々木つむぎ

- 登場人物と同じ40代で刺さり過ぎた。

公務員 / 東くるみ

- かつてマンガは若者のものだったから、中年（特に女性）の描き方は画一的なものが多かった。だけど本作に登場する「40代女性」たちは、ひとりひとりがちゃんと色とりどりのバックボーンを背負っている。映画宣伝という華やかに見える業界で泥臭く働く主人公の本奈さん、早くに結婚したガーリーな主婦・野崎さん、ひきこもりの鳴神さん。彼女たちのネガティブすぎず、ポジティブすぎない等身大の描き方こそ、今読みたかった同世代の物語かもしれない。少女漫画とともに思春期を過ごした世代だからこそ、中年期も寄り添ってくれる漫画があってほしい。そんな希望をかなえる作品です。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 40代本当に体力も気力も落ちてしまった。。。すごくわかる。

カメラマン / 平沼久奈

- 「あるある」だけど、それだけじゃない…というか、それぞれの「あるある」をていねいに描くことで「いろんな人がいる」という大きなものを描いている。登場人物全員に心を寄せ（一見“ヒール”の梅木にさえも！）つつ、妙な肩入れはしない、雁須磨子という作家のスタンス…というか人柄が、この作品の独特のあたたかさを生んでいる。どんなに弱った時でも読めるマンガを選ぶ選手権があったら、私は雁須磨子作品に一票！！

ライター / 門倉紫麻

マンガ大賞2020 ノミネート作品

FEEL YOUNG/祥伝社

「違国日記」ヤマシタトモコ

選考員コメント・1次選考

- すごいな、セリフが刺さる刺さる。決して誤魔化しの嘘を言ったりしない信頼できる人に、悩み事を自分が相談しているような気になる作品。

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- ヤマシタトモコさんは人の感情のざらりとした手触りや、ほのかな救いみたいなものを描くのが本当に上手だと思います。

会社員 / 工藤圭

- 親をなくした思春期の女の子とその叔母の同居物語。女の子には思春期特有の悩みがあり、叔母の方もコミュ障気味だから、ドタバタが絶えない。でも、これがもしも親子だったら、うるさいとか、うざいとか、女の子が感情をただ大人に投げつけられれば済んでしまうことを、このマンガは言葉で説明しようとしている。そこにはっとさせられること頻り。

鳥取県立図書館・司書 / 野間勤

- 今回選ぶにあたってまた一から読み直したんですけど、前に読んだとき気づいていなかった心のありようも感じました。とにかく繊細な作品だと思います。

会社員 / 林 礼春

- 昨年もノミネートし、ずっと読んでいたものの投票していなかったのですが、五巻でぐぐっと話が動き、やっとどういう話だったのか理解できた気がします。毎回、楨生や朝ちゃんの心がひりひりする感情にシンクロして胸が詰まるのですが、必ず救いとなる言葉や人物が出てくるところにほっとします。心が弱ったときに読むと効く、処方箋みたいな漫画ですね。

主婦 / 堀江千秋

- 人はいくら血が繋がっていても、一緒に暮らしていてもだれもが違う世界にいる。母を亡くした少女とその叔母はその孤独とどう向き合うのかどう変化していくのかを見届けたい作品です。

漫画家専門鍼灸師 / 碓氷麻里子

選考員コメント・2次選考

- ヤマシタトモコさんの作品は今までも面白く読んでいたが、間違いなくこの作品が代表作になるのではないのでしょうか。一人の作者からこんなに思想の違うキャラクターの描けるのか…最新刊の5巻を読んでより衝撃を受けました。朝のこれからが気になります。

bar 図書室 店主 / 岡部愛

- 他人との距離感、認識のずれ違いと逃げずに真っ向から描きつつも、苦しくなりすぎずに受け入れながら読めるのは貴重なことだな、と思います。言葉に、絵にしてもらってよかった、という感覚。ずっと気をつけようとしてきて、モヤモヤしたけど見なかった何かを思い出して箱にしまうような…。作家として今まで作り重ねてきたテーマが一番バランスのいい形で昇華されようとしているんじゃないかな、という感覚があるので、この先の期待を込めての投票です。

(株)来知・WEB デザイナー / 河本 智芳

- 母を亡くした少女・朝と小説家の叔母・楨生の同居生活を通じて、違う文化(国)の接触により生じる戸惑いや変化を丁寧に描きながら、それぞれの歴史において大きな存在である亡くなった母・姉の見ていなかった側面が明らかになっていく話の運びは秀逸。魅力的なキャラクターのやりとりとグサリと刺さる台詞まわしが心地よく、作品の世界に引き込まれる。読後は自分の歴史を振り返りたくなる。そんな作品である。

弁護士・三村小松法律事務所 / 三村 量一

- 胸がギュッとした。ヤマシタトモコさんのマンガはいつも胸がギュッとします。そして優しい。朝も楨生も幸せになってほしいなあ。

カメラマン / 平沼久奈

- タイトルを「異国日記」「違国物語」などと間違えて憶えていたりして、誠に失礼極まりなかったりするのだけど、私のポンコツ頭でも記憶にちゃんと定着したのはそれだけ何度も何度も話題にのぼったからでしょう。このマンガが表現している空気感、登場人物同士の距離感が好きで読み進めていると、登場人物のちょっとしたひとことにハッとさせられるのです。それもさほど感情移入できてない登場人物の何気ないセリフに心を奪われます。陳腐な言い方ですが、読み返すたびに新しい発見があります。手元において折にふれて読み返したくなるような作品です。

鳥取県立図書館・司書 / 野間勤

- 読みながらキャラクターたちとあるいは自分自身と雑談している。実のある雑談。普段飲み席では支離滅裂になり、素面では時間も場も相手もない中で、好きな飲み物を飲みながら、実のある雑談ができたような気になった。4巻と5巻の終わり方とてもいい。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

- 朝ちゃんが前向きなのが何か、救われます。

有隣堂アトレ恵比寿店 / 桶谷佳代

- 淡々とした日常と繊細な心の動きの描写。誰もがひとりで、それでいてその孤独をかなしむ必要はなく絶望する必要もないのだと思わせてくれるような作品。

会社員 / 工藤圭

- このマンガはセリフもモノログも雄弁だ。怖いほどに核心を突き、「やめて」と声を上げたくなるほど痛いところをえぐり出し、「あーわかる！」と共感をわしづかみにかかる。だが不思議なことに、そうしたコトバが世界を広げれば広げるほど、すくいとれないスキマも、こぼれ落ちる想いも、もっと膨らんでいく。不思議なマンガです。

朝日新聞記者 / 小原篤

- これはもう読み物なのでは？というくらいセリフひとつひとつを読みこむのに時間がかかる。「あなたとわたしは別の人間」「ふつうができないから困っている」「それは選ぶことも咎めることもできない」のセリフからも、多様性を大事にしていることが感じられる作品。血縁者を好きでなくても良い。親じゃなくても保護者になれる。結婚しても離婚しても、ひとりで生きてても、内縁関係でも良い。自分が思っていることがすべてではない。急死した、大嫌いな姉の娘と生活を共にすることになった、一人の時間がないと息が詰まってしまう主人公・槇生。そんなうまくいくはずない！と思うのだけれど、彼らはちゃんと対話をして向き合っている。主人公の槇生も、姉の実里も自分と重なるところがあり、かつ分かりあうことを諦めてしまったので、読んでいてしんどいけど救われる面もある。傷つく表現もあったのだけれど、色々な事を考える機会をくれるのと5巻がとてよかったですのでおすすめしたい。

主婦 / 赤坂真実

- 槇生のような、言ってしまうと生きづらいたらう大人の女性を中心において、無邪気がすぎるぐらいの少女である朝がそのまわりを周回する構図が見事。槇生が誠実に、自分らしく人生に向き合っているから見えてくる価値観がとて面白い。

本読み / サイトウマサトク

- 人生にとって大事なマンガ、というのが誰しもあると思うのですが、わたしにとっては『違国日記』がそれです。人と人が関わり合って生きていくことの素晴らしさと難しさ……これから何度も読むだろうと思います。

ライター / 早稲田大学文化構想学部助教 / トミヤマユキコ

- 「名言」という表現が正しいかはわかりませんが、心に刺さる言葉が多いです。主人公の1人が小説家だからというのもあるかもですが、美しいテキストが並んで物語を形成させています。

イロイロ屋 / 杉本善徳

- わたしは、いつの間にか10代以下のひとたちのことをひとくくりに「こども」として接してしまう大人になったなという自覚があります。でも槇生さんは自分のこともきつと「大人」とは思っていないし、朝ちゃんのことを「こども」とは思っていないくて、常にお互いが「個」と「個」。そういう槇生さんは、自分を大人だと思っているわたしなんかよりずっと大人で、わたしも朝ちゃんと同じように彼女から学ぶことがたくさんあるなあ、と思いながら読んでいます。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- 「とても悲しいことはあった。けどそれを誰かと共有するつもりはない。わたしにとって自分の感情はとても大切なものでそれを踏み荒らす権利は誰にもない。誰も絶対わたしと同じようには悲しくないのだから誰にも分かち合わない」そんなぎこちなくて繊細で、頭でっかちで誇り高い、「群をはぐれた狼のような目」で語られてきたこの物語が、単行本5巻分の枚数を重ねてようやくたどり着いた場所にふるえがきました。絶対に理解しあえないこの断絶をあたりまえのものと受け止めたうえで、馴れ合いでも居直りでもなく、気づかないでいることでも気づかないふりをするでもなく、わたしたちは悲しみを共有することができるのかも知れない、そんな希望がたぶんあたたかかったから。

会社員 / 末永龍介

マンガ大賞2020 ノミネート作品

月刊アフタヌーン / 講談社

「スキップとローファー」高松美咲

選考員コメント・1次選考

- 毎月の癒し作品。少しヘンテコだけどピュアでまっすぐな主人公みつみがとにかく可愛い！

bar 図書室 店主 / 岡部愛

- 田舎から都会に出てきたちょっと天然な女子が主人公。この主人公のちょっとした行動や言動に励まされたり、気付かされたり、元気にさせてくれたり、幸せな気持ちにさせてくれたり、和ませてくれたりと沢山素敵な感情をくれる素敵な作品。まっすぐな主人公がまっすぐにこれからも成長していく姿を応援していきたい。

三省堂書店海老名店 コミック担当 / 近西良昌

- 能登半島の先っぼの町にある同級生 8 人の中学校から、高校入学を機に上京した女子が主人公。彼女が通う東京の進学校のクラスメートたちと友情が通い、共感が広がり、信頼感が形づくられていく様子を温かく、くすっと笑えるエピソードを駆使して描く。主人公・みつみは田舎出身で垢ぬけないけれど、それを大して気に病まないほどには天然。クラスメートは少しくらい意地悪なキャラクターもいるが、基本的にはみんな善人。なので全体としてはギスギスした気持ちになる心配もなく、安心して読み進められるのがいい。ほわっとした雰囲気ながらどこか影のあるイケメンの志摩くんがいい味わいで物語をけん引している。10 代らしい小さな心の揺れ、相手の気持ちをおもひかかるときに感じるこまやかな喜怒哀楽を丁寧に拾っていて、この年代の自分の日常もこういうふうには喜びや不安に満ちていたなあ（笑）などと思うと、自分の子ども世代にも読んで、と薦めたくります。みつみは学力優秀だが、東京の普通の 10 代からすれば異物そのもの。規範（＝スクールカースト）の外側から来たマレビトが社会（＝学校）の空気を変える、という物語の基本構造的な爽快感がある。なお昭和の高校生活には存在しなかったスマホを通じて、距離を超えてリアルタイムでつながる故郷の親友ふみちゃんとのやり取りもよい感じ。

日本経済新聞社 企画開発室 / 天野賢一

- みつみちゃんが変わり者で周りを引っかきまわしながらそのまま物語がすすむのかな、と思ってましたが、ちょいとズレてるだけで普通に悩んだり立ち止まったり、そこから勇気を出して前に進んだり、なんだよ、青春じゃん！と肩を叩いてやりたくなる。むずむずするような懐かしさ。

三省堂書店 / 内野智未

- 大志を抱いてド田舎から都心の名門校に進学した女子高生の青春ストーリー、と説明するといかにも陳腐ですが、主人公のストレートな純粋さがとにかく気持ちいいのです。決して美人ではない、やや趣深い顔立ちなうえに、なかなかぶっとんだドジや浮世離れした発言を連発するのですが、それが味わい深く、なによりとことんまっすぐ純真な性格で、なんか周りの友達いいやつばっかじゃん！出来すぎ！なんて感じることなく素直に納得できるキャラクターです。「スキップとローファー」というタイトルも絶妙ですね。校則や勉強、恋愛だけじゃない、悩んだりしても明るく軽やかに、楽しくいきたいよね、青春だもの！ひたすらにさわやかで、元気になれる作品です。

公務員 / 宇田川 結衣子

- 目標をもって、過疎地から東京の進学校に主席で入学した、主人公みつみ。とにかく真面目、実直、純粋のかたまりの癒し系？で、友情も恋愛も応援したくなる。ジェットコースターのようなドラマティックな学園ものもよいけど、悪い人が出てこない、ほんわかあわせになる本作が好きです。

主婦 / 赤坂真実

- 最近の子ってみんなこんなにコミュニケーション能力ちゃんとしてるのか～えらいな～とほんわかします。

マンガ研究 / フリーライター / 会田洋

- 主人公・みつみだけではなく、クラス中の「違うカテゴリー」にいる同士が、お互いを遠ざけることなく、できる範囲で理解しようとして、理解できなくても一緒にいて、「友だち」になっていく姿に美しいものを見ている気持ちになる。主人公・みつみがはじかれることなく、周りの人に受け入れられていく姿にずっとじわじわと涙が流れ続ける。新時代の、新ヒーロー誕生！！

ライター / 門倉紫麻

選考員コメント・2次選考

- 一次選考でも投票しましたが、個人的にはやはり今季一番推したい作品です。さわやか、まっすぐ、ほんのりラブありたっぷりコメディあり、などなど特徴を列挙すると学園モノの王道の要素ばかりですが、バランスがいいのかおもしろくて読まずにはられない。たぶんそのバランスのよさはひとえに主人公のキャラクターが絶妙なんだと思います。この子にみんなついてくる理由がわかる、なんか好きなんだよね、ほっとけないんだよね、って、きっとみんな感じてもらえると思います。この子と私も友達になりたい。きっと読んだらわかってくれるはずなので、たくさんの人に触れてほしい作品です。

公務員 / 宇田川結衣子

- 主人公の岩倉美津未は真面目で勉強が出来て暗そうでコミュ障なのかなと第一印象思っただけで、それに加えてちょっとの天然でまっすぐで優しくはっと気付かせてくれて、周りをよい意味で幸せにしてくれる。人生の中でも高校生活は将来的にも大事な時期。こんな友達がいたらきっと学校生活楽しいだろうなと思わせてくれる。主人公の学園奮闘記でもあるけれど、青春にちょっとの恋心、友情が良い塩梅で描かれていてとても爽やか。読む人をも幸せにしてくれます。

三省堂書店海老名店 コミック担当 / 近西良昌

- 人に向ける温かい眼差しと、直向きな努力や誠実な言葉が、スッと入ってきて、ホッと安心します。

教師 / 持丸宏司

- 描かれているのは、ありふれた高校生活。ときどき、ちょっとした事件は起きるものの、とんでもない非日常が描かれているわけではない。なのにどうしてこんなに引き込まれるのだろうか。主役と準主役ふたりを中心とした数人のクラスメートを軸として物語は展開していく。描きこまれたふたりとその周辺の登場人物の心の機微。高校の同級生という、公平けれども不平等、それでも"対等"だからこそ生まれくる友情、好意、愛情、尊敬、苦悩、嫉妬などがなくないまぜになった複雑な感情は、なんときめ細やかで鮮やかなのだろう。人の輝きとは、他人から見えない気持ちの奥から放たれるもの。誰もが自分の人生においては主役なのだ。本作からは、そんな勇気だって受け取ることができる。選考対象は2巻までだが、2020年2月に最新刊第3巻発売。

有限会社馬場企画・編集者 / 松浦達也

- 出てくる人全員いいヤツ。胸がホクホクして、散歩しながらまさにスキップしたくなっちゃう！ありがとう！

フリーアナウンサー / 松尾翠

- 日常のさりげないエピソードが積み重なって、高校1年生のクラスメートの交流・交歓がゆっくりと、しかし着実に深まっていく。その過程を追う楽しさが、このマンガを読むいちばんの楽しみだと思う。現代の東京が舞台ではあるけれど、どこかなつかしい学園ものの系譜で、陰惨だったり悲しかったりする描写に出くわす心配もなく、安心して読んでいけるところがいい。高校進学で田舎から出てきた主人公・岩倉美津未（みつみ）の「天然」ぶりは、マンガ的に誇張されてはいるけれども、こういう子じっさいにいるかも、と感じられる不思議な自然さがある。描き込みすぎない素朴な絵柄がそんな自然さを補強する。「私がムカつく奴の名前をふたつ覚えてる間に、岩倉さんは親切にしてくれた人の名前をひとつ覚えるんだろう」——。みつみにいじわるを仕掛ける女子のそんなモノローグにハッとした。2次選考の締め切り日（今日！）に発売された3巻は売り切れで買えなかった。大向こう受けする派手さはないかもしれないけれど良質な、こういうマンガが売れているのは喜ばしいことだ。みつみの成長をみんなで見守りたいよね。

日本経済新聞社 企画開発室 / 天野賢一

- 普遍的かつ、とても今っぽいテーマである「いろんな人がいる」ということが、楽しく、あたたかく描かれている。こんなに全方位的に人にすすめてくれるものはそうない。特にリアルタイムで思春期を送る若い人たちが読んだらきっと「自分は大丈夫かもしれない」と思えるはず。全員に配ってまわりたいくらい（実際、何回か高校生にあげた）。のんびりした話のようでいて、実は、みつみちゃんが傷つかないかとハラハラして、大丈夫だった！とホッとて……を何度も繰り返す、起伏の激しいジェットコースターマンガだと思う。

ライター / 門倉紫麻

- 話のテンポが良いせいか、なぜか繰り返し読んでしまう。そして幾度となく癒やされる。高校のお話ではあるものの、日々の業務や組織のいざこざに疲れているビジネスパーソンにこそ是非読んで欲しい。

会社員 / 齋藤隼

- 読み味が大変心地よく、今のご時世におけるいろんな意味でちょうどよい青春漫画。

漫画読み / yama-gat

- 人の上立つべき人間だから東京の高校に通い、総務省キャリアになった後は定年後は市長を務める これだけ聞くと何の興味も湧きませんが、ちょっとしたズレが魅力のおみつ（主人公）が気になって仕方ないのですよ僕は！

(株) エフ・ジェイ エンターテインメントワークス / 阿部 大介

- 地方から上京してくるという経験をしたことはないのですが、高校生にとってはものすごい大きな出来事なんだろうと思います。何者でもないみつみちゃんの魅力にみんなが気づいて、みつみちゃんも周りの友達の魅力や東京に戸惑いながら少しずつ慣れていく、そして地方の親友に報告するシーンには可愛さを感じました。何気ない日常ですが、状況が違つとこんな風を感じるのかなという作品でした。

株式会社スマイルアクス・営業大臣 / 岡村光徳

- とにかく大好き。わたしにとっての 2019 年の No. 1。主人公美津未の真っ直ぐさに癒され心洗われる。動物も可愛い。

bar 図書室 店主 / 岡部愛

- 不思議な読後感。こういうスッキリとした軽さ、でも軽いだけじゃないかんじは久しぶりの気がします。人からどう見られてるかってことを気にしつつ生きている大人にとっては清涼剤のような作品かと。疲れてる友達に勧めたい。

(株) 来知・WEB デザイナー / 河本 智芳

- 素直に友だちに薦めたくなるマンガ。最近の高校生はみんなコミュ力高くてえらいな～いいな～。タイプが違う子たちで仲良くなれるあの感じ、学生時代のいいところ。

マンガ研究 / フリーライター / 会田洋

- 高校進学を機に上京した女子高生・美津未の生活を描くほのぼのとした学園もの。多感な高校生の心情と彼らの「社会」をリアルに描いている。天然の美津未と関わることで、彼らが感じている生きつらさから解放されていく様子は、小気味良い。悪人が出てこない点が気になるかもしれないが、こういう作品があつてもよいと思わせる良作。

弁護士・三村小松法律事務所 / 三村 量一

- 素直でいい子達の学校生活。今っばい。

公務員 / 東くるみ

- かつて学生だった全ての人に読んでいただきたい。現役学生にも勿論。

マネージャー / 樋口健

- 世の中いろんな人がいて嫌な気持ちになったり、イライラすることもあるけど、そういうことで心を埋めるよりも、嬉しい気持ちやときめきを集めていきたいと思える。嬉しかったことが顔や仕草に出しまつたり、初めての気持ちに気付いたり、より仲良くなれたりしているこの子たちを見てると、気持ちが伝染して胸がぎゅつとなつて涙が出る。

声優 / 富岡美沙子

- 愛すべきキャラクターを造型し、安易な能天気には陥ることなく、丁寧な手つきで微笑ましい空気感を醸した秀作。刺激物に頼らない漫画の心地良さを思い出させてくれる。

ライター / 福井健太

- おかっぱで三白眼、勉強以外はズレてる主人公のみつみちゃんが可愛くてたまりません。ズレていても真面目で優しいから、自然と応援してしまう。タイトルと表紙から青春恋愛ものと予想はしていたのですが、予想とはちょっと違った方向で楽しめました。綺麗なあの子も少しイジワルなあの子も、何かしら悩みを抱えて生きているし、自分の殻を破りたいと思っている。表面に見えているものがすべてではないのだと、改めて気付かされる作品でした。

主婦 / 堀江千秋

- 真っ直ぐで、爽やかで、優しい世界が描かれているマンガです。地味目の主人公が、どんな相手に対しても、穿った見方をせず、正直に真っ直ぐに向き合うことで、自分の周りの世界を美しく変えてゆく姿を見ていると、逃げずに相手を信じて人と向き合ってコミュニケーションをとることの大切さに気づかされます。現実には世知辛くなかなかこうはいかないかもしれませんが、コミュニケーションから逃げたり怖がったりせず、正面から立ち向かうことで切り開かれる美しい世界があるということこのマンガは教えてくれます。現実には慣れてしまって、理想を追うことをあきらめてしまいそうになっている人におすすめのマンガです。

システムエンジニア / 廣瀬 公将

- ありがちな設定ではあるのに「粹」には収まらず、ゆるっとしてるけどちょっと痛い核心をつく鋭さはあって…"一筋縄ではいかない"感が好きです。すっきりとした混じりけのない青春は読んでいて心地良かったです。登場人物のそれぞれの性格がしっかり立っているからこそ、お互いがどう絡み合って変わりあっていくのか気になります。

デザイナー / 金輪英恵

- 田舎から出てきた純朴な女子高生、それを取り巻く同級生のイケメン、美人、ちょっと意地悪な女の子などなど、パーツだけ見るとマーガレット連載のキラキラした少女漫画になりそうなのに、出てきたものはどちらかと言えば川原泉ワールドでした。なぜなのか。でも嫌いじゃない。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店コミック担当 / 山本さとみ

- 高校生くらいの男女は日々ちょっとずつ変わっていく。自分とは違う相手がいる、その人もちょっとずつ変わっていくけど、その変化は自分とは向きも幅もタイミングもやっぱりちょっとずつ違って、そのことが互いを近く感じたり遠く感じたり憧れたり勇気づけられたり嬉しかったりイラッとしたり嫌悪したりする。そんな感情と機微と距離感を、平易に（つまり何と言うか文学的修辭を弄することなく）素朴にクセがなく描いているところが、ユニークで独自性があり面白い。登場人物に「イヤな子」がないのもいい。それでいてイヤな空気はしっかり出したりする。うまい。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 好きです！信念をもって上京した真面目少女、心に闇を抱えてそうなイケメン、さっぱり美人、努力のかたまり高校デビュー女子などなど、魅力的で個性的なキャラクターがたくさんでくる学園もの。現実が辛すぎて、とにかくほんわかした気持ちになりたい…というときにぜひ。

主婦 / 赤坂真実

- ああ、佳い少女マンガだなあ、と思った。主人公が意図せずに応援したくなるキャラなのは良作の条件だ。登場人物全員の幸せを祈りたい。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

- みつみちゃんのちょっとズレててそれでいて真っ直ぐな性格が、なんとなく息苦しさを感しながら生きている周りの人たちにぶつかって、虚脱させて、そしてほっと心を緩められるような感覚が心地いい。若者よ、青春しろよ！！と応援したくなる作品。

三省堂書店 / 内野智未

- 少し変わり者だけど真っすぐな心で、周りの心を溶かしていく主人公がとても魅力的。心理描写が素敵で、色々なセリフが胸に響きます。

デザイナー・シンガーソングライター / 平松新

- 自分の高校生の頃の、あの頃の仲良かった男女グループでの懐かしい思い出が蘇ってきました。彼ら彼女らの微妙な距離感が上手に描かれています。

Books アイ茗荷谷店 / 野口忠義

マンガ大賞2020 ノミネート作品

少年ジャンプ+ / 集英社

「SPY × FAMILY」 遠藤達哉

選考員コメント・1次選考

- 疑似家族物コメディの傑作。わ～これは楽しい。暗殺者、スパイ、エスパーという組み合わせもストーリーを加速させる装置として秀逸。冷戦時代を想起させる架空のヨーロッパ的世界観が最高におしゃれ。どのコマを切り取ってもすべて「確かにその世界、時代にある物や建物、ファッション、人物だな」と思わせてくれる筆力に圧倒される。親世代の国家間の暗闘と娘世代の学園のわちゃわちゃ騒動が今後どう結びついていくのか？楽しみでならない。

菓子研究家 / 福田里香

- これは更にこれから人気でそうな！面白いし可愛いしこの嘘だらけの家族がとても好きになりました。読んでてスカッとします。殺しとか出てくるのになんだか健康的な漫画…笑

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- 互いに正体を隠している、敵対する者同士のすれ違いコメディ、それだけならどこかで見てそうですが、そこに「双方の正体を知る子ども」を放り込むだけで、ここまで面白くなるとは！二人の秘密を知っていることを隠したまま奮闘（あるいは右往左往）するアーニャちゃんがとにかく可愛い！！

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店コミック担当 / 山本さとみ

- 圧倒的なマンガの面白さとバランス感！そして何より画力が高い！！【スパイ】【殺し屋】【超能力者】が家族になるという秀逸な設定、コメディとシリアスの塩梅が抜群なストーリー、魅力的なキャラクター、全部素晴らしいです。アーニャの顔芸がいつも可愛い。2020年超・超・超！イチ推しの作品です！はやく続きが読みたい！！

デザイナー・シンガーソングライター / 平松新

- 職人の技巧を感じさせるシチュエーションコメディ。大胆な設定の組み合わせとバランス調整はまさに秀逸。

ライター / 福井健太

- 絵がきれいだしキャラクターがかっこいいし可愛いし、ギャグもめっちゃくちゃ笑うし、どこにも隙がないです完璧ですおもしろいです。表紙デザインも好きです。あと担当編集さんが青エクの林さんだったのでニヤッとしました。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

- 家族で楽しめる作品。展開がはやくテンポよく読める。

自営業 / 小野裕子

- ジャンプって、こういう王道ど真ん中で突き抜けて面白い作品が出てくるから凄いですよね。展開はこれからもっと面白くなっていくんだろうと思いますが、各キャラのたたせ方もチャームングで、読んでいてワクワクを隠せません。今最も最新話を待ち望んでしまう漫画。

広告会社 ブランナー / 平沼 良章

- 王道な少年誌漫画で、スパイ×暗殺家×超能力者たちで構成されている”訳け有り家族”の物語です。主要人物の三人、一人一人にエッジの立っていて、主人公の黄昏に限らず家族全員が主人公として成り立つと同時に三人がトラブルメーカー。物語全体が終始賑やかで、時として家族の絆を見せる、ジャンプ”らしい”王道の楽しさを感じさせてくれる漫画です。

会社員 / 佐藤優

- スパイと殺し屋と超能力者で擬似家族を描くという、設定の時点で面白い上に、作画も良いし1話毎にしっかり起承転結を作る構成力も凄い。ワクワクさせられるホームコメディ

システムエンジニア / 三浦佑樹

- 夫：一流スパイ。 妻：凄腕の殺し屋。 娘：超能力者。という三人が、各々とある任務のためにニセの家族として暮らすことになるコメディタッチの物語です。互いが互いの正体を知らずに家族を演じていくという危うい状況を取り巻くスリリングな事件と、スペックの高いそれぞれが優秀すぎるが上に招く予想外のトラブルが楽しい作品です。お話のテンポ、キャラクターの表情、アクションの迫力、どれをとっても一級品。『TISTA』や『月下美刃』の遠藤達哉先生の作品がまた読めることがファンとしてただただ嬉しいという個人的な思いもあります。家族もの、人情ものとしての側面もあり、万人にオススメできる傑作です。

アニメイト秋葉原 キャラクターグッズ担当 / 岡部 真矢

- どこかで読んだことのある設定な気がするのに、引き込まれていく。偽装家族の夫はスパイで、妻は殺し屋、だがそれを知っているのは超能力者の娘だけ。とにかくキャラクターが魅力的。

SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

- このマンガがすごいでも選ばれたのでどうしようか悩んだのですが、設定×キャラクターがとても魅力的で面白かったので、やっぱり選んでしまいました。コミカルな部分、シリアスな部分、ハートフルな部分が巧い具合に融合し描かれていて飽きない構成で楽しく読める作品だと思います。この「偽」家族が本当の家族となっていく姿を今後も読みたい。

三省堂書店海老名店 コミック担当 / 近西良昌

- このファミリー（偽物）が本当のファミリーになっていくのが気になる作品です。

販売員 / 八重田幸子

- 設定は特殊能力持ちだらけの偽装家族ですが、物語の進行と共に本当の家族になっていく過程も楽しめておりますストーリーやギャグセンス、キャラクターとバランスのとれた構成に人を飽きさせません。絵も素晴らしく綺麗で読みやすく最高の作品でした。

HAIR MAKE LOUNGE tetote 代表 / tetote 代表 力丸 真

- 孤独な凄腕スパイの任務は家族を作ってお受験！個性的な偽装家族とのほっこりエピソードが楽しめます。クールな主人公がどんどんホットにキャラ崩壊してる様が見どころです。

漫画家専門鍼灸師 / 碓氷麻里子

- 父はスパイ、母は殺し屋、そして子どもは超能力者。真実を全て知っているのは子どもだけ。インパクトのある設定とテンポの良い展開で読み進める手が止まらない作品です。

会社員 / 工藤圭

- スパイ、テレパス、殺し屋。かなり個性的な登場人物が繰り広げるストーリーは、心地のいいテンポで進む。各々の個性ならではのすれ違いや、やり取りが面白く、読みながらつい口角が上がってしまう。ポジティブな読後感を得られる作品である。

元書店員 / 杉 佳尚

- 「THE・王道！」みたいな作品を好まない自分なので、最初は思い込みで「こういうのは苦手だろうな～」と思いながら読み始めたのだけれど、痛快でおもしろい。各主要キャラの設定に対するアホっぷりに疑問はあれど、作内全体で均等に崩れていることによって、それはそれで愉快で良い。

イロイロ屋 / 杉本善徳

- 偽装家族、血のつながりが無い家族の物語なら過去にも数々あったりするし、平凡なサラリーマンや普通の主婦に見えて、実は凄腕のスパイだったり傭兵だったりする話も過去に数々あったりする。けれども、方やスパイでありこな殺し屋でありながら、それぞれが素性を明かさず目的も異なっているにも関わらず、家族として暮らし始める話は珍しいかもしれない。なおかつスパイはその国を脅かそうとする存在で、殺し屋はそうした脅威を排除する側にいる。知られたら血で血を洗うような殺し合いが始まってでも不思議ではない関係が、まとまっているのは間にひとりの少女がいるからだ。名をアーニャ。人の心が読める超能力者だ。父親のロイド・フォージャーが“黄昏”と呼ばれるスパイであることも、母親になったヨル・ブライアが“いばら姫”とあだ名される殺し屋であることも、アーニャは2人の心を読んで知っている。けれどもまだ幼く、捨てられることが怖く、何よりスパイや殺し屋といった存在に強い好奇心を抱いていることから騒ぐことなく逃げることもなく、2人の娘として振る舞っている。どうしてそんな家族ができたのか。ロイドが東国に潜入したのは、政治家で一党を率いるドノバン・デズモンドに接触するため。用心深いドノバンに会うには、名門イーデン校で行われる式典に、ドノバンが息子のダミアンを見に来る場に居合わせなくてはならない。そのためには自分のこどもをイーデン校の生徒にしておくてはならない。ロイドは東国で養子を探し、妻を娶う必要があっという間と探した結果、超能力者のアーニャが娘となり、殺し屋のヨルが妻となった。いずれもそうとは知らず。そんな、誰もが素性を隠してひとつの目的のために協力し、家族を演じるうちにだんだんとアーニャに対する愛情や、ヨルなりロイドなりへの関心も高まって、家族のように見えていく展開が、遠藤達哉の「SPY×FAMILY」(集英社、1～3巻各480円)のひとつの読みどころだろう。イーデン校に入るためには試験を突破しなくてはならない。そのためには厳しい面接を通過しなくてはならない。そんな時に見せたロイドの準備のすさまじさ。そこまでするかというたたまかけがおかしくもあり、それくらいしなくてはスパイとして活動は不可能だという示唆も得られる。一方で、アーニャが危険な目にあった時に見せるヨルの体技のすさまじさ。ふだんは天然に見える美女が緊急時に見せるアクション描写も見所だ。外務省に勤めていると思われたヨルの弟が実は……といった描写も挟まり、ロイドの正体、ヨルの本業がいつ露見するかといったスリルがあり、また本来の目的であるドノバンとの接触のために、アーニャが式典に参加できるだけの成績がとれるかを見ていくワクワク感もあってこの先、どんな広がりがあるかを期待してしまう。というか、あれだけの足技なり体術なりを見せてどうしてロイドは気付かないのか？そこはそれ、フィクションを楽しませるためのお約束。家族を装ってアーニャを優等生に仕立て上げ、ドノバンに近づくことだけに集中して他がおろそかになっているのかもしれない。そう思おう。すべての事が終わったあとにロイドとヨルとアーニャは本当の家族になれるのか。そもそも家族とは何なのか。そんな問いへの答えをいつか知りたい。早くなくてもいい。さんざんっばらドキドキさせハラハラさせてくれた方が、得られる答えも感動的になるだろうから。

書評家/ライター/タニグチリウイチ

- スパイ(父)、殺し屋(母)、心が読める(娘)のひょんなことから偽装家族ごっこに目が離せない！理想の家族になれるのかしら？

女優・ジェネラリスト/大倉照結

- 昨年の数あるコミックランキングに常に入っている肩書きは伊達じゃなかった！あまりこの手のマンガは得意じゃなかったが、読まず嫌いはいけないと反省。今ではアーニャの可愛さに殺られております。

LIBRO PLUS / 土屋修一

- 簡単に言うと『ミスター＆ミセスミス』と『スパイクッズ』を混ぜた話。そこに超能力を持つ設定や多彩な登場人物たちが現れ周りを彩っている。とは言えお互いの秘密を知られちゃいけないというのがドキドキはやっば確実。さらにラブコメ要素も満載だし、このバランスは癖になる。今後の展開が楽しみな漫画だ。

October Beast・代表 / デザイナー / 北山友之

選考員コメント・2次選考

- 文句なしにおもしろいし楽しい。秘密を抱えた3人が、秘密を抱えたまま絆を深めあう。家族になっていく。その秘密から生まれるトンデモ展開に爆笑。すべてをさらけ出して分かり合っているわけじゃない。でもたぶん3人が求めているものは同じ。無意識で心は一つ。唯一無二のステキファミリー爆誕。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

- 目立たぬよう、普通の夫・普通の父親を演じるスパイ<黄昏>。スパイとして有能すぎる故か、世間的には普通以上の良きパパ良き夫になってる気もしますが…。この漫画を枕元に置かれたお父さんは、家族サービス頑張ってください。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店コミック担当 / 山本さとみ

- やっぱり最後は王道路線かなと思います。と、いいのですが、1位も2位も3位もどれが順番変わってもおかしくないです。実際3回ぐらい順番変えたんですが、結果的に王道が1番になりました。自分の中で。

スタジオフーズ 代表取締役 / 小林智之

- ありそうでなかった展開。心がほっこり、ニヤニヤ止まらない。この偽家族がホントの家族になったらいいのに！と読みながら純粋に応援したくなります。とにかく1巻から面白くて今期一番注目作品！

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

- 主人公の疑似家族や、周囲の人間たちのキャラ設定の凸凹が見事にかみ合ってお話を転がしてゆく。一分の隙もない上手さに感嘆した。まさにグッドエンターテインメント！

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

- 近年では珍しい王道のシチュエーションコメディに挑み、大胆な設定と巧みなプロットを両立させた成功作。過渡的な環境（キャラクター配置）のポテンシャルを何処まで活かせるか見届けたい。

ライター / 福井健太

- 2019年、文句無しのナンバーワン！設定も世界観もキャラもお話もすべて最高！何より絵が本当に上手で、丁寧な絵柄でありながら躍動感がとてもあります。小さい頃にわくわくしながらマンガを読んだ、素敵な気持ちを感じられる作品です。顔芸がたのしいー！

デザイナー・シンガーソングライター / 平松新

- まだまだ、これからの作品だと思うが、現時点ですごく面白い。アクションシーンも、コメディなシーンも独特のトーンでワクワクします。

広告会社 ブランナー / 平沼良章

- 家族3人のキャラクターが立っていてとても楽しかったですし、ストーリー構成や作画も素晴らしい、すでに広まっている作品だと思うが、また押しです

HAIR MAKE LOUNGE tetote 代表 / 力丸真

- アクションがカッコよくて、ロマンチックで、家族愛があって、そして、笑える要素もあって、と、盛りだくさんの要素が、スタイリッシュに品が良くまとまっていて、読むのがとにかく楽しかったです。まさにエンターテイメント！という感じのマンガだと思います。どの要素もとてもレベルが高くて、どんなジャンルのマンガというのが難しいのですが、個人的には、ちょっと古風なロマンティックな人間模様が好きです。多分、時間をかけて読むと、また別の見え方する気がします。とにかく楽しい気分になりたいときにおすすめのマンガです。

システムエンジニア / 廣瀬 公将

- すでに一次でも推している作品なので繰り返すなら、偽装家族、血のつながりが家族の物語なら過去にも数々あったりするし、平凡なサラリーマンや普通の主婦に見えて、実は凄腕のスパイだったり傭兵だったりする話も過去に数々あったりする。けれども、方やスパイでありこな殺し屋でありながら、それぞれが素性を明かさず目的も異なっているにも関わらず、家族として暮らし始める話は珍しいかもしれない。それが遠藤達哉の『SPY×FAMILY』（集英社）というマンガだ。スパイはその国を脅かそうとする存在で、殺し屋はそうした脅威を排除する側にいる。知られたら血で血を洗うような殺し合いが始まって不思議ではない関係が、まとまっているのは間にひとりの少女がいるからだ。名をアーニャ。人の心が読める超能力者で、父親のロイド・フォージャーが“黄昏”と呼ばれるスパイであることも、母親になったヨル・ブライアが“いばら姫”とあだ名される殺し屋であることも、アーニャは2人の心を読んで知っている。けれどもまだ幼く、捨てられることが怖く、何よりスパイや殺し屋といった存在に強い好奇心を抱いていることから騒ぐことなく逃げることもなく、2人の娘として振る舞っている。東国の政治家で一党を率いるドノバン・デズモンドに接触するため、彼の息子と同級生になる娘と母親となる妻が必要だったロイド。スパイと間違われないために結婚する必要があったヨル。それぞれが事情を抱えて良き父、良き母を演じつつ一方でスパイとして暗躍し、殺し屋として殺戮する2人の才能が仕事に、そして家庭に発揮される展開がどうにも面白い。そして、家族を演じるうちにだんだんとアーニャに対する愛情や、ヨルなりロイドなりへの関心も高まって、家族のように見えていく展開も読み所。すべての事が終わったあとにロイドとヨルとアーニャは本当の家族になれるのか。そもそも家族とは何なのか。そんな問いへの答えをいつか知りたい。

書評家 / ライター / タニグチリウイチ

- キャラクター、お話のテンポ、スリリングな展開、何処を取ってもオススメできる傑作です。コメディタッチで進むお話ですが、どこかで訪れるかもしれない大きな転機にハラハラしながら読んでます。

アニメイト秋葉原 キャラクターグッズ担当 / 岡部 真矢

- 凄腕スパイの主人公・黄昏、必殺の女殺し屋・ヨル、人の心が読める超能力者の女の子・アーニャ。三人は疑似家族となり無理難題なトラブルを次々に解決をしていく、どたばたホームコメディです。中々突飛な設定の三人ですが、それぞれに弱点があるので親近感を感じられます。絵柄もスタイリッシュで読み易く、何より話が分かりやすい！この物語で三人が家族になった動機は打算に他ありませんが、随所できちんと愛情がにじみ出るシーンがあり、しっかりツボを抑えてきます。実に王道な漫画だと思います。

会社員 / 佐藤優

- 久々に出た、老若男女、小学生から大人までに勧められるマンガ！ひゃっほい！優秀なスパイの『黄昏』さんが任務で家族を持たなくてはならなくなり、用意しようとした子供と奥さんが実は……、というお話なんだけど、とにかく読むと幸せになる、出てくるみんな明るくて元気で話が面白い！あと黄昏さん（スパイ）とアーニャ（子供役）とヨルさん（奥さん役）が一生懸命で誠実で（スパイなのに！）かわいくて、ほっこりして、読んでいるとどんどんこの家族が好きになっていく。子供はきっとこのマンガの良さに自分で気づくから。疲れた大人にお勧めしたい、読ませたいマンガ第一位。

書店員 啓文堂書店 / 山川美香

- 友人に「スパイファミリー面白いよ」と言うと「意外！好きじゃなさそう！」と言われます。最初、自分でも「苦手そう」と思っていたのですが、食わず嫌いはダメですね。テンポ感が良いんですよ、とにかく。面白いです。そして愛らしいです。

イロイロ屋 / 杉本善徳

- 面白い！ お互いに正体がバレないように必死で家族の演技をしているのにバレてもおかしくない。笑いとシリアスな部分が絶妙なバランスで描かれていて、「次はどう出るのか…」「まさか、そうくるのかぁ！？」と思わぬ展開があり楽しみでなりません。

販売員 / 八重田幸子

- アーニャがかわいい。

明文堂書店 商品部 / 木村 俊介

- それぞれ秘密を抱える夫・妻・子が集って演じる疑似家族ものに、冷戦時の東西ドイツを舞台にしたかのようなスパイアクションが組み合わされるすごい設定なのに少年誌掲載のコメディでもあるという、とにかく今後の展開から目が離せない作品。なるほど、こういう超能力者の使い方があったのか…

会社員 / 矢野耕次

- TISTA・月華美刃から注目していた作者であったが、ついに作者の絵柄とストーリーにベストマッチした作品が生まれたように感じる。主要登場人物全員に愛嬌があり、読んでいてほっこりした気持ちになる。

会社員 / 齋藤隼

- 設定がとても面白い。怖いテーマなのにほのぼのしている。かわいいマンガ。

PENICILLIN / HAKUEI

- この作品も色々なところでお薦めされていましたが、今回きちんと読んだところめちゃくちゃ勢いがあって、今年らしい一作ではないかと感じました！ギャグもストーリーもキャラクターのかわいさもかっこよさもかっこよくなさもてんこ盛り。まだ三巻なのにエンタメがぎゅぎゅっと詰まってまったく飽きません。疑似家族それぞれがお互いの物騒な本性を知らないというすれ違いコントのようなストーリー。個人的には大好きです。笑 このフルパワーのまま突き抜けてほしいし、まだ読んでない方にはパワフルな漫画を堪能してほしいです。

公務員 / 宇田川結衣子

- 間違いない面白さ！ 男女問わずオススメです。「アニメ化するなら、声優さんは誰にする？」と語り合いたい。それだけキャラ達が生き生きしてるんだなあと痛感。このままノリノリで話が進んでいくのを楽しみにしています。

漫画家専門鍼灸師 / 碓氷麻里子

- それぞれのキャラクターが内に秘めてる秘密（それぞれが結構大きい）が複雑に絡みあってひとつの日常を演じているけれども、決して難しすぎず、むしろグイグイ読み進めました。それは娘役のアーニャの存在によるところが大きいと思いました。ネタバレが致命的になる本作ではあまり詳しく感想は書けませんが、とにかくアーニャというキャラクターの成功がすなわち本作の成功と言ってもいいのではないのでしょうか。

医師 / 岸本 倫太郎

- もう既に売っていますが。この漫画の面白さはそれぞれの視点から楽しめるということかもしれない。裏社会で活躍する男スパイ×暗殺を生業とする女殺し屋×心の声が聞こえる女の子。この他人が利害の一致で家族となることがとても面白い。ドタバタはあるが、段々と惹かれあっているのもわかる。仕事も大事だけど家族も大事、果たして今後この夫婦がどう選択して、そしてどうアーニャが中和（絡んで）していくのか、楽しみに続きを待ちたい。

三省堂書店海老名店 コミック担当 / 近西良昌

- 第一巻発売の時のインパクトはすごかった。とにもかくにも面白いマンガ。今年はやっぱり本作をはずすことはできないかな、と。

元書店員 / 金田健太郎

- この勢いでどこまでも突き進んでほしい！どのキャラクターもかわいいだけでなくひと癖あり、魅力的です。

会社員 / 工藤圭

- 連載が楽しみな作品です。凄く王道な少年マンガじゃないかと思います。

ブックファースト新宿店 / 渋谷孝

- シュチュエーションが大好き。それぞれに突出した力を持つ登場人物が今後どう交わっていくのか楽しみな作品。

ロングランプランニング株式会社 / 小森和博

- かまずに楽しめる作品。キャラクターの絡み合いが面白い作品

自営業 / 小野ゆうこ

- とにかくみんなキャラがいい。バランス感もストーリーも！誰でも楽しめる作品。

ブックエース上荒川店・コミック担当 / 倉本かおり

- 一巻発売時から順調に売れ続く作品。小気味いいテンポで読み進められる。鬼滅の次はこれ！だと思っています。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

- 可愛い絵柄とテンポのいいストーリーにほのぼのしました。疲れた時に読むときっとより癒やされると思います…。アーニャがとにかく良い子が可愛い～！

会社員 / 畑中瀬路奈

- 主人公はスパイ。偽装結婚の妻は暗殺者。養女は読心エスパー。互いの秘密を明らかにせず、同居をしている偽りの家族の、いやある意味、だからこそ家族として形成されていく物語。映画でいうと『スパイキッズ』や『ミスター&ミセスミス』を足して割って『七瀬ふたたび』を足したような。現行で登場人物たちがどんどん増えていき、恋愛モードにも突入。ますます面白くなる今後にも期待大！

October Beast・代表 / デザイナー / 北山友之

マンガ大賞2020 ノミネート作品

週刊少年ジャンプ / 集英社

「チェンソーマン」藤本タツキ

選考員コメント・1次選考

- 設定やストーリーはよくありそうな感じなんだけど、独特のアバンギャルドなセンスで他とは一線を画していると思う。ダークファンタジーでありながらキャラクターの人間臭さもすごい。とにかく素直に面白い。

PENICILLIN / HAKUEI

- かつて優秀な青年が最強の悪魔と合体してデビルマンとなったが、現代日本では、貧しく愚鈍な少年が小悪魔と合体してチェンソーマンとなる。キスの最中に女性がゲロ吐くマンガがジャンプに！！

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

- 台詞での状況説明がほぼなく、会話のテンポが楽しい。戦闘シーンではバンバン効果音が聞こえてきて、絵だけのシーンでは美しい音楽が聴こえてくるよう。まるで映画。読んでいるという感覚がない。でも、漫画で見たい。

声優 / 富岡美沙子

- デビュー長編「ファイアパンチ」では冷めた諦念の奥底で熾火のような怒りがずっとくすぶっているように感じていましたが、少年ジャンプ本誌掲載となった本作ではその怒りがいい意味で単純化され、回を追うごとに少年マンガという形式になじんでいくのが感じられます。孤独も悲しみも残酷な世界への怒りもすべてひっくるめて喧嘩としてしか表現できないやさくれた不良少年のように優しいマンガ。

会社員 / 末永龍介

- 絶妙のハンドリングで王道のチョイ横を走り、ベタの直撃を回避する。もういいかげんやりつくされていると思われがちな「異能力バトルマンガ」でここまでオリジナリティ発揮できるのすごい一言。

株式会社ヴィレッジヴァンガードコーポレーション 店舗開発課 / 大山 敏樹

- ひとつのジャンルを形成した観もあるアンモラルな現代ダーク・ファンタジーだが、物語のスピード感、刹那を描く漫画的演出の鋭さでひとつ頭が抜けている。どこまで突っ走れるのか見届けたい。

漫画読み / yama-gat

- 「ファイアパンチ」のときから目が離せない作家さんでしたが、「少年マンガ」っぽさを提げて週刊少年ジャンプ誌上に殴り込んできたのめっちゃくちゃよいですね。欲望に忠実な主人公、共感しかないので悪魔退治がんばってください！！

オリオン書房ノルテ店 / 池本美和

選考員コメント・2次選考

- ぶっちぎりで面白い。ぶっ飛んだダークファンタジーなのに隙がないセンスとキャラクターの魅力が素晴らしい。

PENICILLIN / HAKUEI

- ひとつのジャンルを形成した観もあるアンモラルな現代ダーク・ファンタジーだが、物語のスピード感、刹那を描く漫画的演出の鋭さでひとつ頭が抜けている。どこまで突っ走れるのか見届けたい。

漫画読み / yama-gat

- 正義ではない心、まっすぐではない努力、ゆがんだ友情、きれいごとだけではなく、人間の汚い部分も盛り込んだヒーロー漫画だと感じます。とにかく先の展開が読めないアツい作品！

会社員 / モチツキカズヨシ

- 今年は選考の際に非常に悩みましたが、チェンソーマンには画の迫力、意外なストーリー展開、何より設定の面白さがあり、選ばせていただきました。とても面白かったです。

株式会社スマイルアクス・営業大臣 / 岡村光徳

- 悪魔と人間がせめぎ合う現代世界、人と悪魔が融合して生まれた主人公チェンソーマン。この世のドン底を突き抜けた様な、最低最悪の環境で生きてきた主人公は、悪魔を退治するデビルハンターとして生まれ変わります。令和版のデビルマンのような雰囲気を持っている漫画で、この先どこに向かっていくかは、まだ全く分かりません。ファイアパンチでお馴染みの藤本タツキ先生らしい、退廃的で虚無感に襲われる空気感、他の作品ジャンプ漫画とはどこかずれてる感じがユニークで引き込まれます。

会社員 / 佐藤優

- やりたい放題いいじゃないですか。これが週刊少年ジャンプで毎週連載されている世界線最強。海外実写化大希望。製作費はぎりぎりまで削っていただいて。よろしくおねがいいたします。

オリオン書房アレア店 / 池本 美和

- ぶっとんだキャラが多いけどバランスがよく、会話のテンポが楽しい。映画のような場面転換や話し言葉での台詞が素晴らしいなと思います！

声優 / 富岡美沙子

- 悪魔と契約を結んだ主人公デンジの心はすでに悪魔と化しつつあるのに、時折人間らしいピュアさがある（それとて生き物の本能からきているのかもしれないけれども...）。前作「ファイアパンチ」であったアメコミと本格スプラッターの融合は本作でより顕著となり、『ヴェノム』のような表現と、『死霊のはらわた』『悪魔のいけにえ』のような残虐さが合わさり、観る者へのドキドキを誘う傑作へと昇華された。不愉快に感じる部分も含めて音楽に例えるとグランドコアのような作品だ。あ、もちろんこれは誉め言葉。最高！

October Beast・代表 / デザイナー / 北山友之

- ファイアパンチが最高だったのになんであんなに人気がないのかという復讐心を込めてこのマンガが1億部売れる世界になってほしいです。ばわー！！！！

作家 / 海猫沢めろん

- 作者の前作もものすごい吸引力で世界に引き込まれたが、今回はさらにブラッシュアップされ、前作よりもっとずっと多くの人に受け入れられやすい、読みやすい作品になっていると思う。この先の展開が楽しみ。早く続きを読みたい！

三省堂書店 / 内野智未

- ガッツリと激しい描写をしてるのにどこかあっさりした読後感が好きです。色んな建前に縛られず「ただ生きる事」を第一に脇目をふらず「欲求に正直に」「幸福を求めること」。そんな主人公の姿こそ現代を生きる多くの読者にとって一番刺激的で一番ヤバイ奴で一番カッコ良く見えるんじゃないかと思いました。それをあのドロドロのスパッとしたダイナミックな画面で描かれたら思春期の多感な子には堪らないだろうな。影響受けまくって普段の言葉遣いが悪くなくても致し方あるまいと思いました。

デザイナー / 金輪英恵

- 主人公が、ずっと悲しい。それがすごくいい。「ジャムを塗ったパンが食べたい」「胸を揉みたい」という「夢」が、かわいくて、おもしろくて、どうしようもなく悲しい。見ていてずっと胸が痛い（のがいい）。ほかの人も、みんなそれぞれ悲しい。1巻末のおまけマンガの「かさぶたくれ～俺食べるから」は後世に残る、笑えて怖くて悲しいセリフ。絵も、ただ「うまい絵」なのではなく「マンガの絵」として完璧だと思う。著者が背景も含めたこの空間自体を描くことをおもしろがっているようなところもあって、リアルなのに何か狂っていて、ずっと悪夢の中にいるような気になってくる。

ライター / 門倉紫麻

- 同雑誌に連載中の「僕らのヒーローアカデミア」が「陽」なら此方の作品は「陰」だと思います。前作「ファイアパンチ」もそうでしたが、引き込む力が本当に凄まじい漫画家さんです。キャラクターデザインが毎回素晴らしく、愛着が湧いた頃に…「え!!!!」という感じ。。気付けば前作同様ハマりまくっています。「目」や「表情」の描き方が独特で、笑顔なのに怖い、次にどんな行動を起こすのかが読めず毎回不安な気持ちにさせられます。少年ジャンプの漫画を沢山読んで慣れているからこそ大きくショックを受けてしまうのでしょうか。一体どうなるのか？そんな危うさも魅力的で、きっとこれからもずっと作者の漫画を追ってしまうんでしょうね。

バンドマン / ターシー

- カッコいい！エグさと軽さのバランスが読んでいて気持ちいい。単純に絵作りとセンスとキャラが好み、それだけで選びました。

(株)来知・WEBデザイナー / 河本 智芳

- デンジくんバカカッコいいです。おっばい。

マンガ研究 / フリーライター / 会田洋

- 出てくる女子がみんなエロかわいい。そして山盛りのバイオレンスと血しぶき。いかがわしいが、そこが最高。

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

- 悲惨な環境で育った主人公が、偶然「異能」を得て世界の命運を握ることとなり、他の異能者たちと戦う中で使命感に目覚めてくるという筋書きは、いかにも少年ジャンプ的。しかし、最強とされる「銃の悪魔」を筆頭に、人が恐怖すればするほど強くなっていくコンセプトと、B級映画を思わせる、実写化すれば非常に映えそうなグロテスクな造形の悪魔、丁寧に書き込まれたキャラクター、予想できない死が続くストーリー展開で、読み応えのある作品となっている。

弁護士・三村小松法律事務所 / 三村 量一

- この世界で彼らに求められている振る舞いを見ていると、月並みなコメントながら登場人物が全員イカれている。なのに刹那的には感情や欲求が自分に通じるところがあるのがおっそろしい。う~~~~ん！

往来堂書店 / 三木雄太

- 刹那的で、切なくて、心が揺さぶられるけど、重くない。改めて一気に読み返すと、味わい深い作品だと思います。

教師 / 持丸宏司

- いわゆるグロい表現が苦手な自分だが、この作品は好きだ。欲望にまっすぐな主人公に惹かれ、先の読めない展開に導かれる。その予測不能な展開の中、感情や信念を表にする登場人物たちに魅力を感じた。戦闘シーンのスピード感や大ゴマ・見開きの迫力は圧巻。これから話はどのように進んでどんな結末を迎えるのか。一読者として期待して追いかけてたい。

元書店員 / 杉佳尚

- 『ファイアパンチ』もトンデモねえ漫画だったけどこいつもトンデモねえ漫画じゃんよ『チェンソーマン』です。読んでてすげえなって思うのは『ファイアパンチ』でもそうだったけど、奇想がそのまま絵になってる漫画になってるあたりです。そりゃ頭やら腕やらいろんなところからチェンソー生えてますからね、もう絶対にろくなことしないでしょコイツ。破壊活動以外のことしななそう。仲直りの握手だよって言われてもチェーンソーでぶった切る様が見える。コアとなってアイデアがきちんとキャラクタとして立って歩いて暴れてる。いろんな意味で強い。強烈です。すげえと思います。あともういっこ、俺がすげえなって思ってるのが現代性です。現代性っていうか、今この空気感？自分やみなさんがおそらく感じ取っている（けど、言葉にはしていない、あるいはできない、ナニカ）をつかみ取って、きりとして、漫画として表象しているように感じるところです。俺の妄想かもしれませんが。それは、ある種の酷薄さ、残酷さ、雑さ、として表れているように感じます。キャラクターの知性のなさ、教養のなさ、幸せを想像したり、感じ取る力の無さ、扱いの軽さ、そういうところ。それっておそらく、ここ10年か10数年かで醸し出されてきたものだと俺は感じていて、それをすくい取って、漫画にしている。そんな気がするです。すげえと思います。

ソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

- ぶっ飛んだキャラばかりの友情努力勝利…!?

明文堂書店 商品部 / 木村 俊介

- ストレートど直球な漫画な印象です、なのに先が読めないストーリー、好き嫌いが分かれるかも知れませんが私は好きです

HAIR MAKE LOUNGE tetote 代表 / 力丸真

マンガ大賞2020 ノミネート作品

月刊アフタヌーン / 講談社

「波よ聞いてくれ」 沙村広明

選考員コメント・1次選考

- 遅ればせながら、ようやく波長が合ってきました。波だけに。予定調和かと思いきやの奇想天外な展開、丹念な取材による情景描写、そしてじわじわくる笑い。これ書いてても思い出し笑いができます。北海道にご縁があれば、更にディープに楽しめるかもです。

衆議院議員山尾志桜里事務所政策担当秘書 / 三葛敦志

- 面白さを伝えるのが難しい作品だと思うんですが、これだけ面白いセリフが続く漫画も珍しい、ということはとりあえず言えるかと思います。そもそも何かを成し遂げる作品ではないように思いますし、主人公鼓田ミナレも嵐は呼ぶが良い結果はつかめないから人生の残念度はどんどん上がるし。でもようやく、7巻にしてラジオの意義が問われるような話の展開になってきたようなので、今後の期待値がさらに上がってきました。

会社員 / 林 礼春

- 世の中のモテない女には2種類あります。1つは、着てはもらえぬセーターを涙こらえて編んでるような悲しさや思い出を美しいまま胸に秘め、ひっそりと過ごす女。もう1つは、酔った勢いで、なんやかんやあり公共の電波で「光雄！お前は地の果てまで追いつめてでも〇〇す！」と叫び、悲しさや思い出や殺意を熱意に変えて前へ進む女。どちらが美しく素敵かは人それぞれですが、一緒にいてすげー楽しいのは後者だと思います。そんな女を楽しむ漫画です。沙村さん、無限の住人のイメージが強かったけど、女の心理描写が巧みすぎて女性ではないのかと思うくらい。昔の男に会うときにあえて好みの口紅塗らないとか、思い当たる人いっぱいいると思う。

鳥取県 高等学校 教諭 / 佐川 由加理

- もう何年もこの作品に投票していて、毎回今が一番面白い！と思っている気がします。そういう作品です。

会社員 / 工藤圭

- 新刊買うたびに前の話をほとんど忘れてることに気づく…いや、本当に好きなんだけど。セリフの面白さのみで読んでるからかなー最新刊で急にシリアスな展開になる意外性も。沙村先生が現代ものでシリアスですか…それはそれで楽しみ！

株式会社ヴィレッジヴァンガードコーポレーション 店舗開発課 / 大山 敏樹

- ハチャメチャでむちゃくちゃなのに、何かリアルという、作者の天才的なセンスが炸裂している。グルーブ感があるというか、読んでいると深夜ラジオならではの妙なテンションに巻き込まれるような不思議な感覚になる。

丸善ジュンク堂書店 営業本部 / 小磯洋

- ひたすらに歪んだ己で世界に穴を穿て漫画。一応、小さなラジオ番組をめぐる冒険ではあるのか。けど、登場する人物すべてすべてがいちいちひねくれていて、世界にはこすからい悪意が満ちてて、その一筋縄で行かない様に、いやはやよく練られたものだと関心する他ない。巻数も伸びてそのうち『ベアゲルター』と合流するんじゃないかと思ってるが勝手に思ってたがぜんぜんそんなことはなくて結局しょうもない話に始終してくれそうで安心した。やっぱいいな、沙村広明描く悪意は。

ソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

選考員コメント・2次選考

- トンチキな話を綿密かつ精緻に描いてどこだかよくわからないところにたどり着いているのに説得力がある。そういうところが沙村広明のギャグの美質だなあ。

本読み / サイトウマサトク

- もう、入れざるを得ない！かつて平とじだった頃からのアフタヌーンっ子であり、その頃は自分がラジオのアナウンサーになるなんて思っていないで、正直言うチャンスほとんど無いけど千草忠夫とか大好きだし、となったら、もう、好きすぎて特別扱いしかできないので、投票をためらっていたのですが。専門分野がある作品はその分野の核が捉えられているかどうか。ラジオは突き詰めて言えば緊急報道だ、と射貫かれ、いまの現場の人間がホントは目を向けなくちゃいけないのに忘れたふりをしているかのような放送 / 配信という対立軸だったりとか、ラジオを聞いている人の「ああこの放送は自分の想像を超えないんだな」と見切るポイントとか、どんなジャーナリストよりも鋭い。それを、さらに面白満載の会話のやりとりで見せられちゃあ、もう、脱帽するしかないのです。そして、ラジオに期待してくれているってことがひしひしとわかりまして、マイクの前に座るのがめっちゃくちゃ怖くなってくるんですけど、逆に私もマンガにめっちゃくちゃ期待しております、ということをお伝えして、投票の言葉に代えさせていただきます。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

- 動きがカッコ良くて、演出がすごくて、ギャグに笑わされて、たまに良い事言ったりして、とにかく読んでいて楽しい、何度読んでも楽しい作品。スゴイ！

元書店員 / 金田健太郎

- 毎年ここがピークだろうと思わせては良い意味で裏切り続けてくれる作品です。たたみかけるような展開に翻弄されるのが楽しくなってきます。勢いナンバーワンだと思います。

会社員 / 工藤圭

- ストーリーの先が読める漫画が多い中（※主観です & それはそれで好き。）、展開がときにナナメかなり上に行く、目が離せない作品です。えええ、そこまで行っちゃって、どうするの？とハラハラすることも。主人公 27 歳独身女性の鼓田ミナレのトークも軽妙で、数ページに一度ニヤッと、数十ページに一度つぼります。電車の中や静かなカフェで読むのは危険。そういえば、2 年前に藻岩山は巡礼しましたお守り買いました頂上で自撮りしました。次はボイジャー（カレー屋）行きたいです。え？そんなお店はない？

衆議院議員山尾志桜里事務所政策担当秘書 / 三葛敦志

- 圧倒的なネームセンス。とにかく台詞が多いのに、読む勢いが最後まで止まらない。また展開もぶっ飛んでいて、次にどうなるか想像がつかないが、決して理不尽ではない。キャラクター全員にちゃんと人格があり、実在の人物かのような存在感がある。出し惜しみどころか、コレでもかと次々とネタを詰め込み繰り出し、疾走感と内容の濃さが同居しているすごい漫画です。

丸善ジュンク堂書店 営業本部 / 小磯洋

- 文字情報が多く、わたしにとって作品の世界観に入り込むまで、時間がかかったが、ひきこまれる作品だった。

自営業 / 小野ゆうこ

- 沙村広明氏作なのに人も死なないし武器も振るわない！さらに舞台は札幌の日常！なのに惜しみなく投入され続ける小ネタとパンチラインとともにフルスロットルで駆け抜けられる日常は融解ぎみになってくるものの、現実世界の認知的枠組みは壊れない絶妙な舵取り。本書の世界に浸り、ストーリー展開などもはや気にならない域に達したとき、ラジオ放送というメディアに関する著者の熱くしかし冷徹な視座が読み手の心に刻まれる。

会社員 / 矢野耕次

- とにかく破天荒な主人公と、予想外な展開を見せるストーリーがたまらなく面白い！セリフの節々にあるラジオネタ的な痛快さや比喩のセンスも最高で、良い感じに下品なところもまた素晴らしい！1巻からすでに面白いけど、話が進んで徐々に主人公を取り巻く登場人物が増えていってからがまた一段と面白くなるので、是非最新巻まで一気に読みしてもらいたい作品です。

会社員 / 小野塚博之

- 正直に言うと、これまで4巻以後は積ん読になっていました。(買ってはいたのです。)沙村広明の「新境地」ではあるが、このまま話が広がるのかな……？と、やや疑問だったのですが、すいませんでした。今回続きを読んで、脱帽しました。仕事が忙しくて、つい距離を置いてしまった元カノに久しぶりに再会したら、とんでもなくいい女になっていて愕然、というような感じです。そんな経験は生涯一度たりとありませんが、「俺の話は長い」という、無職でニートの生田斗真がしゃべりまくるドラマが好きで毎回見ていましたが、本作のセリフの面白さはその上を行くと思います。しかも、巻が進むごとに、テンションがむしろ上がっている。空気の読めない変な女が、地方ラジオ局をただ暴力的にかき回すだけの話かと思いましたが、いや結局はそれだけの話ですが、全てのマスコミがインターネットという魔物にのみ込まれんとする中、ちゃんと放送の公共性・中立性・公平性の問題を取り上げていて、ふざけているようで非常に骨太です。7巻からは「災害報道こそラジオの本分」という困難なテーマに踏み込んで、志の高さにも感服します。もし『ヘアゲルター』が候補だったら絶対に推しません(でも個人的には大好き)、沙村さんがこの賞を取るとしたら今この瞬間、この作品しかないと思って1票を投じます。小島慶子さんの名言に「ラジオ道は獣道」というのがありますが、まさにそれを地で行く傑作です。

読売新聞文化部編集委員 / 石田 汗太

- 振り返ってみたら2016年から推してんなぁ…もういい加減に大賞とれよwわりともう言いたいことは言い尽くしてるからコメントするのが辛い。一次選考の言をもって来るなら「ひたすらに歪んだ己で世界に穴を穿て漫画」か。地方のごく小さなラジオ番組をめぐる冒険。登場する人物すべてがひねくれていて、世界にはこすからい悪意が満ちている。そんな彼ら彼女らが織りなすエピソードすべてが、呆れ果てて笑うしかねえなこりゃハハハ的な乾ききった微笑に満ち満ちている。その一筋縄で行かない様が、まっよくよく練られているというか、よくもまあそんなことを思いつくもんだと感心する方向にネジ歪んで、いやはやよく練られたものだに関心する他ないっすわ。

ソフトウェアエンジニア / 第式齋藤

- テンポ感にしろ、その視点にしろ、脳みその回転数にしろ、全てが三位一体となって、見事に溶け合っている。沙村広明さんの天才っぷりに、どっぷりハマらせてくれます。漫画の面白さは、突き抜けた上での作家独自のバランスをどう魅せてくれるかにあると思っているのですが、その点でも素晴らしいです。漫画好きにこそ薦めたい作品。この作品にハマった方は、同作者の「おひっこし」及び「ハルシオン・ランチ」も必読でっせ。

音楽家・「閃き堂」店主 / 谷澤智文

- 最高に暑苦しくてクドい。濃いなー！というのが第一印象。顔も濃いけど、人間関係も濃く、かつ込み入っている。理解して読んでいたつもりで、ときどき、思いがけない人にフォーカスが当たると戸惑って、既刊に戻って読み直すこともしばしば。でも、それがまた新しい発見につながったりもして面白い。そこでこの展開が来るのかーと大技をかけられ、投げ飛ばされる楽しさとあいまって、何度も何度も読み返したい一冊。

ライター／老年学研究者 / 島影真奈美

- 今回の再ノミネートは、納得のいくノミネートだった。ここ数巻の流れが兎にも角にも面白い。自分は単行本で読んでいるのだが、次の巻の発売が待ち遠しかった。ラジオをテーマにしたマンガが、ここまで話が飛躍するのかと。全回のノミネート以降読んでいなかった方には衝撃の展開。「まだ行くのかこの流れは」と強烈な何かをぶつけられてる作品。

デザイナー / 平沼寛史

- 主人公・鼓田ミナレのセリフの面白さが奇跡。セリフ回しをここまで素晴らしいものにするには作者に何か憑いてないと無理じゃないかと思うくらい。

会社員 / 林礼春

- 元ネタを知っていると会話の内容がより楽しめる、そんなトーク運びが毎回秀逸です。個人的に飲み屋内や酒がらみの会話内容が毎回オススメです。トンデモ展開に見えてしっかり作品テーマであるラジオが関わっていますし、登場人物達のセリフに感銘を受ける事も多いです。陰鬱・ギャグ・アクション…相変わらず作品の幅が広く作者のキャバに驚きます。作者の他作品もそうですが、あとがきやコミックスのカバー下のおまけも毎回楽しみにしています。活字のみで作者のエッセイも読んでみたいなと思いました。また、雑誌掲載時のラストページの編集者の煽り文?も楽しみだったりします。

バンドマン / ターシー

- 主人公ミナレの無自覚だけど、正直に突き進む人間力がイキイキと描かれているのが読んでいて心地よい。

ロングランプランニング株式会社 / 小森和博

- 一般に「筆圧」とは「文字を書くとき、ペンや毛筆などの先に加わる力」(大辞林)を指す。だが本作を読んでいると、「筆から放たれる迫力ある圧」という新しい語意を加えたくなる。一本一本が意志を持っているかのような強く細密な描線、それが見開きの隅々まで描ききられた一枚絵となったときの強烈な「圧」は文字通りまさに圧巻。最新7巻で描き込まれた鳥瞰風景の細密さには息を呑む。もちろん「絵」だけではない。膨大な文字量に込められた緻密なネタや練り込まれたセリフ回しの緩急にもドキリとしたり、クスリとさせられたり。「圧」と「細密」をひとつの作品に同居させた稀有な作品。最新の第7巻でも、物語のテンションはますます高くなるばかり。

有限会社馬場企画・編集者 / 松浦達也

- 本作の魅力は、「破綻」としか言いようのない主人公の存在を、物語のフレームの中でしっかりコントロールする作者の剛腕力にあると思う。しかしこの作者の本質はどちらなのか？ その謎がつい気になって、より読者を惹き込むように思うのだ。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

- 映像化間近の作品。時に予想を超える展開が魅力。無限の住人とまた違った魅力満載です！

本と文具ツモリ / 津守晋祐

- なんかこのマンガずっとランクインしてない！？ でもずっと1位にならない理由もわかる気がする……！！！ 賞なんかとらないでくれー！ でも取ってくれー！ という複雑な気分です！ きいてくれー！！！！

作家 / 海猫沢めろん

- はちゃめちゃ！ でもかなり笑える。このラジオ聞きたい… 勢いと笑いのセンスがすごいです

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- 気持ちいい疾走感、このパンク感、たまらないね！！ カラオケに行ってロックを歌い狂いたい気持ちに駆られる！！ (注・そういう漫画じゃありません) 絵のタッチが得意じゃないかも…と勤めた時呟いていた夫も、手を出したらクスクス笑い、プッと吹き出しながら速・虜！

フリーアナウンサー / 松尾翠

- ラジオのノリを漫画でやるとこうなるんだな。ほぼ全編めちゃくちゃなんだけどたまにものすごい真理の扉をひらいてしまうところが、わたしが沙村作品に執着してしまう理由なんかな…とこの作品でやっと気づいた。NO ラジオ、NO ライフということでひとつ。

オリオン書房アリア店 / 池本 美和

マンガ大賞2020 ノミネート作品

マンガクロス / 秋田書店

「僕の心のヤバイやつ」桜井のりお

選考員コメント・1次選考

- こじらせ系陰キャ男子の日常ものとしてこっそり楽しく読んでたら、いつのまにか両片思いきゅんきゅん系ラブコメになってえっえっと戸惑ってるうちにとんでもない騒ぎに（主に私の脳内と私のタイムラインの中で）。いまのマンガ文化を語るには Pixiv や Twitter で拡散される数ページマンガという形式ははずせないと思いますが、そうした形式が研ぎ澄ませてきた「感情がぐらつく一瞬」を捉えるという能力が長編作品として完璧なまでに昇華されていて、“感情の変化を丁寧に描いた” 抒情的青春マンガであると共に危険極まりないハートブレイカーです。

会社員 / 末永龍介

- すっかり学園恋愛モノに心ときめくことなどなくなったと思っていたのだけれど、あざといの極みのようなシチュエーションと、何よりも心理の描写がとてつもなく丁寧で、久方ぶりに漫画でキュンとしてしまった。多くを語らず、それでいて想像に委ねすぎてもいない。何度も言うけれどとにかく心理描写が素晴らしい、それに尽きる。

イロイロ屋 / 杉本善徳

- 近年、更新するだけで Twitter での話題の一角を担う恋愛コメディであり、キャラは配置などは伝統的な学園恋愛モノながら、昨今の学生の空気感というものを上手く描いており展開が待ち遠しい作品

住職 兼 ライター / 蟬丸P

- ツイッターマンガの中でも飛び抜けた作り込み。ありふれたラブコメ素材をここまで緻密かつ新鮮に仕上げられるとは。なんだかんだで一年間一番楽しく読んでたと思います。

マンガ研究 / フリーライター / 会田洋

- いわゆる陰キャあるあるな話なんですけど、それにしてもありえないような極端なキャラクターだらけで、良い意味で現実感ゼロで楽しんでいます。やってることは極端だから現実感ゼロだけど心の中でこういう妄想とか欲望って誰でも少しはあるのが、現実感ゼロなのに共感しまくれる作品になっているのかもしれない。

Migimimi sleep tight / 涼平

選考員コメント・2次選考

- テンポの良さもありつつ、丁寧なキャラ達のアクションに魅了されました。楽しい漫画は推しキャラが必ず出来るもの。もちろん神推しはゲゲゲの○太郎のごとき、陰キャヒーロー、京太郎！

漫画家専門鍼灸師 / 碓氷麻里子

- 振り返ってみると今年一番楽しく読んでました。山田と市川ふたりともかわいい。

マンガ研究 / フリーライター / 会田洋

- 今回の候補作品は学生服率が高くて、各作品を読むうちに青春に当てられた感がありますが、その中でも特に本作は中2男子のどうしようもなさの的確すぎるほど詳細に描いていて、その上、ちょっとずつ、しかし確実に甘酸っぱい方向に進んでいて、心地良く感情をぐるぐるん引っ掻き回されました。

医師 / 岸本 倫太郎

- 過剰なまでに丁寧に描かれた心理描写が、素晴らしいです。過ぎたるは及ばざるが如しなんて言いますが、過剰でもきちんとした目的のためなら意味があり、美学になるな、と。マンガを読む上で失っていたものというか、渴いてしまっていた部分に水を与えられたような感じがしました。

イロイロ屋 / 杉本善徳

- これは Web 連載の更新日を毎日確認したり、作者さんが唐突に Twitter に投下する単行本未収録の凶悪な掌編群に殺されている立場から書いてるのですが、第1話から読み直すと、山田と京太郎ふたりの距離感が変化していくダイナミズムにあらためてぶっとばされます。教室が、まちの雑踏が、図書館が、どんどんふたりだけの空間になっていく……。世界が加速度をつけて変わっていく……。これは一体なんなんだ、なにが起こっているんだろう。2巻あとがきには「人を好きになった時とその気持ちに気づいた時、初恋にはタイムラグがあるんだよ」などとさらりと書かれているのですが、あっ、もしかして「その気持ちに気づいた時」というのは、人生で一番美しい瞬間なのでは……。だとしたら、ここにあるのはもしかすると、生きることを、この世界を肯定する唯一の鍵なのでは……。つまり「好きだ」という気持ちに気づくということは。

会社員 / 末永龍介

- 好き嫌いはあるのかもしれないけど、絵がカワイイ。設定を見たときは一瞬嫌悪感で（ごめんなさい）無理と思ったけど、かわいっみんなかわいっきゅんとくるっ！メインキャラじゃない足立君の手紙の回も胸がふんわりあったかくなった。こういう男子いたよね？とまた学生みたいな恋愛したくなる、影響力を感じる作品！

会社員 / 西尾美里

- ツイッターのタイムライン上で熱狂的ファンがweb更新の度に身悶えしながら更新報告と感想戦を始める、非常に昨今らしい光景が繰り広げられるという希有な作品。しかしながら作りとしては手堅く古典的なラブコメに分類される当作品がなぜにここまで人々を魅了して止まないかといえ、やはり突出したキャラクター性によるところが大きく、漫画はキャラクターだよ！という意見に首肯せざるを得ない実例ではないかと思う次第。山田可愛いですよね。

住職 兼 ライター / 蟬丸P

- 出だしの市川くんは、ダークでサスペンスなキャラなのかと思いきや、ただ恋に悶える男子ではないですか。なんだかんだと天然な？山田さんに翻弄される市川くんのモノローグがまた軽快で楽しい。二人の絶妙な距離感がこちらもヤキモキさせられる。

SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

- ジャンルとしては十代向けの萌えマンガに連なる作品なのだろうけれど、ノミネートを機に初めて読んでみたところ、そういうジャンルが身近とは言えない世代にとっても、(控えめに言って)たいへん楽しめた。主人公の市川はカッターナイフを持ち歩くような中二病真っ盛りでクラスでは浮いているという設定ながら、じつは意外におとなでまっすぐ誠実ないい男子っぷりが早々と明かされ、そこが読者の思い入れを誘う。読モをしていてスクールカースト最上位ながらヒロイン・山田はラブコメの理想のキャラクター。この二人が図書室で過ごすもどかしくもかけがえのない時間をやさしくすくい取る作者(女性)の手腕がすばらしい。「この作品は『距離』『変化』『気付き』を丁寧に描いていきたいと思っています」(作者による1巻あとがき)。まさに。主人公の感情をきめこまかくフォローしていく少女マンガの方法論は、語り手の目線の中2男子のそれに転化しても有効ということを実証したような。Twitterの作者アカウントで随時掲載されるおまけマンガ(単行本には未掲載、作者自身によってモーメントでまとめられている)も、本編のキャラクターが生き生きと動いていていいんだよなあ。

日本経済新聞社 企画開発室 / 天野賢一

- こんな青春を過ごしたかったなあ……男子高出身の自分にとってはどんなことでも羨ましく思えるし、実際の経験がなくても共感したり、応援したりしながら楽しく読ませてもらえました！

会社員 / モチヅキカズヨシ

- 中2真っ盛り、ど真ん中ナウな主人公、市川。スクールカーストの底辺で彼は日々陽キャを憎みながら、恋をします。思春期の男女の、絶妙な距離感は読んでいて身悶えます。

会社員 / 佐藤優

- 毎回読むごとにドキドキしています。 なんてかわからないんだけど市川に自分を重ねあわせてしまっているんだと思う。 こんなクラスにいたかった……

Migimimi sleep tight / 涼平

マンガ大賞2020 ノミネート作品

週刊ヤングジャンプ / 集英社

「まくむすび」保谷伸

選考員コメント・1次選考

- 高校演劇という、独特で不思議な世界で青春する少女たちのお話です。主人公は漫画家を志していたけれど、高校進学とともに夢をあきらめようとしていた女の子。それでも「物語」を書くという魅力にとり憑かれ、奇妙なめぐりあわせから部員の少ないがけっぶち演劇部で脚本を書くことになります。主人公が書く脚本だけでなく、役者たちが演技を試行錯誤していく中で声の出し方、表情の作り方、姿勢、立ち位置などの演じ方で何がどのように伝わっていくのか、という高校演劇を題材にしながら、「伝えたいことを伝える難しさ・喜び」のようなものを優しくドラマチックに描いているように思えます。演劇をやっている / やっていた人だけでなく、表現すること、物語を作ることに関心がある人にはぶっ刺さること間違いなしの作品です。

アニメイト秋葉原 キャラクターグッズ担当 / 岡部 真矢

- 高校演劇を題材にした漫画。それに思春期を加えた青春漫画ともなっているこの作品。創作への気持ち、演じる気持ち、表現力、色々な想いが交差して描かれているので、胸に突き刺さる部分も多くありますが、読む手を止められません。挫折や苦しみを味わうとしても、前に進んでいく彼女たちを見届けたい。

三省堂書店海老名店 コミック担当 / 近西良昌

- 高校演劇をジャンプらしく熱く描いております。1話の導入にひきこまれます

システムエンジニア / 三浦佑樹

- 他のどんな演劇でもなく「高校演劇」をちゃんとやってるのに感心しました。キャラクターも魅力的で先が楽しみです。

元書店員 / 金田健太郎

- 離れて久しいかつて情熱の注ぎ先が、姿を変えて新しい表現に繋がる。誰かの力に、誰かが気づいてくれる。高校生熱いなあ、いいなあ。演劇って凄いなあ。気持ちを掴まれますね。マンガは、多くの人が伺い知ることがなかった世界の可能性を教えてくれる素晴らしい窓口だと思っていますが、その窓口の一つとしてお薦めできる作品です。

会社員 / 伊東敬祐

選考員コメント・2次選考

- 表現することの恥ずかしさ、表現したいことが伝わることの尊さ、誰かと表現することの難しさと楽しさ、そんなことがいい感じに生々しく詰まったお話です。高校演劇をやっていた人も、まったく縁のなかった人もきっと何かが刺さるマンガです。是非ご一読を！

アニメイト秋葉原 キャラクターグッズ担当 / 岡部 真矢

- 1話から引き込まれる、ジャンプらしい熱い高校演劇マンガ。成長過程が気持ちよく、登場人物皆が魅力的に描かれています。

システムエンジニア / 三浦佑樹

- いろんな方に読んで欲しいと思いました。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

- 高校生らしい不器用さや弱さをそれぞれが抱えつつも、誰かの力に誰かが気づき、支え、重ねて成長していく。普段の可愛らしさと裏腹にえげつなく描かれる感情も印象的で、そんな魅力ある人物たちがこの先で、いったいどんな舞台を作り上げ演じてくれるのか。馴染み深いであろうスポーツや音楽を題材とした作品たちとはまた違って、その先に「演劇」が待っているという、ストーリーの中で描かれるストーリーにも期待感が高まります。物語の「まく」はまだ上がったばかりなので、その「むすび」まで見届けるのが楽しみです。

会社員 / 伊東敬祐

- これまた青春漫画を選んでしました（笑）高校生活×青春×演劇。人から見られる恥ずかしさ、感じられる恥ずかしさ、演じる恥ずかしさ、そして怖さ。思春期の頃に感じる感情が巧く描かれていてとても良いです。高校生活にやりたかった事を後悔せずにやりきったかと言われると、そうでもない自分としては、この漫画に登場する主人公たちが、やりたいと思うことをやりきって欲しい、青春を楽しんで欲しいと応援したくなる気持ちが強いです。セリフもズシンと刺さるものもありますが、読みながら、むすび！負けるな！腐るな！という気持ちが走ります。おすすめです。

三省堂書店海老名店 コミック担当 / 近西良昌

- 「高校演劇」をすごく丁寧に描いていて、「あるある」感がたまらない。演劇をやりたくなる、見たくなる素敵な作品だと思います。

元書店員 / 金田健太郎

- 主人公は高校演劇部の脚本担当。脚光を浴びる役者モノはよく見ますが、脚本担当の目線から俯瞰した「演劇とは!？」が見えてきます。私は門外漢ですが、ストーリーもわかりやすく工夫されていて、今から楽しみな伏線もいくつか。でも、おっ！と驚くこともあり。これからの展開が待ち遠しいです。

衆議院議員山尾志桜里事務所政策担当秘書 / 三葛敦志

- 演劇が好きなので、これからの展開を楽しみな作品。

自営業 / 小野ゆうこ

- 演劇に興味がなかった私に、演劇部入っておけばよかった。。と思わせる熱さ。ストーリーの要所要所に爆発力があり、読んでいて爽快。

会社員 / 齋藤隼

- 自分の“好き”を表現する楽しさがある一方で、その表現が受け入れられない恐ろしさもある。後者を知ってしまうとその恐ろしさが勝ってしまう。非常に共感できる。一度は打ちのめされた主人公が周りの仲間と共に新たな創作に取り掛かる。自身が秘めていた熱量と意地を新しいステージで昇華させようとする主人公の姿、表情豊かな登場人物たち、日常パートと舞台パートの空気感の表現など非常に魅力的。“演劇”に触れることで変わっていく登場人物たちの今後の展開に目が離せない。

元書店員 / 杉佳尚

- この作品は知りませんでした。夢中になって読みました。ありがとうマンガ大賞。演劇マンガはけっこう増えてきましたが、「高校演劇」を舞台にしたものはありそうでなかった。主人公が「役者」でなく、「劇作家」志向なもの意表を突かれます。しかも、主人公たちが最初にぶちあたる大きな壁が、「高校生らしさ」という名の“空気”——つまり「表現規制」の問題とは、これもリアル。もしプロの世界が舞台だったら、むしろ発生しにくい問題のほずで、「学園青春もの」というフレームががぜん生きてくるわけです。本作のキモは、やはり天才型アクター・ジャズ子先輩の存在で、このキャラ造形もお見事。<もし君がここに立つというならば 私が君に新しい名をあげよう>——しびれますね。照明マニアのママ先輩もいい。ほぼほぼ、天才役者と天才演出家しか描かれていなかった「個人戦」的演劇マンガの世界に、「チーム戦」の面白さを導入しただけでも、賞賛に値します。

読売新聞文化部編集委員 / 石田 汗太

- 若者の夢に向かって頑張るストーリー、嫌いじゃない。漫画家を目指して、辞めて、そのスキルが次の物語へ。ノミネートで初めて読み、絵も広い範囲の方に読んでもらいやすいかなとオススメしやすい作品かなと思います。こんな学生生活だったらなかなかなと思いますが、発想的には学生に見えて大人の発想でできてるのかなと。この先どこに向かうか楽しみな漫画でした。

デザイナー / 平沼寛史

- 正直、知らなかった作品ですが、とても面白かったです。悶々とした劣等感と閉じこもっていた世界から、開放されていく主人公とそれを誘う友人先輩たちの絡みがとても面白かった。

広告会社 ブランナー / 平沼良章

- 人は自分の選択が正しいかどうかを他人にジャッジされ続けている。他人の評価に従って生きる。従うしかない。私たちは自分の選択を他人に共感してほしい。認めてほしい。正しいと思ったことを否定された時、自分が間違っていることに気付くこともあるが、否定されて考え直したりやり直したり諦めてやめようと思っても、それでもどうしても譲れないものがあつた時、それは絶対に貫かねばならないものだ。理由は分からないけど。他人の評価の中に「自分の幸せ」は含まれていない。「あなたのためを思って」と言う人もいるかもしれないが、その人にも自分自身にも何が幸せかなんて分かるはずないのだから。譲れない思いは貫かねばならない。分からないけど、それがいずれ世界を変えることもある。他人の評価を覆すこともある。たくさんの人を幸せにすることもある。誰かの人生を変えることもある。好きという気持ちは何より強い。高校生もそうじゃなくても私たちも、むすびちゃんみたいな顔して今日も生きてる。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

- 大好きだけど、力量が伴わず、たいてい主観で評価される分野とは厄介なものだ。自分の「才能」を信じ続ける胆力もそういつまでも持ち続けられるものでもないし、その一方で自分の才能に見切りをつけ、ルールを切り替える決断もなかなか下せない。ところが、自分が作り続けていたものが、目指していた世界とは違う分野から違う形で評価されたらどうだろう。「好きこそもの上手なれ」。そもそも興味が薄かった世界だとしても、才能は適切に評価され、磨き上げられることで輝きを増していく。ひそかにマンガ家を目指していた女子高生は高校演劇という舞台でどう評価されるか。2019年12月に、ここからグッと盛り上がりそうな第3巻発売。

有限会社馬場企画・編集者 / 松浦達也

- 保谷先生がついにここまで来てくれた！とても嬉しい！「高校演劇」というかなりマイナー（高校で演劇部の方、申し訳ありません）な設定の中、仲間との絆、ライバルの出現等青春マンガの王道をちゃんと進んでいる。脚本に注目している点も好評価。自分の知らない世界が楽しく理解できるという凄さを知った。本当に面白い！この作品！

LIBRO PLUS / 土屋修一

- 何者かになりたかったけど、なれなくて、なれないってわかってるけど諦めがついてるわけでもなかった、モヤモヤした時代がふわっと立ち上ってきて、恥ずかしいやら楽しいやら。わたしはまったく違う部活（運動部）だったし、通ってきたシチュエーションはまるで違うのに、共感ポイントが次々と現れる。登場人物が片っ端からかわいらしくて、応援したくなる一冊です。

ライター／老年学研究者 / 島影真奈美

- 人として大事なことは学生時代に培われる、大人になっても日々勉強ですが、初期衝動だけが大事なわけじゃない。培われる情熱もある。

マネージャー / 樋口健

マンガ大賞2020 ノミネート作品

月刊 flowers / 小学館

「ミステリと言う勿れ」田村由美

選考員コメント・1次選考

- 犯人と間違われたことがきっかけでドンドン事件に巻き込まれる主人公久能整。コナン君や金田一一、先達は秒速で殺人事件に遭っているが、こうなったらそれにあやかりどんどん巻き込まれてもらいたい（不謹慎）。あと、テンパで整っていない髪型の整くんが大好きだ（笑）。

October Beast・代表 / デザイナー / 北山友之

- 最初からおもしろかったんです。ずっとおもしろかった。それなのに、ここ最近の展開がこんなにも・・・！推理ミステリマンガって、同ジャンルの小説をマンガ形式にしたものというような、そんな感覚があったかもしれない。「ミステリという勿れ」はすでに、マンガでしか、いえ、このマンガでしか表現できないジャンルを描いていると思います。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- 整くんの名言が毎回楽しみ。事件や謎解きが解決しても、それですべてスッキリするわけじゃなくて、小さなトゲが刺さったように心に残るのが好きです。

主婦 / 紺野 泉

- ただ何となく面白いと思いながら読み進めても、気づくと随所に散りばめられた伏線が次のストーリーに繋がってくるところにやられました ...

(株) エフ・ジェイ エンターテインメントワークス / 阿部 大介

- 一風変わった探偵（探偵なんて皆そうだけど）のミステリ漫画。だと思っていたら、しっぺ返しを食らったようだ。ミステリとしてはアンフェアかもしれない、でも漫画の手法としてはありだと思うし、冒頭でそうなることが暗示されていたじゃないか。そもそもタイトルで「これはミステリではない」と言っているわけで。ミステリなのかミステリでないのか。どちらにしても面白い漫画であることは間違いない。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店コミック担当 / 山本さとみ

- 圧倒的ネーム力。関係も関連もない話を思いつくままに話しているようで、実はすべて意味があり、いつの間にか事件が説明されているという離れ技。結構思想的に踏み込んだ発言も多いので、好き嫌いが分かれるところはあると思うが、読んでもらって、その「好き嫌い」についてをぜひ議論してほしいと思う。

丸善ジュンク堂書店 営業本部 / 小磯洋

- 主人公が魅力度が満点。ミステリーだけではなくえっ！とかほーっとか思えることがサクッとってしまう主人公に引きずられて行ってしまう。

ブックエース上荒川店・コミック担当 / 倉本かおり

- 〈虐待されてる子どもたちもよ／みんな凝ったキレイな名前がついてんだよな／名前をつける時には／そんなことになるとは思ってなかったんだろうなあ〉（第5巻より）これは主人公・久能整のセリフではないが、このようなハツとする言葉が全編満載で、しかも後々、謎解きの本質に関わってくる。こんな「名探偵」マンガは見たことない。

久能がいきなり殺人事件の容疑者になる「エピソード1」があまりに鮮やかな「安楽椅子探偵」ものだったので、このレベルが保てるのか……と危ぶんだが、杞憂でした。巻を重ねるごとに、無関係に見えた事件が重層的にリンクしていくのも見事。チェスタトンの『ブラウン神父』にもひけを取らない警句と逆説の宝庫みたいな作品。もし「本格ミステリーマンガ」というジャンルがあるなら、私の中ではすでに殿堂入りです。田村由美すごい。『7 S E E D S』を読んでない私が言うのも申し訳ないくらいですが、最後に久能自身の名セリフを。〈真実は／人の数だけあるんですよ／でも／事実は一つです〉

読売新聞文化部編集委員 / 石田 汗太

選考員コメント・2次選考

- 視点の切り替えによって、さっきまでとは違う世界見せられる醍醐味を味わえる作品だと思います。作者の作品全てに言えますが、心を動かす、掴む、そんな台詞がとて多いいと思います。スッキリするとは言いがたい展開の話もありますが、読めば必ず何かを受け取れる、そんな作品です。連載が始まればいつかは終わってしまうものですが、山下和美先生の「不思議な少年」のようにこの作品は定期的にずっと続けて欲しいなと思います。

バンドマン / ターシー

- 『ミステリと言う勿れ、勿れ。つまりは、ミステリとしか言えないような本格的なミステリマンガを、「BASARA」や「7SEEDS」といった大ヒット作を幾つも送り出している田村由美が描いていたとは、何というマンガ家としてのジャンルの幅広さかと驚くことしきり』。2019年のマンガ大賞で最終候補としてノミネートされた中にあった田村由美の『ミステリと言う勿れ』（小学館）について、こう評価しつつ『事件が起こって探偵が現れ推理し証拠を突きつけ真相へと迫るミステリの、まさに神髄といったものを余すことなく楽しめる』作品だと考え強く推した。残念ながら受賞はならなかったが、巻を積み上げて1年後のマンガ大賞2020にも登場。広島が舞台となった陰惨な事件を解決した後、戻った日常の中で大学生の久能整（ととのう）がまたしても幾つもの事件に巻き込まれていく。雨が降りしきる道で見かけた男が「山賊の歌」を歌っているのを耳にして、近寄り会話をしていく中で男が記憶喪失らしいと知り、それでも出てくる幾つもの話題や言葉から、男が何かをしでかしたことを推察しては見事に当ててしまう。その際に転がって頭を打ったらしく、入院をして検査をしていた最中に同室の元刑事という老人の話した言葉から過去に起こったことを言い当て、招かれるように侵入した温室で暗号解読の果てにとあるものを発見する。さらには近隣で起こっていた火災の裏で行われていた犯罪も暴く整。その冴えた推理をミステリではないと誰が言えよう。行方をくらませた犬堂我路の気配も感じつつ、ライカという奇妙な女性も周辺に現れそして突きつけられた謎。その先に待ち受けるのは大きな物語か、それとも日常に起こるささいな事件か。いろいろな期待を抱かせつつ引っ張って言ってくれそうな物語だ。

書評家 / ライター / タニグチリウイチ

- この数年の話なんですけど、周囲の人がサウナ&水風呂にハマりはじめ「ととのう」とか「ととのってない」とか言ってらっしゃいます。またなんか流行りだしたぞと横目で見ていた僕ですが、このサウナと水風呂を繰り返す「温冷交代浴」は、日々の緊張やストレスで乱れてしまった自律神経を整えると考えられているそうですね。今や休日のたびにお気に入りの銭湯にいそいそと出かけ、「ととのった」とか「ととのってない」とか言ってる始末です。誰の話ですか？もちろん僕の話です。本作の主人公の「整（ととのう）くん」は、この国の社会通年や慣習によって本質を見失ってしまった人たちに「それっておかしくないですか？」と気付かせていく。乱れてしまっているものを正常化させる。つまりは「ととのう」だ。整くんにとってはそれらは謎解きではないし、おかしいと気づいたことを話すだけ。ミステリと言う勿れ。サウナみたいに気持ちいい。あと、個人的な体験としては珍しいんですけど、このマンガ、実写でも見たいな、と思えました。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- するする世界観に飲み込まれてしまいました。普段ミステリー系は小説でも漫画でも全く手に取らないのですが、この作品を一気に読み終えてしまった事で「こんなに簡単に読み進められるものだったのか…」とミステリーというジャンルに対する自分の食わず嫌いを自覚したと同時に、そんなミステリー初心者の読者もすると読めちゃうような作品を描いてしまう田村先生の凄さを改めて実感しました。また、主人公の久能が突拍子なく始める小話の感性がとても現代的で考えさせられる話題が多く、話の隙間にそれが挟まれているのも魅力の一つだなと思いました。そしてまだまだ謎ばかり深まっていく本編。早く続きが読みたいです。

デザイナー / 金輪英恵

- いつの間にか事件に巻き込まれていて、気がつくとき謎解きの真ん中に毎回立っている。『謎』に引っ張り込まれる力がとても強くて、毎回ジェットコースターに乗っているよう。そして、最後にいつも描かれているのは優しい、悲しい人の姿。整くんの過去には何があったんだろうなあ毎回思う。一話完結スタイルの謎と、全話通した謎があるんだけど、その進ませ方、からませ方が見事で、毎回先生の頭の中を覗いてみたくなる。人って本来は優しいものなんだよね、という問いかけが毎回あるように思う。うん、きっとそうだよ、と、誰かに向かって試してみたくなるお話。

書店員 啓文堂書店 / 山川美香

- ワンカット長回しのように展開していく物語がどこにたどり着くのかとても気になる楽しい作品。

ロングランプランニング株式会社 / 小森和博

- 昨年、僅差で彼方のアストラに大賞を譲り一年が経つも、当該作品の斬新さは色褪せておらず、巻を重ねてなお読者に新鮮な驚きをもたらしております。登場人物の悩みや問題を豆知識や雑学でほぐしつつ事件の輪郭を浮き上がらせる圧倒的なしなやかなテキスト量のソフト系ストロングスタイルは健在であり、さらに主人公サイドとは別の登場人物たちの活躍も描かれはじめ動と静の対比構造など、まだまだ先が楽しみな快作となっております。

住職 兼 ライター / 蟬丸P

- 少女漫画の大御所登場！ 圧倒的な画力で読者をグイグイと引き込んでゆく。サスガです。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

- 周りにこういう人がいてくれたらな、と思わせる魅力のある主人公。ドラマ化してほしいマンガというのは珍しいのでは。

明文堂書店 商品部 / 木村 俊介

- うーん、とにかく気持ちよい漫画でした。絵柄も気持ちよいんですが、話の運び方と終わり方がとてもちょうどよくてスルスルと読めるし、読みたくなってしまふ作品でした。

会社員 / モチヅキカズヨシ

- こちらも人の言動と気持ちの揺らぎを、冷静に、冷徹に、観察するマンガ。「水は～」と異なり、こちらの主人公・整は、横から見ている感じではあるが。言葉にならない感情が、言葉で明かされていく様は、読者に快楽を与える。

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

- 読む側も試される作品だなと思っています。整くんのセリフをさらっと流すことも 事件の犯人は誰だ？この人だったか！という読み方もできる。田村由美先生は、エンターテインメントを描く表現力が本当に素晴らしいです。整くんって「おしゃべり」も才能ですが「気づく」能力もすごいんですよね。いつもと違う、とか違和感を感じる能力。自分ではできるかな？ 助けてほしい、困っているというサインに気付けるかな？ 一人よがりになってないかな？「当たり前」となってることは本当は当たり前ではないかもしれない。この作品を読むときは、自分を試される時間のように感じています。いろんな魅力がある作品ですが、そんなところもこの作品の魅力のひとつだと思います。

会社員 / 佐々木つむぎ

- この漫画のミステリとしての面白さはハウダニットかなとは思いますが、久能くんのとっ散らかった無駄話がメインの気がするので、この漫画の面白さは、これがミステリかどうかとは関係ないのです。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店コミック担当 / 山本さとみ

- 数年ぶりに、マンキツに出張の島根の待ち時間で行った時に読み続けてしまいました。ありそうでなさそうで、主人公のキャラはいままでなかったとおもいます。そして実写したら誰がキャスティングされるのかを気になります。

スタジオフーズ 代表取締役 / 小林智之

- 「人間って面白いなあ」ということを、バッチリ思い出させてくれる作品。田村由美さんが高濃度高密度の人間観察をされる方なんだろうな、と勝手に想像します。巻が進んでもそういう部分の丁寧さが全然ほつれてこない辺りがたまらない魅力です。

音楽家・「閃き堂」店主 / 谷澤智文

- 絵も展開も端正。綺麗なビジュアルの向こう側にとつともなくドロドロした人間関係や醜悪な感情が蠢いていたりもするんだけど、そのグロテスクさも極まるときれいな結晶になってしまうのか……と、あ然とさせられる。分かりやすい暴力や残酷さではない分、さらりと読めてしまって、あとからじわじわ恐くなる。きれいなもののほうがより一層、恐ろしい。かといって恐怖一辺倒ではなく、主人公も、主人公が出会う犯罪者も妙にチャーミングでおかしみもあって。ドンデン返しの妙も堪能できる。

ライター／老年学研究者 / 島影真奈美

- 主人公の鋭い洞察力、観察力が漫画で表現できるところがこの作品のすごいところ。

Books アイ茗荷谷店 / 野口忠義

- やっぱり面白いです タイトルに反しますがこの「ミステリー」を読むとゾクゾクしてしまうんです 随所に散りばめられた伏線が、点と点が線になるように最後に繋がった時の爽快感が堪りませんっ！

(株) エフ・ジェイ エンターテインメントワークス / 阿部 大介

- ミステリーの皮を被った道徳の教科書。主人公は次から次へと様々な話題を思いついては色んな方向から事件に迫り、ついには真相へとたどり着く。日々生活していて、ちょっと「あれ？」と思っても5分後には忘れてしまうような違和感を見逃さない。とにかく台詞が多いが、かといって小説にすると途中で読むのに飽きてしまうと思う。主人公のとぼけた顔や絵による補足があるから面白く読めるのだと思う。読むと世の中の見え方が少し変わる漫画です。

丸善ジュンク堂書店 営業本部 / 小磯洋

- やっぱり面白いです。田村由美さんは多彩天才すぎますね。ちょっと前まで7SEEDS 読んで世界にどっぷりつかってばかりで、もうミステリーに着手。1話1話がまとまっているし、名探偵ポワロのような、癖になる「探偵」像。去年はエントリーさせていただき、今回は1次選考では推さなかったのですが、2次で改めて読んで、やはり面白かったです。最近ミステリーにはまってるというのもあるのですが……。田村さんの漫画はいつでも、少年漫画にも少女漫画にもカテゴライズできない普遍的な作品力もすごいなと改めて感じました。

会社員 / 西尾美里

- 一次の推薦で大体褒め尽くしてしまいましたが、やっぱり何度読んでも面白い。読み返す度に、単行本に付箋が増えていきます。 < “人の為” と書いて “偽” になる不思議 > < 自分が下手だってわかる時って 目が肥えてきた時なんですよ > < 世の中に残ってる言葉はおじさんが言ったものがほとんどで そこには趣味と都合が隠されてる > ……。 「ロイヤルミルクティー」が和製英語であることも、本作で初めて知りました。 何度も言いますが、物理トリックによる犯人当てでなく、マンガでこれほどロジックと警句を主体にしたものは今までなかったと思います。その辺の凡百のミステリー小説が裸足で逃げ出す傑作です。「史上最高の本格ミステリーマンガ」と呼んでもいいと思います。

読売新聞文化部編集委員 / 石田 汗太

- ミステリーなんだけど、緩さがあり、でも台詞量の多さに徐々にガッツリ読み込んでしまう作品。

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

- 毎回、整の言動にハッとします。 事件の裏にある人の心の闇までも解いてしまう整が怖いとも感じます。それと同時に整自身は感情的になる犯人にはまったく興味がないのが恐ろしい。でもそこがさらにゾクゾクして読まずにいられない中毒性があります。そして小説を読んでいるかのような謎解きに夢中になります。

販売員 / 八重田幸子

マンガ大賞2020 ノミネート作品

別冊少年マガジン / 講談社

「水は海に向かって流れる」田島列島

選考員コメント・1次選考

- 田島列島先生のテイストが大好きです。前作が好きで好きで。ものすごく今回の新作連載を楽しみにしていました。その期待にたいして「おおお？こうきたか！続きが読みたい～泣」と見事に嬉しい悲鳴を上げました。次の3巻が出るまで死ねない。1話の榊さんが傘を持って、直達くんを迎えに行く場面、榊さんのあの表情、画力のセンスやば！（語彙力。。）と読み返す度に思います。タイトルも文学的。時には流され、時には曲がったり、急だったり。

会社員 / 佐々木つむぎ

- 渦巻く人間模様、そして物語が流れていく様子が小気味いいです。サブタイトルも毎回素敵で、つい注目しちゃう。2巻の続きどうなるかしら。。直達くんと榊さんは怒れるのかしら。。あと個人的に女子高生の泉谷さんの告白シーンめっちゃ好き。あんな軽妙な。ずるい。5時間くらいはこの作品について語れる自信があります。マンガ大賞の合い言葉「マンガの話をしながら酒が飲みたい」にふさわしい作品です！！

公務員 / 宇田川 結衣子

- 田島列島という天才と同じ時代を生きられてよかったと思っています…と書いてしまったけど気負わず好きなように描いて欲しいです…どんな風に描いてもきっと好きだから…。

ライター / 早稲田大学文化構想学部助教 / トミヤマユキコ

- 前作でファンになった人たち（というか僕）の気持ちがあつり掴んでくれる田島先生節が最高。そしてやっぱりボーイミーツガールが炸裂してて最高。わくわくしながら続きを待っています。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- あまりにも深刻で重すぎる事情を抱えた人たちの物語を、どうしてこんなにサラっとした読み口で描けてしまうのでしょうか！それなのに、どのキャラクターからもとてつもない説得力を感じます。2巻に出てくる「私の中に修羅がおるのです」というある少女のセリフがすさまじく心に響きました。自分の中の黒い気持ちを直視する勇気を持っている彼女は、間違いなくこの物語のキーパーソン。一気に大好きになりました。3巻以降も楽しみです。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- 分かりやすい青春ドラマのような設定でありながら、泣いて怒って叫んでスッキリといった単純なカタルシスにはせず、人の内面の多面性・複雑性を描いて、多くの人がそうである言葉にできない感情を抱えながら過ごす日常を表現している。読んで唸らせられる。

丸善ジュンク堂書店 営業本部 / 小磯洋

- 話は結構ヘビーなのに、絵柄とギャグの軽さが絶妙にマッチしてて最高の塩梅。ギャグも上手いこと言うなぁと感心しきりだし、シリアスな場面でもグッと心にささる名台詞の多いこと多いこと…ページを進めるたびに唸られます。天才！

会社員 / 小野塚博之

- おすすめしたいが「こんなマンガです」と一言で説明しづらいマンガ。くつつかない、離れない、人と人の距離。

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

- 主人公・熊沢直達が高校入学を機に、いい年をしてサラリーマンを辞めて漫画家になった叔父・ニゲミチ先生（ペンネームに起因する通称）がオーナーをしている下宿屋（？）に暮らすことに。そこにはかつて自分の父親がW不倫で駆け落ちした相手の娘でOLの榊が同居していた——。さらに直達のクラスメート・泉谷楓の兄（女装の占い師）、教授というあだ名でとぼけた大人の成瀬教授、拾われ猫のミスター・ムーンライトらサブキャラ同居人たちも個性的で、「めぞん一刻」の初期設定を換骨奪胎したようなシェアハウス大家族ものと言えるかもしれない。10代が親ではない大人と暮らすことの得難い自由さと孤独、前作「子供はわかってあげない」でも展開された子供視点のストーリーが、親の不倫を絡めたビターな展開と相まって、ゆったりと進む1巻から、ギュギュウな感じで濃密に展開する2巻に急展開する（そう、まだ既刊はたったの2巻）。周囲にとことん気を遣うのが当たり前の所作になっている今どきの中高生の処世。つらくてやりきれないはずなのに日常として淡々と受け入れる10代の描写。だからこそときおり表出する直達の感情と行動が胸に迫る。ヒトこまヒトこまの情報量がすごく、じっくり読みたくなるマンガ。

日本経済新聞社 企画開発室 / 天野賢一

- 不倫しててこんなに胸糞悪くなりすぎないで読めるのすごい。絵の雰囲気や台詞の面白さが田島先生の素晴らしいところだなあと思う。漫画でしか味わえない。大人の私でもこんなに胸を締め付けられるから、子供の私にも読んでほしかったな。

声優 / 富岡美沙子

- 読むと毎回思うのだが、会話の間の取り方が絶妙で正統派ホームドラマを観ているような安心感がある。私にとっての精神安定剤的マンガです！これは！

LIBRO PLUS / 土屋修一

選考員コメント・2次選考

- リピートして読んでいます。どの登場人物も好きですが、とくにニゲミチ先生とムーちゃんがお気に入りです。泉谷さん兄妹も好き。妹、応援します。

有隣堂アトレ恵比寿店 / 桶谷佳代

- こんなことがあったら、涙が出るだろうか、笑うだろうか、何て言うだろうか……作者が登場人物と一緒に迷いながら、考えながら、一步一步進んでいる感じがする。非常に真摯なマンガだと思う。

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

- 一次選考でも投票しました！今年どころかここ10年くらいで一番好きな作品になりそうな勢い。前作も大好きですが！！マンガ大賞の意義(?)は「マンガの話をしながらかお酒を飲みたい」ですが5時間くらい話して飲みたいです。こんな作品に出会えるから、漫画を読むことって楽しい。素晴らしい。生きてると、年をとると、家族っていろいろあります。田島列島先生のセリフまわしや可愛い絵がいちいち心地が良くて悶えます。榊さんも直達くんも10年前の事件と、自分の心に向き合い始めて、さらに続きが楽しみです。あと仕事道具のくだりがめっちゃ面白くて、田島列島先生の好感度が爆上がりです。あー飲みたい。田島列島オフ会とかやりたい。やろうかな…

会社員 / 佐々木つむぎ

- 好きだなあ…！！前作も短編も好きでしたが、更にこれは引き込まれます。そして細部にある笑いのツボが素敵すぎる…この先どうなるんだろう…と次巻をひたすら待つ日々です。

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- 設定はなかなかシュール。なのにやさしく、登場する人たちは感情を表にだしてない。読んでるうちに気持ちがすっとはいってってしまう作品。

ブックエース上荒川店・コミック担当 / 倉本かおり

- 過去の秘められた謎を追うような物語は、その全貌がなかなか明かされないことで興味を引きつけられものだと思いますが、このお話はかなり序盤でそれが明かされるのにめちゃくちゃ興味を引かれます！そこがすごい！複雑な人間関係が絡み合い、すれ違い、ぶつかりそうになっては肩透かしをくらい、得体の知れないザワザワした気持ちにさせられるのが何故か心地よいのです。こんな感情は田島列島さんの漫画以外では味わったことが無いです。そして、独特の軽妙な言語感覚、さらにはなんだかアラフォー世代にささる小ネタ、ムーちゃん(猫)の可愛さにニンマリ。人生につらいことがあっても、その時間の全てがつらいわけではないと教えられる気がします。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- この作者の描き出す世界が好き！空気感が好き！会話のテンポといい、間の取り方といい、なんだろう？この安定感。悪く言えば抑揚のあまりない日常の話なのだがその日常の中の何気ない会話がとても面白いのだ。うまく伝えられないので、まずは騙されたと思って読んでみてください。きっとじわじわきます。

LIBRO PLUS / 土屋修一

- 叙情的なマンガだな〜と。ゆったり読みたい時に読むにはすごく良い。でも、そこはかたく切ない不思議な魅力のマンガ。

PENICILLIN / HAKUEI

- 喜怒哀楽のどれでもない、それらすべての中間にあるような、いわく言いがたい気持ちを味わうことができる作品。田島列島さんと同じ時代を生きられて幸せです。

ライター／早稲田大学文化構想学部助教 / トミヤマコキコ

- 田島列島先生のマンガは、ずっと読んでいたい。物語が終わった後も、何も起こらなくていいからずっと皆が生きている様子を眺めていたい・・・なんてつい勢いで同人誌描き出しそうなことを口走りましたが（女子ざんまい）、あらすじを伝えても1mmも魅力が伝わらないだろうと思うほど、1コマ1コマの表情やセリフが愛おしいのです。そんな私、なんの勘違いか2巻で完結すると思ひこんでたので（前作の印象？）、2巻の最後の「第③巻につづく」を目にしたとたん「まだつづくやん！＼(^o^)/」と幸せになりました。ずっと読んでたい！

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- もうすでに他メディアで推されまくっていて、私も一次選考で熱い一票を投じましたが、田島列島先生の魅力をもっとたくさんの人に知ってもらいたいのでここはダメ推しさせてもらいたい！人の心の動きのどんな動きも、喜怒哀楽にあてはまらない分類できない感情も、文脈の外にある気持ちを、田島先生は絵でも文章でもアートなく、きちんと漫画にしてくれる。この作品はそれを改めて感じさせてくれました。複雑な人間関係も、田島先生独特のさらさらした雰囲気、読み手の心にすっと入ってきます。二巻になってますます絡み合ってきたのですが、キャラクターそれぞれの心のままに決意のままに、大きな流れの中で、流れるように進んでいくんだと思います。どうなっちゃうんだろう。どこに行き着くんだろう。もう目が離せません。

公務員 / 宇田川結衣子

- 主人公が牛丼食べて、宇宙を垣間見たときに心を持っていかれました(笑)。(注)グルメ漫画ではありません。フフッと笑えるのに、とっても切ない。一つ屋根の下の人間模様をぜひ覗きに來てください。

漫画家専門鍼灸師 / 碓氷麻里子

- 線の細い独特な絵柄もあってかもしれませんが、複雑な人間関係が絡み合ってる割には、ドロドロしているわけでもなく、テンポ良く、ユーモアにさえ感じるセリフが田島列島ワールドに引き込まれる。

SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

- キャラクターに魅力があります。話は淡々としていますが凄く染み入る作品です。

ブックファースト新宿店 / 渋谷孝

- 「人生は近くで見ると悲劇だが、遠くから見れば喜劇だ」というチャップリンの有名な言葉があるが、まさに悲劇と喜劇の中間の絶妙な距離間で描かれている作品。事件が起きても、日常が終わるわけではない。楽しかったり、悲しかったり、笑ったり怒ったり泣いたりしながらも、ご飯食べて、学校に行って、寝て、起きての日々を繰り返す。しかし同じ日々が永遠に続くわけではなく、時間は進む。緩やかでも変化は訪れていく。「水は海に向かって流れる」。絶妙なタイトルだ。

丸善ジュンク堂書店 営業本部 / 小磯洋

- 優しさが複雑に絡み合っている作品。ヘビーな境遇なんだけど、それぞれの優しさにそれぞれが少しずつ助けられる感じがとても良いと思います。

会社員 / 林礼春

- いや、良かったです。『子供はわかってあげない』も良かったけど。この『水は海に向かって流れる』も良かった。続きが楽しみです。家族ドラマなんですが、まあ家族でドラマときたらそれなりに深刻な話ではあるんですよ。よそから見たら、どの家族にもシリアスな物語、つまりこじれた事情のひとつやふたつくらいはあるんですから。そういう意味での普遍性をもってる。逆に言うともありふれた話でもあります。要はそれに感情移入できるかって話です。しょせんは他人事の、しかもフィクションなんですから。で、それが沁みるんですね。おそらくは絵面にも救われているんでしょうが、線が、画が柔らかい。登場人物たちはみんな良くてやさしげ、悪くてまぬけに見える。そこで、ぼんぼんと、心に刺さる台詞の一つも言ってみたりする。それが、スッと入ってくるんですね。いや、良いです。すごく良い。

ソフトウェアエンジニア / 第式齋藤

- 「何もなかったことになんてならない？」誤解、不安、躊躇、先回りのすれ違い……そうしてはまりこんじゃう人生の「どうしょうもないこと」の壁を、そのままでもいいわけあるかあと、それぞれのキャラクターたちが勇気をもってぶち抜いていくところが本当にすがすがしい。ひとつ屋根の下に同居する疑似家族ものとして王道の楽しさだし、みんないいひとだからこそ憶測と不安がからまって話が転がるさじ加減は絶妙だと思うのですが、そういうドラマ的な構造よりも、直達くん、榊さん、おじさん、泉谷さんたち一人ひとりの突破力のほうが頭ひとつ抜きん出てるように見えるところが大好きです。ああそうか、人生って変わりうるんだと嬉しくなります。その言葉を吐き出せてよかったねと、どんなこともなかったことにはできないんだし、怒りたかったら怒ればいいねと。それをこうも飄々とおちゃらける会話のノリでやられるからまたたまりません。登場人物すべてが愛しくなる……。

会社員 / 末永龍介

- 冒頭から、衝撃的で惹き込まれる状況。そして、まわりの大人たちが全く（ではないですが、かなり…）役に立たない（笑）高校生ふたりと26歳OLの心が右往左往する部分、憤りの先の大人が前述したように全くの未完成で頼りがいが無い。むしろ、高校生よりも子どもなのか。教授、おじさんも行き当たりばったりな状態で全く頼れないですが、ここに出てくる人たちがみんなが色んなベクトルで動き始めるから、物語も驚くような納得するような展開で動いていてとっても面白い。あと、重たいときも楽しいときも「食事」を一緒にするというところがとても好きです。昭和感なのかな。みんなで美味しいものを食べる雰囲気好きですね〜。

書籍課 / 鈴木寛子

- ひょんなことから繋がってしまった複雑な人間の縁を、淡い水彩感のある柔らかな描写と時折り混ぜこんでくる「世代感」に溢れたワードチョイスで、重いんだけど重くなくスッと読み手に馴染ませてくる。これはその「世代感」が合うからなのかもしれないけど、それでも日本のどこかできっとあったんだろうと、強すぎず弱すぎず、何かちょうどいい色合いでイメージできる人間ドラマ、田島列島ワールドは味わっておいて損はないと思います。あと、ポトラッチ丼食べたい。

会社員 / 伊東敬祐

- 悪魔が来たりて笛を吹く、みたいな、照れ屋が集いてホントのことばかり言うマンガ。「私の中に修羅がおるのです」「みんなにもいるよオ〜ピロリ菌みたいなもんだよ」というやりとり、マンガじゃないとかけない！あと単なる名言集も物語の流れの中にあって数倍にその意味が感じられるわけですが、その物語の手触りが、ほかにない。壮大さでひっぱるわけではなく、丁寧な丁寧な、身のまわりへの目線で作られた物語。あ、ここまで書いてて思いましたけど、これまさか、ドキュメンタリーじゃないですよ…?!と思うぐらいのリアリティ。いるなら、「若い頃の黒歴史は骨を丈夫にするから」と言ってるマンガ家おじさん、会ってみたいなあ…！

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

- 田島列島と言えば、マンガ大賞2015で2位となった『子供はわかってあげない』という作品があって、そこには学校の屋上でアニメのヒロインを描いているようなオタク少年がいて、オタク少年の兄が前は兄であったのに、姉となって戻ってきて家を勘当され、飛び出してひとり、商店街の古本屋の2階に居候をするようにして探偵の仕事をしていたりした。父親が母親の再婚相手で、いなくなった本当の父親が新興宗教の教祖だったりもしたけれど、旧態依然とした価値観の中ではどこか異なる状況と見なされてきたそうしたプロフィールやシチュエーションが、まるで気にならない特徴として感じられる物語になっていた。ともすれば大げさな問題として描かれがちなそうした差異を、ほんわかとした絵による平穩で優しい日常描写の連続に紛れ込ませて、たいしたことだと感じさせないようにしていた。辛いことや嫌なこと、寂しいことや哀しいことでも、その絵の中、その物語の中に取り込んで、ゆるゆるとした日常の中に落とし込み、ほんわかと支えてくれる田島列島の腕前が、より一般的な日常に近い状況で起こる事態で発揮されたのが、『水は海に向かって流れる』だ。高校に進学したのを機会に、マンガ家をしているおじさんが暮らす家に居候するようになった直達が、そこで出会った榊さんという女性との間に、ちょっとした因縁があった。直達は最初はそれを知らず、おじさんも知らず、けれども榊さんは気付いていた。そして直達も知るようになって湧き上がる、申し訳なさいた榊さんへの感情。一方で榊さんが直達に憤りを向けることもなく、ぎくしゃくとした関係が同じ屋根の下に生まれてしまうことになる。修羅場や愁嘆場になりそうなシチュエーション。それがほんわかとした絵によって棘を抑えられ、どうすれば良いのかを考えられる余裕を与えられる。無垢に見えて内心に抱えた感情は激しく、行動もそれなりにアクティブな榊さんというキャラクターも、直達とは高校の同級生で美少女ながらも占い師の兄に似てストリートファイター気質もある泉谷さんというキャラクターも、存在感を持って直達の回りで動き回る。悩みつつ考え迷いつつ進もうとする直達にとって良い導き手。その2人のどちらから選ぶことになるのか。そういう話題とは縁遠く高校生の日常として描き継がれるのか。先が楽しみだ。

書評家／ライター／タニグチリウイチ

- ライトな絵柄だけど、ちょっとヘビーなお話。ぐさっと刺さるシリアスなセリフがあったかと思えば、くすっ笑わせてくれるギャグもあり。なんて絶妙な、なんてセンスの良い作品なんだ！天才か！と思ってしまうほど個人的にはめちゃくちゃツボでした。お話の行く末も気になります。

会社員 / 小野塚博之

- 叔父の世話になってる下宿に住むことになったが、そこには父の不倫相手の娘さんが住んでいたでござる。という、男子高校生が直面するにはなかなかハードな環境ながら独特の間合いで淡々と時に暴発する感情の様子が描かれており、奇妙な関係にぐっと引き込まれます。

住職 兼 ライター / 蟬丸P

- 高校入学を機に叔父が経営する下宿で暮らすことになった主人公・熊沢直達16歳。そこに同居する10歳年上のOL・榊には、直達の生い立ちに関する浅からぬ因縁が――。一人ひとり血が通ったサブキャラ（下宿の住人やクラスメート等）も含めて緻密に練られた関係性の上で、相手を思いやる繊細なコミュニケーションがどれだけ大切でどれだけ互いを救うものなのか、という命題が展開する。深い。もし高校生の時にこういう環境で暮らせたら、と思わせる下宿ものでもある。とぼけてかわいい絵柄だが、設定というか展開される本筋のストーリーはシリアス。既刊2巻の段階ではこれからどう展開するのか分からないけれど……。大人になると怠惰に流してしまいがちな相手との関係性に、いちいち真摯にとらわれ、引っ掛かっては悩む10代の感受性のまぶしさ、20代、30代になってもそんな真摯さを残した大人のやさしさが描かれるのにつけ、作者がどれほどまじめにこの物語に取り組んでいるかがひしひしと伝わる。読みながらいろいろなことを考え、思い知らされるマンガだ。

日本経済新聞社 企画開発室 / 天野賢一

- 何度読み返しても、ああいいなあ。好きだなあ。とじんわり思える作品。キャラクターも台詞も物語もへんてこですてきなサブタイトルもすべてが合わさった空気がとても好きです。

声優 / 富岡美沙子

- 親たちの過去を知った少年少女の青春譚。味のある脇役陣を配し、適度なシリアスとユーモアを交えた語りが好き。

ライター / 福井健太

- 結構ほのぼのとした絵柄ですが、それに反して内容はダークかなと感じます。登場人物がみんな繋がっていて、ちょっとした気持ち悪さを感じつつ、怒りをためつつ納得しているのか、そういう性格なのかわからない・・・の心情が徐々に出てくるのが引きつけられてるのかな。この昼ドラっぽい人間関係。結構好きです。

デザイナー / 平沼寛史

- 年上のお姉さんと男子高校生が同じ下宿でひとつ屋根の下、というシチュエーションだけなら王道なのですが、まったく一筋縄ではいかない。複雑な人間関係を野次馬的な気持ちで読むマンガでした。「え、この続きはどうなっちゃうの?」と思わせるのがうまく、謎や問題はそれほど焦らすことなく解決する代わりに、すぐ次の「え、この続きはどうなっちゃうの?」という展開が発生するので、ページを繰る手が止まらなくなります。

主婦 / 堀江千秋

- このマンガが持つ温度感が好きです。ところどころ出てくるギャグにも親近感がわきます。

鳥取県立図書館・司書 / 野間勤

マンガ大賞2020 ノミネート作品

コミックビーム / KADOKAWA

「夢中さ、きみに。」和山やま

選考員コメント・1次選考

- この個性の鮮烈さにヤラれる。伸び盛りの新鋭の初コミックス。キャラのアブなさとハズした笑いのマッチングが素晴らしい。次作が楽しみでならない。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

- じわじわと染み入るような萌えと感動をありがとうございます！ほんとそれに尽きます！

ライター / 早稲田大学文化構想学部助教 / トミヤマユキコ

- この不思議な、なぜか「懐かしい」世界観は何だろう。心地良く読める。山岸涼子さん、佐々木倫子さんの作品の空気感が好きならぜひおすすめしたい1作。男子校の日常の中に、友情を超える愛情？のようなものがほのめかされているのだけど、それがほんのりとしたもので思わず応援したくなる。「うしろの二階堂」は伊藤順二さんファンもおすすめ。二階堂くんの魅力に惑わされてしまう。自分も女子高だったので、同性である女子に、恋愛とも友情ともちょっと違う、ほんのりとした「キュン」を感じたことがあったのだが、そのことを思い出した。「動物のお医者さん」を思い出させるような、ひょうひょうとしてでもユーモアを感じさせる魅力的な登場人物たち。そして大きな事件は起こらない、ちょっとした日常を描いているけど、そのなかに切り取られた登場人物たちのちょっとしたしぐさや心の動きに、キュンとしたりほっこりしたり・・・2019年1番印象に残った1作。

会社員 / 西尾 美里

- 緩いテンポ感と丁寧な絵柄で油断していたところに、手書き文字のツッコミでプフッと笑わせてもらいました。これからの作品もとても楽しみな作家さんです。

会社員 / 畑中瀬路奈

- 多感な高校生たちの日常を描いたオムニバス。丁寧な劇画調の絵は至極真面目なのに、不思議な可笑しみがありません。セリフの言葉選びやテンポが良く、とても久し振りに声を出して笑った漫画でした。キャラクターもそれぞれ個性的で（普通であることも個性だ、ということに気付かされました）愛おしく、タイトル通り夢中になって何度も読み返しています。

主婦 / 堀江千秋

- またまた新しい才能が世に解き放たれた！ Twitter で見かけた数コマで、これは！と思い即購入。大当たりでした。登場人物みんなが不器用でちょっとズレてて、そして一生懸命で愛おしい。

三省堂書店 / 内野智未

- 本当に夢中になりました。「二階堂シリーズ」は何度も読み返す度に新しい発見があります。短い物語の中に伏線がたくさん含まれており、それに気がついてページを遡ってまた読み返すということを繰り返してました。どこか掴みどころのない林も「そう言えば学生時代にこんな男子高校生が同級生にいた気がする」と既視感を覚えました。

販売員 / 八重田幸子

- 商業誌デビュー作と思えないほどのクオリティ。最初のエピソードを読んですぐノックアウトされました。端麗だけど、ひょうひょうとした人物描写はクセになること間違いなし。男子にもおすすめしたい「イケメン漫画」です。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- ふと、他人に興味を持つ瞬間は友達への第一歩であり、その瞬間はその人に夢中になっている。そこから、この人はどんな人なんだろう？という好奇心が湧き上がり、気になる人になり、声をかける。このマンガにはそんな友達になるきっかけの部分が丁寧に描かれています。繊細な機微を描きつつも、登場人物達の会話がとても面白く、笑えるマンガにもなっていて、幅広い魅力を持っています。淡々とした雰囲気なのに、会話のテンポがよいので、夢中になって読んでいるうちに、登場人物たちに夢中になってしまいました。タイトルで謳っている「きみ」というのはこのマンガ自体のことなのではないかな。

システムエンジニア / 廣瀬公将

- 一見 20 年位前の漫画かと。懐かしいような新しいような、ジャンルもよく判らないまま読んでる内にどんどん引き込まれて、もっと色々読みたくなる不思議な作風。pixiv で話題だったのにちゃんと BEAM コミックスから出て、判ってるな～感が凄い。

首都圏 TSUTAYA / 井出 麻悠美

- ストーリーがうまい、面白い。男子校での、男子の日常的な会話や行動、なんとなく懐かしく思える。特に二階堂くんの話が際立ってる。

SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

- めっちゃくちゃ面白い。BL カテゴリーに入っていますが、そうでもないのが魅力です。書いてしまうとネタバレになりそうで、なにも予備知識を入れずにとにかく読んでほしい。オフビート感、っていうんでしょうか？オフのまにまに漂うユーモアにやられること請け合い。そして絵がすごく好きです。1 巻完結物はどうしても賞に漏れがちですが、一度くらいいいんじゃないでしょうか？

菓子研究家 / 福田里香

- わたしの中では昨年が一番の話題作。私も和山さんに夢中です。

bar 図書室 店主 / 岡部愛

- この微妙な BL 未満な感じ、どう読んだものか今だにはっきり分らないけど、とにかく気になってクスリとしたり爆笑したり。面白いことは間違いない。

医師 / 岸本倫太郎

- 何と形容すれば良いのかムズムズするような空気が次第にニヤリに変わる瞬間にハッとこのマンガに夢中になっている事に気がつきました

(株) エフ・ジェイ エンターテインメントワークス / 阿部 大介

- 「林くん」シリーズに心打たれて、違う切り口の『町田くんの世界』なのかと思いつつ、ぱしり現場をずっと見つめている姿とか、何考えているか判らなくて「林くん」にとっても興味が湧いてしまいました。「林くん」シリーズが突拍子もなかったのも、これ以上はないだろうと…「うしろの二階堂」シリーズを読み進めたところ、ドハマリ!!! 二階堂くん、最高過ぎです。もう、何が最高かという二階堂くんになった理由と、なのに怖い話がだめとか 師匠とのやりとりとか魅力があり過ぎる！本当に「夢中さ、きみに。」状態です。

書籍課 / 鈴木寛子

- 今年の単巻で文句無しに薦められる一冊。描かれるエピソード、登場する人物全てのクセが強く、そしてどれもが魅力に溢れています。人物それぞれの行動や表情が本当に愛おしく、また読もう、この子達に会いに行きたい、と思わされるのです。中毒性が非常に高い…！

会社員 / 伊東敬祐

- 2019 年、単巻タイトルの中で一番何度もよみかえしてる。いいやつしかでてこない。センスが猛威を奮っている。すごい漫画だなあ、心底思います。次回作に大期待！

オリオン書房 ノルテ店 / 池本美和

選考員コメント・2次選考

- この不思議な読み心地、いろいろと御託を並べることもできないのですが「とにかく読んで欲しい」と言いたい！大好きです！

ライター／早稲田大学文化構想学部助教／トミヤマユキコ

- いやいや、何なんですかこの空気感 独特すぎる世界観 距離感を取りつつ読み進めていたにも関わらず、気がつく
と自分の間合いの中にドカドカ入って来られていました 完敗です

(株) エフ・ジェイ エンターテインメントワークス / 阿部 大介

- 二階堂くんの話が特に印象的。表情が豊かで、キャラクターも個性的、どことなく哀愁漂う感じが懐かしく思わせるのでしょうか。

SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

- 懐かしい雰囲気と、淡々と紡がれる毎日が癒される。中でも「うしろの二階堂」の二階堂君の魅力はたまらない。普段はホラーな見た目なのに笑うとカワイイ（しかも自分しかそのかわいさをしらない）なんて、設定からしてやられる。どんな時でも、何度でも、ストレスなしで読めるのも魅力。絵も素敵。

会社員 / 西尾美里

- 1次も2次も、やっぱりこれを推します！なんとなくノスタルジックな感じの絵柄、不思議な感覚に陥る世界観、そして読み終えた後の圧倒的な爽やかさ。登場人物全員が愛おしい。この作者の次回作を早く読みたい。

三省堂書店 / 内野智未

- 二次選考のために読み直しましたが、やっぱりしみじみ大好き……。前半はちょっとずれた林くん、後半は陰気を装おう隠れ美少年の二階堂君。2人の不思議男子と、彼らの存在に「気づいて」しまった人たちの青春物語。優しさとおかしみ、そして読んだあとの不思議な清涼感。文字通り、自然と誰かに進めたくなくなってしまうマンガです。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- クスッとさせるツボの押さえ方が天才的だと思います。オムニバス形式なもの万人が手に取りやすくて良いかと。ぜひ色々な世代の方に読んでほしいです。

会社員 / 畑中瀬路奈

- 本当に夢中になりました。「二階堂シリーズ」は何度も読み返す度に新しい発見があります。短い物語の中に伏線がたくさん含まれており、それに気がついてページを遡ってまた読み返すということを繰り返してました。どこか掴みどころのない林も「そう言えば学生時代にこんな男子高校生が同級生にいた気がする」と既視感を覚えました。日常を描いているはずなのに、全く当たり前ではないところが魅力的です。

販売員 / 八重田幸子

- 1巻ものですし、作品的にBLカテゴリーになっているので、読者はかなり女子に偏るような気がしていました。だから、一次の投票者はわたし以外にも絶対にある程度いるとは確信していたんですが、2次に残るくらい支持が熱かったという現実がうれしすぎます。何度読んでも面白い。絵柄もいい～そして伊藤潤二ファンは必読です。

菓子研究家 / 福田里香

- なんとも良い空気感です。面白い。人からオススメされ読んだところにノミネート。面白い漫画をみんな見つけてくるなあ后感心してしまいました

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- 好きです！何度も繰り返し読んでいます。ひとコマの構図が絵画の如く整っているのに不思議と笑えてしまうところや、絶妙な間合いが癖になります。絵や雰囲気は昭和感に溢れているのですが、そこへ Twitter や LINE をうまく絡ませてくるのも新鮮。個性的な高校生たちの何気ない日常が、高校を卒業して十数年経った今、こんなに愉快で楽しく感じられるとは思いませんでした。肩肘張らずに読めて、和みます。

主婦 / 堀江千秋

- 初めてこの作品を読んだ時、正直どう評価していいのかわかりませんでした。そして、何度か読んだ今、やっぱりはっきりわかりません。笑えるシーンもふんだんにあるけどギャグマンガではなく、学生の日常を描いているけど青春モノでもなく。ただひとつ言えるのは、読後に確実に気になって忘れられなくなる。それぞれの人物が、普通とはちょっとずつズレていて、そのズレが独特の笑いを感動を生み出してくれました。

医師 / 岸本 倫太郎

- 何気ない？何気ない学生の日常を切り取ってる内容なのですが、表現、雰囲気が独特でキャラクターも個性的。理由が上手く説明できないのですが、不思議と引き込まれます。

システムエンジニア / 三浦佑樹

- 題名そのまま夢中さ、きみに。読み始めるとじわじわくる漫画。そしてくせになる。

ブックエース上荒川店・コミック担当 / 倉本かおり

- わたしは二階堂に夢中。二階堂……。センスあふれすぎててめちゃくちゃやばいっすね。でてくるみんなに愛着が湧いてしまう稀有な作品。

オリオン書房アレア店 / 池本 美和

- 懐かしい学生時代をちょっと思い出しました。すごく美人でちょっぴり距離感があったクラスメートがある日突然このマンガ読んでみておすすめだからとドサッと持ってきたのが稲中でした。一気にその子が好きになった。色んな人がいて色んなことがあった学生時代を思い出す作品でした。

カメラマン / 平沼久奈

- 毎回言うのですが（毎回うれしいのですが）、出会えてなかった素敵マンガに出会えるマンガ大賞のノミネート、僕の今年はこれでした。一次審査で推薦して下さった全国の選考員のみなさま方に御礼申し上げたいくらい、夢中さ、きみに。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- 1巻で区切りがついているのがもったいないような どころか様子のおかしい(誉め言葉)男子たちがおりなす 平熱低め系高校生活コメディです。ゆったりとしたリズムながら断続的におとずれる 笑いが癖になります。

アニメイト秋葉原 キャラクターグッズ担当 / 岡部 真矢

- 新星現る！とはこのことですね。絵柄は古めかしいのにとにかく新しい。なんとも不思議な魅力を持った男の子を生み出す天才。和山男子というジャンルが生まれそうなほど

bar 図書室 店主 / 岡部愛

- なんかというか、全大人に声を大にしていきたい。『このマンガ、ものすごくイイです！どうか読んでほしい！でもこのマンガの良さ、ものすごく説明しづらい！！』ええと。どう説明したらいいだろう。まず、短編集です。連作になっていて、前半の主人公は林君。この林君と関わる人たちのお話なんですが、全編から感じるのは、作者さんの人に対する目の暖かさとユーモアで、日常で起きるささやかな出来事を切り取る際に見える優しさがあちこちにちりばめられています。一話一話を重ねて読むと、どんどん心地よさが積みあがっていくタイプのお話ですね。好き。次作にも期待しています。

書店員 啓文堂書店 / 山川美香

- 主人公の林くんと二階堂くんも魅力ありますが、その人たちの周りにいる人たちも最高に楽しいです。ふたりの魅力に気付けるなんてすごい！いま、林くんみたいな友人が居ますが、学生時代は「変な人だなあ」としか思っていなかったですが、大人になってから面白さが判り、あの時もっと気づけていたらもっと視野広がったのにな。とちょっと後悔しています。20年前に林くんと二階堂くんと出会いたかった（笑）

書籍課 / 鈴木寛子

- 重苦しく真面目な読むのにカロリーがいるマンガかとおもっていたのですが、読んでみてびっくり。登場人物達の会話が軽妙でセンスがよく笑える。ただのギャグじゃなくて、各話毎のつながりが計算されていて、読み進めるうちに舞台となっている学校の生徒になって、登場人物たちを見ているかのように思えてきます。夢中になって読むうちに、いつの間にか魅力的な登場人物たちに夢中になってしまう。そんな題名通りのマンガです。

システムエンジニア / 廣瀬 公将

マンガ大賞 1次選考作品

全作品名・選考員コメント掲載

「1122」渡辺ペコ

- だるだる好きの方も、そういうわけじゃない人も読んで面白い作品だと。ただのダブル不倫で話じゃなく、その中で複雑な気持ちや家庭環境や様々な事が絡んでいく。キャラクターの性格も生きていて誰も憎めないから困る

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

「1日外出録ハンチョウ」上原求、新井和也、萩原 天晴、福本伸行

- おっさんグルメ漫画かと思わせつつも、手を変え品を変え、様々な趣向で現代の中年はいかに生きるべきかという重いテーマを軽やかに描いてくれる。読んでいてストレスが皆無なものもすばらしい。

漫画読み / yama-gat

「Artiste」さもえど 太郎

- 才能はあるが気弱で心優しい青年が、リーダーとして、レストランの厨房をまとめあげるために頑張る物語。頼りなさから、リーダーとして、なかなか認めてもらえない彼ですが、不器用ながらもメンバーを信じ、地道にコミュニケーションをとることで、くせ者揃いのメンバーをまとめあげて行きます。チームがすこしづつ機能してゆく過程は痛快というよりは、どこか穏やかな気持ちにさせてくれます。また、主人公の暮らすアパートに集う面々との交流もコミカルながらとても暖かい。穏やかな暖かさに満ちた、寒い時期にぴったりのマンガです。

システムエンジニア / 廣瀬公将

「Change!」曾田正人、富山玖呂、晋平太

- ラップのフリースタイルバトルを通して成長する女子高生の物語。曾田先生の描く天才の覚醒はいつも涙が出るほど感動する。

医師 / 岸本倫太郎

- お嬢様「ラップ」漫画なんてそれだけで最高に面白かったのに何故連載終了してしまったんでしょうか？本編もまだまだこれからだったのに…復活を望みます。

デザイナー / 金輪英恵

「GIGANT」奥浩哉

- 相変わらず奇想天外な物語のスタートで、今回は特に最初からそれぞれの登場人物が立っていて話がスーッと入ってくる楽しさがあります。

Migimimi sleep tight / 涼平

- 主人公の憧れの女優「パピコ」との甘酸っぱい出会いを徹底的にリアルに描く第1巻、第2巻から、彼女が恐怖の大魔王やその他襲来する敵と戦う運命に突き進んでいく展開が圧巻。『最終兵器彼女』や『ゴジラ』のような理不尽さに振り回される主人公が、今後物語にどのように関わっていくのか目が離せない。

弁護士・三村小松法律事務所 / 三村 量一

「HEART GEAR」タカキツヨシ

- 世界大戦で人が死に絶えた世界でゼットと呼ばれる機械(ギア)を慕い生活する少女ルウ。ある日急襲があり、破壊されたゼットを蘇生できるかもと、ルウは謎の戦闘用ギアであるクロム旅に出るのだけど、序盤の切なさからの、テンポよいストーリーで、これこれとどん個性的な適役が出てくるのだろうから、楽しみ！楽しみ！

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

「LIMBO THE KING」田中相

- "舞台は2086年のアメリカ。8年まえに根絶したはずの、世界を恐怖のどん底に陥れた「眠り病」が復活した世界。" ワケアリの無口な天才男と、熱い元軍人のバディもの。遂に完結！なので、一気に読みを！ぜひ！

主婦 / 赤坂真実

「MOGUMOGU 食べ歩きくま」ナガノ

- くまの表情が可愛くて、のんびり読んで癒されるマンガです。2巻の「やけくそバーガー」の回冒頭のムシャクシャしたくまの顔最高です。

金海堂イオン準人国分店コミック担当 / 園田美智子

「MUJIN - 無尽 -」岡田屋 鉄蔵

- 幕末の剣客、伊庭八郎が江戸を舞台に紡ぐ物語は、誠実さ、潔さに彩られていて、背筋が伸びる思いがします。剣豪として知られる伊庭八郎ですが、食べることが大好きで京都滞在中にグルメ日記を残しています。そんな伊庭八郎が人生を楽しんで生きている部分も描かれていて、粋で艶っぽい雰囲気も湛えています。江戸の粋に触れたい人におすすめのマンガです。

システムエンジニア / 廣瀬公将

「Op - オブ - 夜明至の色のない日々」ヨネダコウ

- 保険屋のOPと言えば、以前大好きなマンガがあったなぁと手に取ったら...もちろん全くの別物ですが、リズム感があるストーリー展開にすーっと吸い込まれてめちゃくちゃハマりました。テレビドラマ映えしそうですが、出来れば深夜枠の本当に好きな人が見る時間帯に留めていただきたい

(株) エフ・ジェイ エンターテインメントワークス / 阿部 大介

- マスターキートンが大好きだったのでオブ物は絶対です。そしてやはり最高です。

マネージャー / 樋口健

「TIEMPO- ティエンポ -」飯野大祐

- 今までサッカーのコミックを読むことはあったが、フォーメーションや戦術だけではなく、精神論まで深くつき進めている作品と出会ったのは初めてでした。とても読み応えがあります。

リプロ ecute 大宮店 / 首藤 瑛

「アイとアイザワ」かっぴー、うめ

- これだけ面白いマンガが電子書籍でしか出版されず、紙の方はクラウドファンディング、ってある意味時代を映し出しすぎな気が。しかも電子書籍の先駆者でもあるうめさんの作品で…近未来SFであり、ラブストーリーであり、コミュニケーション論であり、いろんな読み方できるので、幅広い世代に刺さりうる内容。紙の本が出ないこと自体を嘆くのはそのうち時代遅れになるかもしれないけど、今はまだ単純に知られる余地が残っている証なのかな、と。

株式会社ヴィレッジヴァンガードコーポレーション 店舗開発課 / 大山 敏樹

「青の花 器の森」小玉ユキ

- 波佐見を舞台に器と恋の物語なのだけど、絵付けに熱中している青子と器にこだわる龍生、正反対の2人が互いを認めあうおはなし以上に、波佐見焼のカラフルな色が想像できて、ぜひカラーで見たい作品。

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

「青のフラッグ」KAITO

- 普通とは、何なのだろうか。ただひたすらにそのことを考えさせられる作品。登場人物たちの一部が抱える感情は、いわゆる普通ではないのかもしれない。向けられている対象が違うという点を除けば、その感情自体は、あまりにも自然。普通なのだ。しかしそれによって傷ついたり、関係性が変わってしまう。あまりにも難しい問題の渦中にある登場人物たちの、今後を見守りたいと思う。作品を通して、心情表現の細かさに感嘆する。登場人物の目力の凄さや、その一方で顔を描かずに表情を描く表現など、とても印象的だった。

元書店員 / 杉佳尚

- 恋をすると、同時に大切なものを失ってしまうことがある。うまくいっている二人の陰で、実は苦しんでいる人がいる。みんな、ただ人を好きになっただけなのに。それぞれのキャラの葛藤や苦しみに、こちらの胃もきゅーっとしてしまう。7巻で、読者や世間の声を代弁するようなやりとりがある。自分の学生時代には話し合われることがなかった事なので、この作品を現代の学生がどう読むのか、とても気になる。そして、なにより続きが気になる。みんなしあわせになってくれ。

主婦 / 赤坂真実

- ただ、ただ、せつない

LIBRO PLUS / 土屋修一

「青野くんに触りたいから死にたい」椎名うみ

- 人は笑いながら射精はしない、と言ったのは確か島田雅彦先生だと思いますが、恋愛なんだけどギャグになって、さらにそこにへんな恐怖と悲しみがあるので、「ラブコメ」ってひとことで呼べない新感覚作品。付き合い始めてすぐに死んでしまった青野くん、それを暴走気味の恋する少女刈谷さん（しかも若干性欲暴走気味）、ふたりはコミュニケーションはとれるけど、実体のない青野くんにはさわれない、というところから、枕に憑依してまくらに顔をうずめて自分の匂いに圧倒される、という初手から、現実の人間同士では絶対できない想像を超えた新感覚シチュエーションコメディが次々に繰り出される。そしてその一方で青野くんが幽霊化してしまったことに会う不吉めの謂われがありそうで、そこと戦う少女少女としての冒険物語のようでもあり、もう、先がむちゃくちゃ気になる！！

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

- 死んだ彼氏が幽霊になって帰ってくる内容なので、切ないシーンが多いのですが、同時にホラーサスペンシ的な展開にスピード感があり、月刊連載なのがもどかしいです。当然主人公視点が多い為忘れがちになるのですが、主人公がまず普通じゃない事と、この漫画のタイトル、これらが最後にハッピーエンドを迎えさせるのかを不安にさせます。死者が生前と同じように話ができつつも異なる異質な存在になっている事を突きつけられた時の恐怖感や嫌悪感の描写が毎回ゾクゾクします。成長していく主人公の泣きはらした目が最高に好きです。

バンドマン / ターシー

「赤狩り THE RED RAT IN HOLLYWOOD」山本おさむ

- 重厚、重厚、重厚！オヤジに次ぐオヤジに次ぐオヤジ！！共産主義排斥が席卷した1950年代のアメリカ、社会全体に広がった赤狩りは、映画界、ハリウッドにも吹き荒れ、俳優映画監督脚本家、謂われなき弾圧に遭った人間が多数いたからこそ、「ローマの休日」も「エデンの東」も生まれたのである、という、史実をベースにフィクションと組み合わせながら、ショウビジネスから原爆スパイ、公民権運動まで、歴史がトン単位の重さを持って迫ってくる。実に立派なオヤジフェイスたちは、人によっては主義を貫き通して逆転劇を演じ、逆にブレたことによって没落したり、固執することによって破滅したり、と、まったく違う人生を歩む。ヘップバーンってそういうバックボーンが！え、チャップリンってそんなだったの？！みたいなミーハーなスパイスも加えて、古い名画を見る楽しみまで増やしてくれる作品。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

「あげものブルース」本秀康

- 去年たぶん20回以上繰り返し読んだマンガ。なぜか6才の娘が気に入ってしまい何度も読まれたから。娘が一番長いかりんとうの話だけあまり理解できなかったせいか、からあげととんかつと天ぷらの話ばかりせがまれ、つい矢場とん行きたくなってしまおう（つうか行った）お約束のオチ。次は目の前で揚げてくれる天ぷら屋さんかな…こんなに一つの作品が個人的な体験に密接にかかわったことって久しぶりで。何十年前先に、この作品を手にとった時6才の娘の笑顔が真っ先に思い浮かぶはず。それってとてもぜいたくな楽しみだ。ちなみにあげものブルースと一緒に娘が選んだ絵本も一緒に買ったんだけど、そのタイトルが「コロケできました」だった。どんだけあげもの好きな親子！

株式会社ヴィレッジヴァンガードコーポレーション 店舗開発課 / 大山 敏樹

「あそこではたらくムスブさん」モリタイシ

- コンドームを作る会社内での物語。憧れる気になる先輩が働く部署はコンドームの新作制作現場。題材でちょっとエロさがあるのかと思いがちですが、そんなこともなく、真面目にどうすればもっと良いコンドームが出来るのか日々研究している漫画。それに加えて淡い恋心が育つ二人という展開でとても微笑ましい関係です。おすすめ。

三省堂書店海老名店 コミック担当 / 近西良昌

「アルティストは花を踏まない」小日向まるこ

- 眺めているだけでうっとりするような美しい絵で表現されているのは、人の優しさや弱さ、信じる想いの強さ、そして失われていくものの儚さ。言葉に頼らず絵だけで見せるシーンも多く、ページをゆっくりめくり、考えながら読み進めていくことで物語に入り込みやすかったです。こどもたちの繊細な心に寄り添った目線で描かれていて、読んでいるこちらがとても愛しくてたまりませんでした。現代と時代背景は違えども、人々の暮らしにはいつも優しさがあり、こどもたちには未来があるということを強く実感しました。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

「アンサンブルシンデレラ 病院薬剤師 葵みどり」荒井ママレ、富野浩充

- 誰しものが大なり小なりお世話になっている「処方薬」の世界。何気なく日常で接してはいるものの実際よく知らない、けど、ちゃんと知れるなら知りたいジャンルって色々あると思いますが、おそらくその一つだと思うので良い窓口となってくれるのでは。王道の魅力の持ち主みどりちゃんの成長とストレートに刺さるエピソード、とても読みやすい良作です。

会社員 / 伊東敬祐

「異種族レビューーズ」 masha、天原

- 下ネタ方面のダンジョン飯という風格があり、ファンタジー世界での生物・民族・風俗を取り扱いつつ、それらが個々人のファンタジー観の中でピンとくる仕様になっているくらい本邦にもファンタジーが根付いたのだなと思わせる快作

住職 兼 ライター / 蟬丸 P

「異世界おじさん」 殆ど死んでいる

- 異世界シリーズ系の「元の世界に帰還してからその後」のお話です。異世界シリーズ自体沢山読んでいた訳ではないのですが設定が新鮮に思えました。「SE ○ A ハード」好きは斯様に尖った人生を送るのかと思いました。多分この作品のおかげで SE ○ A ハード関係の動画の閲覧数がかなり跳ね上がったんじゃないですかね。異世界に転生していた期間に「笑って○いとも」「こ○亀」が終わっていた事に関する下りが個人的にかなりツボでした。単行本のおまけ漫画に毎回かなり力が込められており、単行本派にはかなり嬉しいです。

バンドマン / ターシー

- ある意味リアルな転生系。おじさんのピュアさと天然さ、そして正統派オタクな”語り”が面白いです。SEGA への愛に泣いた…。

会社員 / 畑中瀬路奈

- 17年の昏睡から目覚めた、SEGA ファンゲーマー脳のおじさん。もちろん読者の自分もおじさん。異世界メタ作品群の中でもメタ度が高いです。女の子がかわいいから OK です。

マンガ研究 / フリーライター / 会田洋

- 異世界に行って帰ってきた人の話をはじめて読んだので、なるほど…こういう事になってしまうんだなあと感心した。これから同じ目に遭ってしまった人達の道標になりそうな作品ですよ。おじさんの根底にあるカルチャーが、まさしく自分と同世代のそれで若干顔をあからめながら読んでます。端的に言って最高。

オリオン書房 ノルテ店 / 池本美和

「イチケイのカラス」 浅見理都

- 裁判官の仕事ぶりを描いた異色のマンガ。正義漢とは異なる生身の裁判官の日常が、独自の観点から描かれている。裁判官と書記官・事務官の関係や、裁判長と陪席裁判官の関係など微妙な点まで描ききっており、法曹関係者は必見。裁判員裁判の審議の内幕も紹介していて、興味深い作品である。残念なことに終了したが、続編が待たれる。

弁護士・三村小松法律事務所 / 三村 量一

「いんへるの」 カラスヤサトシ

- 学術的ではなく（もちろん調べてもらっちゃるとは思います）体と心でこの民俗学的な世界を愛し、理解しているカラスヤサトシならではの怪談集。「だってそうなのだから仕方ない」とでもいうような、スパッと切れる終わり方が、怖い。これからもこれまでも、ほかの人には絶対に描けない、描けるはずがない……そう確信させる、希少な作品。

ライター / 門倉紫麻

「映画大好きフランちゃん NYALLYWOOD STUDIOS SERIES」 杉谷庄吾 【人間プラモ】

- 杉谷庄吾【人間プラモ】による「映画大好きポンポさん」のスピノフ漫画、「映画大好きフランちゃん NYALLYWOOD STUDIOS SERIES」(KADOKAWA、880円)を読んで傷を抉られているというか、尻を蹴飛ばされているような気がして腰が砕け、心が萎える。「映画大好きポンポさん2」で、ニャカデミー賞監督となったジーン・フィニが撮った映画に対抗するべくポンポさんが撮った映画のヒロインに抜擢された、映画会社の側にあるダイナーのウエイトレスのフランちゃんを主役にしたストーリー。「映画大好きポンポさん2」の裏側で、何が起こっていたかが描かれる。そこでは、女優になるにしても何になるにしても、本当にやりたいことをやるためには、自分で場所を作ろうと動かなければいけないといったことが語られている。ひるがって自分はどうだっただろう。やってきたことをやり続けられるために自分は何かをしたのだろう。そう振り返って、やって来なかったとなあと自覚し後悔して気が沈む。

女優になりたい、スターになりたいと願ってオーディションを受けまくっても、演技が硬くて応用が利かず、落ちてばかりいるフランちゃん。自分ではよくやっているつもりでも、プロのスタッフには通用しない。そんなフランちゃんに敏腕映画プロデューサーのポンポさんが、アドバイスめいたことをしてだんだんと立ち直らせていく。もっとも、ポンポさんはあからさまなアドバイスはしない。例えばオーディションに行ったら、台本なんか読んでないで他の人の演技を見ると論じて自分がどれだけヘマをしてきたかを分からせる。役に合っていない。堅すぎる。焦りすぎ。そんな演技がすべて自分に当てはまるとフランちゃんは気付く。そう。自分から気付かなければ意味が無い。そういう意味でのスパルタであり愛情もあるポンポさんのアドバイスにちゃんと気付けたフランちゃんを主演に1本、ポンポさんが映画を撮ってフランちゃんがスターになって、これで万々歳とならないところが「映画大好きフランちゃん NYALLYWOOD STUDIOS SERIES」の凄いところだ。ニャカデミー賞監督のジーン・フィニと互角に勝負したポンポさん監督の映画で、見事にヒロインを演じたフランちゃんにはすぐさまたくさんのオファーが舞い込んだ。けれども、フランちゃんはそれらのオファーをすべて断ってしまう。いったいどうして？ それは企画を考えていたから。自分がやってみたい映画のための企画を練り上げてポンポさんに見せることで、誰かの顔色をうかがって過ごすんじゃなく自分の力で自分の居場所をつかもうとした。そうした前向きで積極的なスタンスに、ポンポさんも乗り仲間の脚本家や音楽家も引き込まれて、フランちゃんをもっと守り立てていこうとする。そんなストーリーから浮かぶのは、いくら自分では頑張っている気になっても、誰かに必要とされているとは限らないから、必要とされるように努力しなくてはいけないということ。そのためにフランちゃんは自分が輝ける場所を自分で作った。自分はどうだっただろう？。与えられた場所で目一杯にやっていたら次もちゃんと続けられると思っていたし、実際にどうにか続けてこられたんだけど気がつけば不要とされて次の居場所はそこにはなかった。しばらく雌伏をすればまた必要とされたかも思っていたりするのが未練となって、なかなか前向きになれないでいる。1年近く経っても。そんな状況になる前にフランちゃんだったらどうするか。そこに居場所がないのなら、自分で居場所を作ろうとして手練手管を駆使するだろう。ポンポさんという応援はあっても、自分自身で気付いて何かを成し遂げようと走り出すだろう。そういう人にこそ手は差し伸べられ、道は開かれるのだと言うことを、「映画大好きフランちゃん NYALLYWOOD STUDIOS SERIES」から学んだ。だったら自分も……という時に、やっぱり躊躇う自分の尻を蹴飛ばしてくれるポンポさんはいないのか？ そう探して見回してしまう自分にはなかなか未来は来なさそう。それでもやって来たことを認めてくれる人たちがいることを感じ取り、そんな人たちの思いに答えられるような居場所を作れたらと願う。作らなくてはと思う。フランちゃんのように。ジーン・フィニのように。

書評家／ライター／タニグチリウイチ

- 熱い展開です。何らかのコンテンツを作り上げる、という経験や願望を持った人には特に心に響く作品だと思います。

会社員／林 礼春

- NHKでテレビアニメになって一気にメジャー感が増し、今更敢えて推すことも……とも思わなくはないけれど面白いものは面白いのだから仕方がない。作者に「ゴールは決めてあるのか？」と訊ねたら「特に決めていないけれど、もし大団円があるとしたら（主人公ら3人が）新しいアニメ業界を作ること」と語っていた。世界を変えるくらい、大きくなってほしい！

朝日新聞記者／小原篤

「衛府の七忍」山口貴由

- 既存の物語を山口貴由的に展開しなおすところなる。エンターテインメントとしての型がしっかりあって引き込まれる。

本読み／マサトク

「王様ランキング」十日草輔

- 大人の心にしみる漫画です。設定は決して凝ったものではなく、絵本テイストのファンタジー作品なのですが登場人物の心理描写が読者の予想を裏切り続けます。主人公はとても非力で仲間も少なく、親も子も兄弟も見ず知らずの人も、結局は立場や見かけではなく一人の人間として描写される内容は残酷です。そんな中で主人公と向き合い心を交わせる登場人物の一人一人がいとおしく、気づけばのめりこんでいました。読んでいてじわりじわりと心に浸みこんでくる漫画です。

会社員 / 佐藤優

- 最初に絵を見たときは「絵本？」なのかと思ったけれど試しに読み始めたら、、止まらない！まるでおとぎ話のような童話のようなシンプルさに、しっかり肉づけされた登場人物の描きこみが魅力的！

三省堂書店 / 内野智未

- 世界観・キャラクター・ストーリー、全てが素晴らしい。手塚治虫のような文学作品だと思います。子供に読ませたくなるマンガです。

システムエンジニア / 三浦佑樹

「夫のちんぽが入らない」ゴトウユキコ、こだま

- この原作をゴトウユキコ先生に描かせようと思ったのは誰だー！と海原雄山風にのれんをくぐって怒鳴り込みたいほど、すばらしいマリアージュ。ぶつかりあう性の合間に描かれる、等身大の男女のロマンチックな瞬間にぐっと心をつかまれます。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

「乙女怪獣キャラメリゼ」蒼木スピカ

- ドキドキすると怪獣になっちゃう女の子を主人公にした「少女漫画」です。随所から溢れる怪獣愛(クリーチャーとかモンスターでなく「怪獣」なのがミソです)から繰り出される特撮ファンがヘドバンするくらいの「分かってる」描写が素晴らしすぎる上に、自分に自信のない女の子が、学校の人気者と恋に落ちるという王道少女漫画的ストーリーが愛しすぎるという、稀有な読書体験のできる作品です。設定がぶっ飛んでいるため、破天荒なお話のように見えますが、どこかにコンプレックスを抱えた女の子たちが、少しずつ自分を好きになれていく自己肯定のためのお話でもあるように思えました。キャラクターたちの顔芸やギャグも冴えに冴えています。前に進みたいけど自身が持てない人たちに読んでもらいたい、優しいお話でもあります。

アニメイト秋葉原 キャラクターグッズ担当 / 岡部 真矢

「乙女ゲームの破滅フラグしかない悪役令嬢に転生してしまった…」ひだかなみ、山口悟

- 「乙女ゲーム」をプレイしたことがない私にとって、新鮮過ぎるお話しでした。バッドルートの回避の仕方が幼稚過ぎて可愛いし、主人公の人格が複数人居て(ふつうは善と悪の2人なのに)会議していく場面とか、最高です。幸せになるお話しがたくさん詰まっております。

アニメイト 書籍課 / 鈴木寛子

「乙女文藝ハッカソン」山田しいた

- まずこの絵、キャラクターの顔のゆがませ方に目を奪われます。なんて不安定で楽しそう！ この絵の魅力がそのまま「小説を創造する」ことの楽しさに直結していてドキドキします。小説をロジカルに構築していく芙実や高菜、天啓を受信する滝野と、創作論としても面白く、とにかく「創作の面白さ（と苦しさ）」そのもの、小説を組み立てていく過程そのものをエンタメとして描いちゃうところに、マンガってこういうこともできるんだな〜と驚かされました。創作の過程をその脳内ビジョンも含めて表現するという試みとしては「映像研には手を出すな！」などもやっていますが、いわゆる漫画家マンガとも違う独特の開放感やワクワク感があって、さまざまな創作の環境に恵まれたいまの時代にこういうマンガがぜひ増えて欲しいと思います。いやあ楽しかった〜。で、この盛り上がりで打ち切りってどゆこと?? なんとかしても続きを描いていただかなければ……！

会社員 / 末永龍介

「オメガ・メガエラ」丸木戸マキ

- 男性の妊娠や出産を扱う「オメガバース」のモチーフに、身分制度や家督争いがからんで、それはそれは濃厚な骨肉の争いが描かれている作品。そのドロドロさ加減たるや、男女のもめごとの比じゃなくて、うおー……と思いがちながらも読んじゃう。好き嫌いは分かれるかも。でも、誰にいちばん共感した？ なんて飲み会で話をしたら盛り上がる気がするなーということで一票！

ライター／老年学研究者 / 島影真奈美

「海王ダンテ」皆川亮二、泉福朗

- ザ・アドベンチャー漫画。ARMS・スプリガンと、少年心をくすぐる冒険漫画といえば皆川亮二先生ではないでしょうか。本作では先生の“らしさ”を突き詰めたかのように、産業革命直前の時代設定で現代のインディージョーンズのような雰囲気です。秘境・遺跡・戦場と目まぐるしく舞台を変えながらも、一本筋の通った物語のワクワク感は読み進めるほどスピーディーかつ奥深さを増しています。

会社員 / 佐藤優

「カイニスの金の鳥」秦和生

- 多様性が重要と言いつつ、女性というだけで不自由を強いられていた時代が実はそんなに過去の話でもなく、場合によっては現在進行形だったりして、頻繁に話題に上っている昨今。重くなり過ぎず、主人公が夢を叶える話として面白く物語を紡ぎながらも、しっかり問題提起してくれている、こういった作品が出てくるのもまた時代なのかな、と思います。

首都圏 TSUTAYA / 井出 麻悠美

「輝夜伝」さいとうちほ

- 天女をめぐる華麗なる平安絵巻。ロマンティックでアクションもあり、美男美女が堪能できます。現実を忘れて楽しめる雅な世界です！

主婦 / 紺野 泉

「かげきしょうじょ！！」齊木久美子

- 2019年に初めて知って（たしかTwitterで、だったかな、観測範囲内のSFクラスターで話題になった）最新刊まで一気に読んだマンガ。ちょうど最新刊が8巻なので推します。宝塚歌劇団を目指す少女たちの群像劇。スツとスマートな絵柄で描かれる、彼女らの姿が清冽で可憐で微笑ましくてシリアスで、一気に読まされた。面白かったなあ。続き読みたい。

ソフトウェアエンジニア / 第3齋藤

- 宝塚を模した少女歌劇団で夢を追う少女たちの姿を生き生きと描きつつも、「芸」とは、「才能」とはというシビアなテーマが背骨となっており、繊細な心情描写ともあいまって大変読み応えがある。

漫画読み / yama-gat

「神クズ☆アイドル」いそふらぼん肘樹

- 本作はアイドルオタクによるアイドルオタクの為のアイドルオタク漫画だと勝手に解釈してます。オタクがそこに生きてる。「顔がいい！」からの成長物語って観点も新しい。早く続きが読みたいです！

デザイナー / 金輪英恵

「可愛そうにね、元気くん」古宮海

- 作品冒頭、最強のつかみ。本物のヤバさと抑制、そして世の「不謹慎刈り」と真っ正面から戦う作品。ちょっとトロい女性が鼻血を出している姿をラッキースケベと認識し、あまつさえその妄想をマンガにってしまう高校生主人公を、表面上の完璧ヒロインが想像を上回る人の悪さとねじ曲がった恋愛感情で翻弄してくれる、というフィクションだったらこれぐらいやんなくちゃ！ブラボー！と思わせてくれる作品。あとふたつ好きなところがあって、変態の主人公の性癖への葛藤、次々登場する新キャラクターが想像を超えて人が悪いところなど、もう、こんなにドキドキするマンガない！超好き！！

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

- 異常な性癖を持つ主人公の、恋の葛藤が面白い。八千緑さんがどんくさくも魅力的で、可哀そうで可愛いという表現がとてもしっかりきます。ほかの登場人物の性癖も見え隠れしていて、先が気になります。ヤバいのにほっこりしてしまう、不思議な魅力のある作品です。

デザイナー・シンガーソングライター / 平松新

- リョナ好き陰キャ少年+被虐メガネっ娘ヒロイン+ドS美少女って……ここまで盛ったならもう素敵で純粋な恋物語になるしかないという設定が素晴らしいです。3人の関係がどうなるかがまったく読めない不安定さがあるんですが、まあどうあがいても変態一直線にしかならないのだから安心して読んでます。

会社員 / 末永龍介

「ガンニバル」二宮正明

- どう考えてもこの賞向きではないが、昨年読んだマンガの中で最も「刺さった」作品。でも、安易に薦めることはできない。「肉食の風習」「村八分サスペンス」「児童虐待」「グロ」……これらのワードに耐えられそうな人向けです。つまり読者をすぐ選ぶ。しかし、決していわゆる「B級ホラー」ではないのが本作のすごいところです。女性キャラがほとんどおらず、キャラクターの大半が汚くてむさ苦しいオヤジたちですが、これがリアルで妙に生き生きしている。スーパーナチュラルな要素が一切なく、心理の綾や人間関係のドラマだけでハードにぐいぐい押ししてくる。絵も演出もハイレベルで、とにかく緊張感があって巧い。毎巻の引きの強さもただ事ではありません。ある事件で大きく傷ついた家族の再生の物語でもあります。現在4巻、かなり終盤に近づいており、どう考えても凄惨なラストしか予想できないが、何とか希望ある方に向かってほしい。私は単行本が待ちきれなくて、連載誌の「週刊漫画ゴラク」で追っているほどです。この作者は、本作の前に『鳥葬のバベル』という怪物ホラーも描いていて、後からそれも読んでみましたが、はっきり言って天と地ほど違う出来。何でこれほどうまくいったのか、不思議なくらいです。

読売新聞文化部編集委員 / 石田 汗太

「官能先生」吉田基已

- は一好き〜。不器用な男女のめちゃくちゃが最高のご馳走なので、いつも吉田基已作品にはお世話になっております。なんていうか、「才能」を間近で感じずにはいられない凡人（だと思い込んでる人）の感情が本当に本当に繊細に描かれるので、身悶えるしかないんですよ。憧れと嫉妬と羨望とその他もろもろ。心乱されまくりな作品。好き〜。

オリオン書房 ノルテ店 /

「寄生獣リバーシ」太田モアレ、岩明均

- 寄生獣×太田モアレという邂逅に興奮せずにはられない。「寄生獣」の世界観に踏み込めるのは、太田モアレという稀有な作家だけだろう。何が起ころのか分からない予感だけがヒシヒシと迫ってくる。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

「着たい服がある」常喜寝太郎

- ロリータ服を着たクールな女の子が雑踏の中に佇む表紙に惹かれました。学び考え行動し成長していく主人公をとて尊敬できます。漫画の中のキャラクターですが、マミという人間の人生の一部を覗き見たような感覚。主人公のマミ以外の人達もサブキャラや脇役という感じではなく、各々が自分の人生の主人公として生きている姿が見えるのもいい。5巻で完結していますし、ぜひ読んでみてください！

声優 / 富岡美沙子

- めちゃくちゃ泣きました。端々の細かいところまでリアルが横たわっていて、他人事には思えずどうしても感情移入してしまいました。親の話とかもうボロ泣きです。無条件に感動してしまったので1票！

(株)来知・WEBデザイナー / 河本 智芳

- 誰しも人の中で生きていく以上、「他人から見た自分」と「自分から見た自分」の間で生きづらく感じることもあると思います。なりたい自分になる！ということが、他者からのレッテルによってハードルが上がってしまうこともしばしば。しかし主人公は、ロリータファッションが好き！ということをきっかけにして、どんどんなりたい自分になっていきます。迷いながらもちゃんと自分の好きを伝えていく、主人公の勇気と素直さにこちらが勇気づけられます！最後の選択もとても清々しく、一気に完結巻まで読んでしまいました。タイトルも、読む前と読んだ後の印象が180度変わりました。着たい服がある！この言葉を胸を張って言えるようになったなら、それはとても幸せだね。

公務員 / 宇田川 結衣子

「木根さんの1人でキネマ」アサイ

- 映画の趣味、本の趣味、漫画の趣味もそうですが、結局個々の好き嫌いというものがあります。「好きなものは好きなんじゃ！興味ないものは見てない！」と言い切る感じがこの作品の(木根さんの)一番かっこいい部分なんじゃないかと思います。(これってマンガ大賞で作品を他の人にお勧めしている方の視点から考えると矛盾するんでしょうけど。)でも、主人公の木根さんが好きな映画について語りたい、語り合いたいという思いと、結局他人とは分かり合えないという部分を行き来する様って今まさにこのコメントを書いている自分のようにも思うんですよ。このマンガに出てくる作品でも「スターウォーズ」は私はあまり面白いと思わないですし、「バッドボーイズ2 バッド」や「バック・トゥ・ザ・フューチャー」は確かに面白い。ゾンビ映画の回でなんでキョンシーが出てこないのかと私は思うけど、そんなこと言うとキョンシーはゾンビじゃないとか不毛な議論に発展するのか?とか。まあ、この作品は決してお勧め映画を並べたマンガではなくて、なんでこの面白さがわからんのか!と吠える主人公を楽しむマンガなんですよ。そこにすごく共感してしまってます。

会社員 / 林 礼春

「君には届かない。」みか

- 友情なのか恋なのか、どちらかわからない初々しさ、瑞々しさを感じます。この作品には共感しっぱなしです。おそらく恋愛感情を自然に、こういう感情に覚えがあると感じたらかです。男女でも同性でも相手が自分をどう思っているのか、好きだと思ってきているのか、もしかしたら自分勝手な思い込みではないか…など一喜一憂して一歩を踏み込むことができないのは同じ。胸が痛くなるほどに読み入ってしまいます。

販売員 / 八重田幸子

「君は放課後インソムニア」オジロマコト

- 夜、眠ることができない伊咲と丸太、お互い同じ悩みを持つもの同士。そして心が安心できる存在。そんな存在だから一緒にいると気になって仕方がない。すぐわかります。おとなだからとか子供だからとか関係なく、とても大事なことだと思います。そんな2人が天文部を作って眠れない夜をどんな風に過ごしていこうとしているのか、2人の距離がもっと近くなっていくのか、展開が気になります。

販売員 / 八重田幸子

「きみを死なせないための物語」吟鳥子、中澤泉汰

- 「地球に人類が住めなくなっていて、限りある資源を活用しながら宇宙で暮らしている状況で、こういった階層が形作られているのかを描いたSF的な想像力に溢れたSFコミック。人類を絶対的な高みから管理する存在があって、その思惑によって不要な命が間引かれ、断たれていくというディストピアめいた雰囲気もあって、そうした世界で生きている人はいったいどのような心理になるのかを考えさせられる」「無能には生きている資格はないのか。従順こそが美徳か。能力がある者だけがすべてを知り、それ意外の者には世界の根幹に迫る知識を与える必要はないのか。管理され抑圧され、それを自然なことだと受け止めている社会に生まれたほころびが、これからコクーンを、人類をどう変えていくかに興味が向かう。どうして人類は遠くに行ってもいけないのかも。そもそも人類は今、どこにいるのか。地球はどうなっているのか。浮かぶ数々の疑問に答えが示される続きが今は心から待ち遠しい」そう、第4巻までを読んで感想を書いた銀鳥子による「きみを死なせないための物語（ストーリー）」(秋田書店)。2019年には第5巻と第6巻が刊行され、第一パートナーとして、ある種の幼なじみとして育った男子のアラタとシーザーとルイ、そして女子のターラに加え、ダフネー症という16歳までしか生きられない病気に罹ったジジという少女で形作られていた物語は大きく変化した。アラタはコクーンと呼ばれる、宇宙に浮かんで人々が暮らす世界の秘密、そして人類が遠くへは行っていけない理由を探ろうと、コクーンを管理する「天上人」の仲間入りを果たそうとする。ターラはアラタからの第三パートナーになって欲しいという申し入れを断り、残されたジジがダフネー症によって死なせないための方策をアラタに代わって探し求める。ルイは芸術家として大成し、シーザーは軍人から大統領を務める父親の後を継いで政治家への道を歩み始めるかの分かれ道に立つ。それぞれが大人となって自分の役割を果たそうとし、あるいは悩みながらも日々を送る中、それでもやはりコクーンという世界への懐疑を胸に秘めて生きている。そうした中、アラタは派遣されて社会から外れた者たちが暮らす場所へと潜入し、かつてルイが愛し、そして新だダフネー症の女性、祇園を知る者たちに会う。宇宙について話すことを禁じられた世界。地球について誰も知らされていない世界。優秀な者が選別されて生き続け、病気を持つ者、老いた者は選別されて間引かれ速く世を去られる世界。繁栄を謳歌しているようで行き詰まり、息苦しさを増す世界の中で“目覚めた”者たちが、反抗をつづける者たちがたどり着く場所はどこなのか。京都コクーンでアラタが見つけた、VASIMIRなる物体が意味するものは、隔離されている場所を抜け出し、ターラにかくまわれルイと第三パートナー契約を結んだジジの運命は。「これは君たちを死なせないための物語」「この真実に人類はきっと耐えられない」。全てを知っているらしい者から投げかけられたような言葉が意味する、人類がそこにとどまっている理由が気になる。それでも、「君を死なせない」ために動くアラタやターラやルイやシーザーたちの思いがぶつかり合った先に、解放された世界が、宇宙が広がっていることを願ってこれから出る続きを見守っていく。

書評家／ライター／タニグチリウイチ

「吸血鬼と愉快的仲間たち」羅川真里茂、木原音瀬

- まさしく、「吸血鬼と愉快的仲間」！お茶目でドジな主人公と、それを取り巻く面々のキャラもイイ！ストーリーもしっかりと根っこがあり、たまらない萌えを羅川真里茂先生が巧みに表現したおススメの作品です。

漫画家専門鍼灸師 / 碓氷麻里子

「空挺ドラゴンズ」 桑原太矩

■ 第10回のマンガ大賞2017にノミネートされた時に読んだ、桑原太矩の「空挺ドラゴンズ」（講談社）第1巻から受けた印象は、宮崎駿が描いた漫画版「風の谷のナウシカ」に「天空の城ラピュタ」が混じった絵柄と設定に、九井諒子の「ダンジョン飯」も混じってといった具合に、いろいろな漫画なりアニメーションの影が見えてしまっていて、体が数歩下がってしまった。同感だった人も多かったのか、最終候補にノミネートされた13作品ではポイントで最下位。以後、続刊が出てもしエントリーされることはなかった。その「空挺ドラゴンズ」が、2020年1月からアニメーション化されて、フジテレビの「+Ultra」枠とオンライン動画サイトの「Netflix」で放送・配信されるようになった。そして、全12話を配信している「Netflix」で見たアニメ版「空挺ドラゴンズ」は、空を行く捕龍船の活躍と、そこに乗っている龍捕りらの活動が描かれていて、原作の漫画を読んだ時よりもすんなりと受け入れられ、そして見るほどに深く引きつけられた。もしかしたら、原作の割とがっしり描かれた線とは違って繊細な線と色味によって表現されていること、モニターという横長の画面だからこそ捕龍船が空に浮かんでいる感じがしっかりと見え、船内のあちこちを横に移動しながら仕事をしたり、龍を獲ったりする様子を伝えていたことも、引きつけられた理由かも知れない。ただ、そうやって入口を超えたところにあった面白いドラマは、原作の漫画で桑原太矩が描いたものになる。そう考え、ならばと改めて原作の漫画を手にとって触れたドラマや、活躍するキャラクターに深く感じ入った。これは面白いと。これは素晴らしいと。捕龍船は空を行く捕龍船といったところで、そんな中の一隻、クイン・ザザ号に暮らし生きて仕事をしている乗組員達と龍との勝負が「空挺ドラゴンズ」のストーリーとして描かれる。龍といってもファンタジーに出てくるドラゴンという感じではなく、深海魚が巨大化したような風体で様々な種類がいて空を泳いで移動する。捕龍船はそうした空を行く龍を獲っては肉を切り分け、油を絞り骨も皮も内蔵も処理して売りさばく。クイン・ザザ号はどこかに母港があってそこに戻る訳ではなく、行く先々で龍をとっては売りさばき、寝泊まりをしてまた空に帰って行く。そこは捕龍船とは違ったところかもしれない。デラシネな感じがあって、地に足を着けた人たちから嫌われている感じ。それは龍を呼ぶかもしれないという恐怖心もあるんだろうけれど、どこか自分たちとは違う存在だとい部分もあるかもしれない。漫画もアニメも第1話では、クイン・ザザ号の乗組員たちが龍を持ちこんだ街に入れて貰えず、寝床を用意してもらえない状況が描かれた。そこは新たに現れた龍を退治することで認めさせたいけれど、普段からそうやって差別を受けながらも旅をして暮らしている捕龍船の人々が、どういう来歴をもってそこに集まったのかが気になった。男たちはまだしも龍捕りのヴァナベルや操舵士のカペラ、機関士のメイン、そしてメインヒロインとなるタキタといった女子が参加しているところが特に。後、ヴァナベルについて出自が語られ、そしてメインも許嫁がいながら捕龍船の機関に引かれ乗り組み今へと至った過去が語られる。男たちでも主人公で龍を獲っては喰うことを目的に生きているミカが、かつて共に龍を捕っていたクジョー・ランダウとの過去の戦いが振り返られ、再開から再戦へと至る物語が描かれる。龍獲りだけが人生で、挙げ句に怪我をして落ちぶれたクジョーはあるいは、ミカら龍捕りたちの将来の姿かもしれない。それでも挑まざるを得ないのが龍捕りの性分。やりたいことをやり抜くその生き方に、なかなか踏み出せない人間として憧れを感じてしまう。そうした生き様を描いているストーリーでは、同時に龍をどう喰うかといったグルメ的なエピソードも語られる。ただ焼くとか煮るといった食べ方以外に、燻製にしたり龍の脂で焼いたパンにのせたりといった食べ方が示される。架空の肉でありながら、実際に存在して食べられる上に相当に美味であるかのように感じられるのは、しっかりした手順で調理され、しっかりとした絵で描画されているからだろう。紙の中、モニターの中にあって手を触れられない料理でありながら、次元を超えて漂ってくるその匂いもまた、「空挺ドラゴンズ」の大きな魅力だ。もしも龍の代わりに牛や豚や羊などで作っても同じように美味なのか。試したくなるけれど、やはり龍とは違った味なのだろう。だからこそ憧れるのだ。「空挺ドラゴンズ」の世界に。

「クールDJ男子」那多ここね

- かわいい!!!!かっこいい!!!!それだけで充分です。

デザイナー / 金輪英恵

「葉屋のひとりごと〜猫猫の後宮謎解き手帳〜」倉田三ノ路、日向夏、しのとうこ

- 1つ1つの事件を解決していくと、実は大きな陰謀につながっている、というのがたまらない。謎解きの醍醐味とも言える爽快感が嬉しい。

教師 / 持丸宏司

「クマ撃ちの女」安島薮太

- 狩猟の緊迫感、捕獲後の獲物を捌く生々しさ、町に戻ってきての安堵感に、獲った肉を頬張る場面は垂涎もの。何が彼女にそれほどまでクマ撃ちへ駆り立てるのか。過去に何があったのか。夢中になって読んでしまいます。

Books アイ茗荷谷店 / 野口忠義

「グヤバノ・ホリデー」panpanya

- 毎作全く期待を裏切ることのない天才さに惚れ惚れするばかり。

音楽家・「閃き堂」店主 / 谷澤智文

「軍艦無駄話」黒井緑

- 恋愛系専門の「楽園」になんでこの作品が?というレベルで近代艦船の歴史やトピックを解説しており、ミリタリー畑の人間も思わず唸る考証と独特の絵柄、そして強烈な文字情報の圧が心地よい異色の学習漫画

住職 兼 ライター / 蟬丸P

「ゲイ風俗のもちぎさん セクシュアリティは人生だ。」もちぎ

- ゲイ風俗という未知の世界を知ることができるだけでなく、もちぎさんの、人との接し方や、言葉は考えさせられるものがあります。

SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

- SNS 発のエッセイコミック。もちぎさんの生い立ちから現在までがわかる一冊です。

ブックファースト新宿店 / 渋谷孝

「煙と蜜」長蔵ヒロコ

- 設定が大正時代で、小さな女の子の許嫁が30歳の将校。とにかく姫子が純粹でかわいい。文治さんは色気があって魅力的。そんな二人のなんともささやかな恋物語。

SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

「恋するワンピース」伊原大貴

- そう！あの ONE PIECE の公式スピンオフ！ ... という名のワンピースキャラ一切出てこない学園ギャグ漫画です。ギャグセンスが素晴らしく、キャラクターも 1 人 1 人強烈に魅力的で、それでいてバランスがいい。伊原先生天才だなと思います。ワンピースの知識量も半端なく、恋するワンピースを読んで思い出したキャラクターや話を探すために本家を読み返す。

声優 / 富岡美沙子

「恋と国会」西炯子

- ちょっとこのところイキのいい政治マンガに飢えていたので、嬉しい出会いです。25 歳の世襲のイケメン議員と、同じく 25 歳の元地下アイドル議員が主人公。ちょいちょい挟んでくる業界ネタは、政治の世界で 20 年ほど生きている私にも楽しめます。今後の展開が（現実の政治の世界をどう踏まえてみるのか、も含め！）楽しみです。まだ「恋」は少なめですが。

衆議院議員山尾志桜里事務所政策担当秘書 / 三葛敦志

- 国会ってそうなんだ。と、今の政治がどうこうじゃなくて、そういう仕組みなんだなと。

マネージャー / 樋口健

「恋煮込み愛つゆだく大盛り」にくまん子

- 新しき恋愛短編の名手。ドロドロとラブラブのバランスも良き。

bar 図書室 店主 / 岡部愛

「ゴールデンゴールド」堀尾省太

- 物語序盤のインパクトがありすぎて、ストーリーが進むにつれて失速しそうな作品かも、という心配は全くいなかったです。ガンガン謎は深まり怪しさ満点の作品だと思います。結末が全く想像つかない。

PENICILLIN / HAKUEI

「極主夫道」おおのこうすけ

- マンガ的展開...ですが、あるあるというのか笑ってしまうシーンが多数です。主夫的な仕事を極道のセリフで表現する言い回し等もよく研究されていると感じました。大作！...という感じではないですが、日常風景でも笑える作品でした。

株式会社スマイルアクス・営業大臣 / 岡村光徳

- 伝説の元ヤクザが主夫道に真剣にまい進する姿のインパクトだけで次が気になる。ギャップのつけ方がうまい。

サブカル専門ライター / 河村鳴紘

- すっかりセンシティブな話題となってしまった感のある反社組織ネタのギャグ漫画ですが、毎回ほのほのしながらキレキレで、話数を重ねて衰えるどころか、どんどん面白くなっている。元やくざの主夫という一発ネタ設定の日常ショートギャグで早々にマンネリになってもおかしくないのに、飽きない。毎回新鮮に面白い。それは単純にすごい事だと思う。

丸善ジュンク堂書店 営業本部 / 小磯洋

「ここは今から倫理です。」雨瀬シオリ

- 今、生きるのに苦しんでいる高校生はみんなこれを読めばいいのに。と本気で思います。主人公は先生側なので、大人でも十分に楽しめます。(まあ青年誌だから当然なのですが)哲学などの知識系漫画としても楽しめますが、個々のキャラクターが魅力的で、ちょっと嫌なやつもとても人間的で嫌いになりきれない感じが良いです。絵柄的にも若干のウツ系を匂わせますが、テーマ的にもある程度の救いが用意されてるからそっち系が苦手な人でも大丈夫、かもしれません。

バーテンダー / 村井真也

- 難しい説教系と思わせてめちゃくちゃエンタメしている。でも伝えたいメッセージが自然に読んでいる人に入ってくる。そんな素敵な作品です。

Migimimi sleep tight / 涼平

「古代戦士ハニワット」武富健治

- 埴輪 VS 土偶！ 諸星大二郎的世界観に、武富健治ならではの執拗な内面描写を盛り込んだ作品。濃い、濃すぎる。

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

- この作者さんは情景描写が神がかってうまい。主人公はいわずもがな、モブの描写がめちゃくちゃ上手い。未知の怪物と対峙したとき見物客や、勇みさらなる悲劇を引き起こす消防団。そういうさりげない描写に力をいれているから、実際に同じことが起きたら、そうなるだろうという現実味が増す。美は細部に宿るとというのが本当なら、この漫画はアートに近い。

鳥取県 高等学校 教諭 / 佐川 由加理

「コタローは1人暮らし」津村マミ

- アパートに一人暮らしする4歳の少年コタローと、コタローを取り巻くちょっと頼りない大人たちの関係を描いた作品。非現実的な設定とコミカルなストーリーも、現実の子どもが見せる妙な達観を丁寧に描くことで、リアルさと愛おしさを感じさせる佳作に仕上げている。

弁護士・三村小松法律事務所 / 三村 量一

- 個人的恒例の2年連続投票作品、今年はこちら。育児放棄された子供の一人暮らしというスペック読みでは悲痛にも思えるモチーフだが、笑いあり、涙ありで軽妙に読ませてくれて、心がじんわりあたたまる。大きな流れのストーリーのなかで、ページ数が比較的短いのに各話で山や谷がていねいに作られている。まさにいま「友達にすすめたい」マンガ。

有限会社馬場企画・編集者 / 松浦達也

「金剛寺さんは面倒臭い」とよ田みのる

- ハイテンションの中に、あくまで「マンガ的」な面白さを追求して、それが成功している。稀有な作品。

本読み / マサトク

- ひたすら正論をぶつける金剛寺さんと、ひたすら優しすぎる樺山君、2人の約束されたハッピーエンドを、ひたすらハイテンションで綴るラブコメ。読むだけでとんでもない元気をもらえます。

システムエンジニア / 三浦佑樹

- 結末をずっと前に明かして、ついにはその最終決戦まで描いて、堂々と「ハッピーエンド」とまで謳っていて、でもまだ先があるッ！ どうなってんだッ！ やはり破格の作品。

朝日新聞記者 / 小原篤

「サーカスの娘オルガ」山本ルン

- ロシア革命を背景にサーカスに売られた少女の半生を辿る歴史ロマン。確かな作家性と直球のドラマを全三巻で描き切った手際が素晴らしい。

ライター / 福井健太

「サイクリーマン」原田尚

- 月並みだが自転車に乗りたくなるよね～車でもなくバイクでもなく、そして歩きでもなく子供の頃に自転車に乗れるようになり、行動範囲が広がってこれまでと違った景色が見えてきたドキドキかんがこの漫画には詰まっています

(株) エフ・ジェイ エンターテインメントワークス / 阿部 大介

「最果てのパラディン」奥橋 睦、柳野かなた、輪くすさが

- 異世界転生ものの中で、どんなメジャー作品よりも秀逸だと個人的には思います。しっかりとしたファンタジーの世界観。途中から転生ものということをおぼろげに忘れるくらいファンタジーの中で描かれるリアルが、他のチートものとは一線を画します。始めの街？から出るまでに描かれる主人公の成長も、そこから旅立ってからの冒険もとにかくワクワクが止まりません。

バーテンダー / 村井真也

「咲宮センパイの弓日」天野茶玖

- すげーくだらない！(褒め言葉) 弓道部の女子高生がバイトで殺し屋やってるっていう設定も面白いし、ギャグのセンスも個人的にはツボでした。絵柄もすごく読みやすいし主人公がアホ可愛くて◎。

会社員 / 小野塚博之

「酒と恋には酔って然るべき」はるこ、江口まゆみ

- まさに大人少女漫画家の名にふさわしい作者。ちょっと少女漫画じゃ物足りない…となった人は、是非この方の漫画を読んでください！イケメンの描写が絶妙です。とにかくイケメン俳優で実写化してください！

bar 図書室 店主 / 岡部愛

「佐々木と宮野」春園ショウ

- 5巻でときめきが大爆発したので推します。こんなにときめいたのは「君に届け」の10巻を読んだ時以来かもしれない。宮野くんを「みゃーちゃん」という呼び方、すごく可愛くていいですね！！！！

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

「ささやくように恋を唄う」竹嶋えく

- 前作以上にキャラクターのビジュアルが可愛くなった。よくある百合作品かなと思っていたが、1巻のラストで驚かされました。今一番期待している百合作品です。

リプロ ecute 大宮店 / 首藤 瑛

「サチコと神ねこ様」W a k o

- 元々が毎晩1本つづ更新される形でのWEB連載なので、何気なく読むのに丁度良い上、笑いや癒しもあって、とてもほっこりします。理系の知識、リアルニュースネタ、時々仏教、どれも実生活で役に立つモノばかり。基本設定はとてもファンタジーな漫画として読んでいても、何処かリアルと繋がっていて、全方向にジャンルレスとでも言うのか、閉じていない世界観が新鮮です。

首都圏 TSUTAYA / 井出 麻悠美

「サマータイムレンダ」田中靖規

- 昨今よくある「ループもの」かと思って軽い気持ちで読み始めたら、想像以上に話が捻ってあってバシバシ予想を裏切ってくる展開にシビれました。テンポ良く読み進められつつも急にゾクッとさせられたり、常に緊張感があって面白い！

会社員 / 小野塚博之

- 孤島、民族信仰、アクション、異形、タイムリープ…「いや、詰め込み過ぎでは…？」なんて思いきや、見事なまでに混ぜ合わせて作品に引き込んでいく展開を、高い画力で描き続けてくれている、今読んでおくべきSF長編作だと強く薦めたいです。

会社員 / 伊東敬祐

「さめない街の喫茶店」はしゃ

- ある秘密を持った小さな喫茶店のお話。気心の知れた仲間との他愛もない会話と、美味しい食事。どこにでもありそうで、なかなか見つけれない、心のよりどころのような場所。ここがあるから、ここがあったから、辛いときも前を向いて生きていける。そんな場所を描いたマンガです。集う人たちの穏やかな会話、お店の優しい雰囲気、毎回レシピつきで登場する食事、と、いいお店の要素がバランスよく描かれているので、実際の雰囲気のいいお店にいるような気分してくれます。少し疲れてしまった人に特におすすめのマンガです。

システムエンジニア / 廣瀬公将

「さよならミニスカート」牧野あおい

- 女の子の戦いを描いた物語。一巻のスリリングな展開に加えてそれぞれの恋愛模様も進展し更に見逃せません。まだまだ驚き展開があるのでは、と期待して続きを待ってしまいます！

漫画家専門鍼灸師 / 碓氷麻里子

「さんかく窓の外側は夜」ヤマシタトモコ

- 3年連続！巻数的にこれが最後の投票になると思う。BLだから、ホラーだから、と読まないのはもったいない。人間がきっちり描けている作品だからミステリーとしても読み応え充分。

三省堂書店 / 内野智未

「幸せカナコの殺し屋生活」若林稔弥

- なんだか疲れたな、と思うときにおすすめの漫画。複雑な話や思い話を読むにはパワーがいる。くすりと笑ってなんか気持ちがすっきりする作品。

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

「ジェンダーレス男子に愛されています。」ためこう

- 可愛すぎるジェンダーレスな彼氏と彼氏最推しの彼女。見ててハッピーになるカップル。読んだらしあわせになります！

主婦 / 紺野 泉

「潮が舞い子が舞い」阿部共実

- 著者ならではのセンス冴えまくる姿でおかしいセリフまわし、いそうでいなさそうでいそうなキャラたちの日常劇が楽しいんですが、そうしたやりとりの奥に、語られず描かれぬ、何か切なくて胸が千切れるようなものの気配がふわっと漂うとき、呆然とする。夜の団地で他愛のない会話を交わす水木と百々瀬を見ると、もうどうしようもなく泣きそうになるんです。

会社員 / 末永龍介

- 高校のクラスの一人一人に焦点を当てた物語です。登場人物たちは、人に興味があり、積極的にかかわってくる。そのため、一人一人にフォーカスをあてて、神の視点からその人を知るのではなく、関わりのなかで、それぞれのキャラがわかってくるようになっていきます。まるでクラスの一人となり、その場にいるうちにキャラがわかり、友達が増え、人間関係が広がるような実体験のような感覚が味わえます。さらに、会話がとても面白く、センスよく、テンポもよいので、一気に読めてしまいます。人とかかわることの大切さを思い出させてくれるマンガです。

システムエンジニア / 廣瀬公将

「塩田先生と雨井ちゃん」なかとかくみこ

- レトロな絵柄でときめきてんこ盛り。雨井ちゃんが可愛い。ギャグ部分が突拍子もなくめっちゃ笑います。塩田先生は、雨井ちゃんも含め生徒のことをよく見て考えてくれていて素敵です。脇を固めるキャラクター達もすごく魅力的。秘密だから切ないことも多いけど、二人だから積み重ねていけるたくさんの思い出がキラキラに輝いています。

金海堂イオン準人国分店コミック担当 / 園田美智子

「地獄楽」賀来ゆうじ

- 「鬼滅」の次はこれ！と勝手に思っている作品。キャラも立ってると思うんだけど

LIBRO PLUS / 土屋修一

「シジュウカラ」坂井恵理

- 一筋縄ではいかない人間関係の中にほんのちょっとした恋情が絡んでより複雑かつ不穏に…いま一番心を持っていかれているマンガです。

ライター / 早稲田大学文化構想学部助教 / トミヤマユキコ

「四十七大戦」一二三

- まさかの都道府県を擬人化するという作品…コメディノリかと思えばシリアスな展開になったりと意外な展開の連続でした。ゲームにも出来そうな作品だと思いました。地方出身だとより感情移入できたのかもしれませんが、読む人によって作品に持つ印象は違うと思います。

株式会社スマイルアクス・営業大臣 / 岡村光徳

「事情を知らない転校生がグイグイくる。」川村拓

- テンポよいセリフのやり取りで作品の世界に引き込まれたところで、登場人物の救いが描かれて泣ける…。読んでいるこちらにも本当に救われます。救済の物語。

医師 / 岸本倫太郎

「自転車屋さんの高橋くん」松虫あられ

- 平和でかわいくて、ほんと癒ししかない作品です。ずっと見守っていたい…親戚のおばちゃんのポジションで…。

ライター / 早稲田大学文化構想学部助教 / トミヤマユキコ

「シャドーハウス」ソウマトウ

- 「シャドー一族」を名乗る、顔のないな貴族たちと、世話係である「生き人形」たちの不思議な関係。そして、彼らをめぐる秘密を描いた、ミステリアスな物語です。お話の序盤は、主人公である生き人形の少女「エミリコ」と、主であるシャドー一族の少女「ケイト」の謎めいていながらどこか微笑ましい日常をゆっくり描いていきますが、そのそこかしこに、何か大きな謎の断片が顔を見せます。その断片が少しずつ集まって、恐ろしく悍ましい物語の輪郭を作っていく過程がページをめくる指を休ませてくれません。

アニメイト秋葉原 キャラクターグッズ担当 / 岡部 真矢

- またしても独創的な世界観。斬新な設定と底知れぬ恐怖感のバランスが素晴らしい。一見して「かわいい漫画」なのだけれど、それだけではなく、ファンタジーでありながら「誰かの目」を気にして生きないといけないというリアルさと背中合わせで、背筋に冷たいものが走る。まだ読んでいて謎な部分が多いけれど、つづきが気になる展開になってきた。

イロイロ屋 / 杉本善徳

- あらすじを書くとそれだけでネタバレしそうなので何とも言えませんが、内容を知らない方は知らないまま読むことをおすすめします。私も前知識なく読み始め、お嬢様とメイドのヘンテコ日常系にはそんなに興味がないんだけど…と思いつつ、気が付けば最新話までがっつり読んでいました。序盤と最近の展開のギャップがすごい作品です。

主婦 / 堀江千秋

「銃座のウルナ」伊図透

- 美しいラスト。ハッピーエンドではないと個人的には思いましたが、バッドエンドというわけでもない。決別できなくても続いていく生活、そういう現実くささと世界の描写の美しさが際立っていて、ぜひロシアを舞台に実写映画化してほしい… (もちろん登場人物はロシア人で)

(株)来知・WEB デザイナー / 河本 智芳

- 一人の女兵士の波乱と葛藤を描いた架空戦記で、人間ドラマとしては良作だと思うのです

HAIR MAKE LOUNGE tetote 代表 / tetote 代表 力丸 真

「終末のワルキューレ」アジチカ、梅村真也、フクイタクミ

- 男の子がワクワクする展開が詰まっているマンガで一気に読めてしまいます。早く先が読みたくなる作品でした。神 VS 人間という構図は一見「神圧勝だろ…」と思われるのですが、人間が積み重ねてきた戦いの技術や才能が凝縮されたようなバトルになっていて読み応えもありました。

株式会社スマイルアクス・営業大臣 / 岡村光徳

- バトルバカ漫画ですね！！最高です！！設定×キャラ×セリフのかけ合わせが全力本気の超バトル漫画でありつつも行き過ぎていて笑ってしまいます。神 VS 偉人という、昨今の偉人バトルの上位互換設定から始まり、斜め上行くキャラ設定、あえて近しいジャンルをあげるならバキでしょうか。何にも考えずスカッとしたいぜ！って方にお勧めの漫画です。

会社員 / 佐藤優

「正直不動産」大谷アキラ、夏原武、水野光博

- 家を売買・賃借する際、難解用語や複雑な仕組み、分からないことがとても多いです。大抵は不動産屋の言うとおりに交渉を進めていきます。そこに潜む落とし穴を正直に話して売上成績を上げる主人公。彼のような営業に出会いたいものですし、「将来のために一度は読んでおいたほうが良い」と薦めています。

Books アイ茗荷谷店 / 野口忠義

「新九郎、奔る！」ゆうきまさみ

- 海音寺潮五郎先生の『武将列伝』や『悪人列伝』を読んで中世に興味を持ち始めて、はや四半世紀以上。その頃は手軽に読めるものがなかったが、近年の『応仁の乱』のヒットから、新書だけでも『観応の擾乱』、『承久の乱』など中世を扱う続々と出てきました。嬉しい限りです。『新九郎、奔る』は、北条早雲が伊勢新九郎と名乗っていた若い頃を描いたマンガ。足利將軍家の側近である伊勢家に生まれた新九郎がどうして関東に移り住み、最初の戦国大名といわれる人物となったのか。その流れが面白すぎるので、中世ならではの習俗を深く描いてくれる可能性は低いですが、ゆうきまさみ先生が中世を描いてくれるだけで大満足です。

鳥取県立図書館・司書 / 野間勤

「心臓」奥田亜紀子

- うまくは言えないけどわれわれの中に確実にある心情をマンガという形式で表現してくれるのが奥田先生です。読む度に救われる気持ちになります。

ライター / 早稲田大学文化構想学部助教 / トミヤマユキコ

- 珠玉の短篇集です。「ぶらせぼくらぶ」から6年。高野文子の後継者は奥田さんなのかもしれません。表題作「心臓」は何度も読み返してしまいました。そして中ページの黄色い部分のトーンワークに度肝を抜かれました。特に明確な答えや救いは描かれず、各自が考えて答えを出すタイプの作品で、死や日常生活について深く考えさせられる。

菓子研究家 / 福田里香

「水曜日のトリップランチ」たじまこと

- 登場する料理の美味しそうなこともさることながら、くるくる変わるキャラクターの表情や、ひとつひとつの細やかな日常の描写にほっこりします。

会社員 / 工藤圭

「数字であそぼ。」 絹田村子

- 大学の数学に挫折した秀才を描くキャンパスコメディ。変人たちの交流と適度な専門知識がすこぶる楽しい。理学部版『動物のお医者さん』の趣もある。

ライター / 福井健太

「スケッチー」 マキヒロチ

- 趣味とか人生って気づいたらそうなってるもんなんだと、うまいことなってるなあと改めて思いました。

マネージャー / 樋口健

「昴とスーさん」 高橋那津子

- ドストライクでした。私自身、心底こういう画風に弱い。まだまだ謎が多いので、これからの2人の展開を静かに見守っていきたい。

デザイナー / 金輪英恵

「スペクトラルウィザード 最強の魔法をめぐる冒険」 模造クリスタル

- えー、もう好き。すごい好き。強そうなタイトルに反してすごい繊細。体温低そうなのに、萌えより燃えの熱い展開。そして切なさにキュンとなる・・・これって恋？そうだよ！だから好きって言ってるじゃん！前作「スペクトラルウィザード」からお読みください。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

「スペシャル」 平方イコルスン

- 自分の性癖(?)といいますが言葉遣いがぞんざいな女子高生が好きです。例えると川原泉先生の作品など。「女の子は言葉遣いをよくしなさい!」と親にしつけられた反動でしょうか。憧れでしょうか。そんな私が最近お気に入りなのが平方イコルスン先生の作品です。『スペシャル』は先生の作品の中ではかなり読みやすい方ではないかと思えます。ただこの漫画、変なんです。最新刊の3巻まで読むと、もっと変。常にヘルメットをかぶる怪力の女の子、ガソリンのレギュラーが好きな女の子、豆を食べる男子を常につねる女の子、などなどなど。会話も独特すぎる。個性が強すぎて、日常かこれが非日常(スペシャル)なのか麻痺してきます。麻痺してきたところで3巻、ナチュラルに自然にクラスの子がシェルターに避難訓練とか出てきましたけどえ??なんで??これ、日常漫画じゃなかったけ??と緊張感ありまくりな展開。正直、いろんな人にオススメしたいかと言われると微妙なのですが(おい)どこかにいる平方イコルスン先生ファンといつか語りあいたい。それが最近の私の夢です。

会社員 / 佐々木つむぎ

「すべての人類を破壊する。それらは再生できない。」 伊瀬勝良、横田卓馬

- TCG(トレーディングカードゲーム)の元祖であるマジックザギャザリングを題材にした作品。誰しも子どもの頃に経験したであろうTCGを遊ぶ風景をリアルに描いています。対戦の描写も文句なしで読み応えあります。マジックザギャザリングを知らなくても雰囲気ちゃんと伝わるテンポ、描写は流石です。また、マジックザギャザリングだけでなくその時代に流行っていた物や音楽などもしっかりと出てきているので世界観に厚みが増しているなと思います。

リブロ ecute 大宮店 / 首藤 瑛

「生理ちゃん」小山健

- タイトルだけ見ると、本を手にとるときにそれぞれのセクシャリティに応じた印象があるかと思いますが、生理ちゃんというキャラクターのビジュアルを一目見たとたんに打ち壊されると思います。(笑)女性である私は、読むまでは女性向けあるある話なのかな～なんて軽い気持ちで読み始めたのですが、これがなんと名短編集じゃないですが！一話完結で、お話ごとにシチュエーションも時代も違って、なんならSFまで！そこで共通しているのが生理ちゃんが登場すること。シュールなビジュアルなうえ、暴力的だったり困っちゃうタイミングでやってきたりもしますが、時に励まし、時に自信をつけさせてくれたりもする、あれ？もしかして敵じゃなくてちょっと面倒だけど頼れるパートナーなんじゃ…？何よりも短くてもぎゅぎゅっと中身が詰まっていたり読ませる展開。構成が素晴らしいので。生理ちゃんを女性だけのものにするのはもったいないので、是非男性にも読んでもらいたいです。まずはコムズカシイことなんか考えずに漫画として楽しく読んでいただきたい作品です。

公務員 / 宇田川 結衣子

「センコウガール」永井三郎

- ガールミーツガールの名にふさわしいなんとも不思議な開放感のある作品。いじめ、マウンティング、毒親、いろんなトラウマを持っている人もこの漫画を見ればスッキリすること間違いなし！ラスト民子の秘密が解き明かされたときまさに僕らの心の中もクライマックスを迎える。さあ、みんなで驚こう！

October Beast・代表 / デザイナー / 北山友之

「千年狐 ～千宝「捜神記」より～」張六郎

- 前回絶対にノミネートしてくると思ったのですが…今度こそ！と思って投票します。一巻はそれぞれ独立した話をまとめた短編集の趣でしたが、二巻はしっかり廣天という狐が主役の話になり、予想より壮大になりそうな展開に期待大です。おそらく元のお話はとても真面目なのでしょうが、著者のセンスある脚色によってとても楽しく、面白く読めます。

主婦 / 堀江千秋

「線は、僕を描く」堀内厚徳、砥上裕將

- おそらくは前代未聞の水墨画マンガ。両親を事故で亡くし、抜け殻のようにになっていた大学生が、水墨画を通じて生きる意味を見出していく。対象を見る、描くとはどういうことかという、水墨画の本質を若者の心情と重ねながら展開していく。色調を伴わず、階調や微細な筆の調子で表現する水墨画はデフォルメの方向性がマンガとはまったく異なるだけに、マンガ表現としての難しさが伴うはず。主要キャラクターの心が微細に動く様も心に沁みてくる。

有限会社馬場企画・編集者 / 松浦達也

「先輩がうざい後輩の話」しろまんた

- 男気あふれる朴訥とした先輩会社員と、ツンデレな後輩会社員のラブコメで、二人の結末を見届けたくなるキュンキュンした感じがすてき。最後に二人がどうなるか予想はつくけれど、それでも見たい。親友のキャラも立っていて、どこかに実在してほしい。

サブカル専門ライター / 河村鳴紘

「創世のタイガ」森恒二

- ホモ・サピエンス vs ネアンデルタール人。マンモスも登場！人類の歴史に迫るサバイバルな一作。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

「その着せ替え人形は恋をする」福田晋一

- 雛人形を作る職人を目指している主人公は、人形が好き過ぎて周りとのコミュニケーションを取るのが苦手。絶対関わらないだろうと思っていた美少女（ギャル）とひよんなことから関わることに。それがコスプレ。好きなことを好きと堂々と言えるヒロインに惹かれていく主人公。まっすぐなその正確に振り回されつつも共感していく二人。とても爽やかで、とても微笑ましく、とても可愛いマンガです。キャラも増えてきているので、今後の展開も期待できる作品。

三省堂書店海老名店 コミック担当 / 近西良昌

- 好きなもの（こと）に対しての情熱が描かれていて、「こんな性格の子が友達にいたら毎日楽しいだろうなあ」と感じました。好きなもの（こと）を好きとはっきり言える、そして誇っている、それは簡単にできるように実際は難しかったりします。だけどそんな考えなどを吹き飛ばすくらいの勢いで自分の好きなもの（こと）を目を輝かせて話し出すヒロイン喜多川海夢に主人公の五条新菜同様、夢中になります。卑屈な自分自身に会心の一撃で入ってくる作品です。

販売員 / 八重田幸子

「空飛ぶくじら スズキズヒロ作品集」スズキズヒロ

- 絵だけ見るとずっと昔に読んだことがあるような気がするのに、内容はとても現代的で、読むと不思議な感覚になります。絵柄も相まって全体的にほのぼのした雰囲気かと思いきや、所々ほろ苦い。甘いカフェオレだと思って飲んだら砂糖が入ってなかったという感じです。それぞれ題名も格好よく、とくに「銃声を削り出す」というタイトルには唸りました。

主婦 / 堀江千秋

「大安仏滅」石川チカ

- 葬儀屋さんのお仕事を描いたマンガキャラクターの個性づけは面白いし、話もサクサク進むので飽きずに読める

HAIR MAKE LOUNGE tetote 代表 / tetote 代表 力丸 真

「大丈夫。世界は、まだ美しい。」荒井瑞貴

- つき合い始めて4年になる彼女がある日突然、二度と会うことのできない世界に旅立った。その悲しみ、絶望、孤独はこれほどまでに苦しいのか。体験したものにしかわからない、心にぽっかりと空いた穴はとても大きくて、簡単には埋まらない。作品から伝わる悲しみと空虚感。題名にもなっているこの言葉が読み手にとっても少し救われた気がします。

Books アイ茗荷谷店 / 野口忠義

「隊長と私」クリハラタカシ

- とにかく何もかもがかわいい。久しぶりに塊魂したくなる。

株式会社ヴィレッジヴァンガードコーポレーション 店舗開発課 / 大山 敏樹

「正しい妖怪の食べ方」むこうやまあつし

- 妖怪をたべるなんて〜〜！と最初はびっくりしたけれど、これおいしそうかもか思ってくるので不思議。ほっこり夫婦さんにも癒されます。

ブックエース上荒川店・コミック担当 / 倉本かおり

「墮天作戦」山本章一

- 序盤からよく練られた設定に関心はしていたのだけれど、4巻あたりから怒涛の展開を見せはじめた印象。そして最新5巻は、ここまでのわかりづらかった部分の回収など含めて、とても深みがあっておもしろい。散りばめられた名台詞も良いし、海外ドラマのカメラワークのような構図など、流し読みできない重厚さが気持ち良い。

イロイロ屋 / 杉本善徳

- 作り込まれた世界設定、架空戦記としてのディティール、群像劇としての面白さなど、様々な要素が作者のセンスによって渾然となっており、カルト的な評価を超える可能性を感じる。

漫画読み / yama-gat

「ダンジョン飯」九井諒子

- 気が付けばマンガ大賞の対象リミットである8巻まできた本作。毎年ノミネートに名を連ねているので安心していましたが、ここは自分も一票を入れねば、と思いました。マンガ界では異世界ファンタジー作品が隆盛を極めていますが、この作品のSF並みの緻密な設定と、そこからくる説得力は本当に群を抜いていると思います。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- なんとしてでもマンガ大賞のトップを取ってもらいたい作品と信じ、周りの人にもしつこく勧めてきましたが、いよいよ8巻となり、こちらに推薦できる機会も最後！ストーリーもクライマックスになってきており（私見）、シリアスな展開の一方、チェンジリングによる種族変更とか、新しい内容（笑い）も楽しめました。一風変わったファンタジー世界の物語、是非堪能してください！

衆議院議員山尾志桜里事務所政策担当秘書 / 三葛敦志

- 最初にこの漫画がマンガ大賞にノミネートされてから何年たったのでしょうか。読み始めた時からずっと面白い！ダンジョンのモンスターを喰う！というインパクトだけではこんなに長く連載が続かない。最初こそインパクトすごかったけども、この漫画の本当の面白さはそこではない。世界観や設定の作りこみが細かいし、伏線もどんどん回収していった。かといって、新しい魅力もバンバン入っている。名前は知っていると、最初は読んでたという人、今こそまた読むときですよ！

鳥取県 高等学校 教諭 / 佐川 由加理

「チェイサー」コージイ城倉

- 今までまったくなかったアプローチの漫画家漫画。手塚治虫の対極の主人公の心理を克明に描くことで、手塚治虫を中心にした漫画史はもちろん、それ以外の少年漫画史も浮き彫りになる。

医師 / 岸本倫太郎

「血の轍」押見修造

- 精神的に不安定な母とその息子の関係を中心に展開していくマンガ。母親の歪んだ愛情といえいいのか。息子が自分に依存するようあらゆる手をつくしてきます。息子がラブレターをもらえば一緒に破るように強要するし、河原で彼女と会っていると探して追いかけてくるし、とにかく不気味。子離れできてないとか、毒親ですませるのがもったいない後味の悪さがここにはあります。

鳥取県立図書館・司書 / 野間勤

- 何度か書かせていただいていたが、7巻を迎え、いよいよ狂気っぷりがすごいので再度推し。美しい絵で描かれているのが「毒親（毒母）と息子」のある意味で世界の崩壊と、新たなる世界の構築……。1巻ではまだまだ主人公である静一を応援しながら読んでいたものの、徐々に静一も読者である私の手には負えない（理解できない）存在に変化してきている。こんなに美しいイラストで、こんなにも陰鬱で不気味。秘密の共有をした母と息子がこの先どうなるのか、気になってしょうがない。

会社員 / 西尾 美里

- 登場人物の表情や心の動きがリアルな人間よりも、更にリアルに痛々しく表現されていて、読んでてずっと胸が苦しい作品。人間は恐ろしい。

PENICILLIN / HAKUEI

「つくも神ポンポン」中田いくみ

- 発売前に出版社さんから送られてきた発注用の FAX を見て、感熱紙に印刷されたザラザラのイラストを見ただけでも「あ！これは、好きな絵だ！」と直感した作品でした。そのままネットで検索して試し読み。これはこれは、わたしの好きなものしか詰まっていない漫画ではないですか。素朴で、愛らしくて、描き文字までかわいい。隅々まで眺めたくなる味わいのある絵。すべてが優しさで出来ている世界。ところで、大人の女性が不器用な男子に言う「バカね」ってセリフはとても良いですね。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

「てだれもんら」中野シズカ

- 中野シズカさんがお得意の、というか、デビュー作からこだわり続けた「スクリーンワーク」から、ちょっと距離を取ってからの作品群から目が離せない。BL 作品と一般作品のあわいに漂う作品で、その判然としないストーリーに強く惹き込まれる。小料理割烹「薫風」で働く元ヤンの板前・星野トオルと“厄介”な庭の手入れを専門とする寡黙な庭師・鷹木明の関係は、どのように読んでも友情以上、BL 未満。週末には明の家で、ささやかな肴を作って晩酌を楽しむふたりだが、明の本当の仕事には気づいていないトオルだが、トオルの気持ちにも気がつかない明。気になりすぎる！

菓子研究家 / 福田里香

「てっぺんぐらりん〜日本昔ばなし犯罪捜査〜」キリエ

- 日本昔ばなしを新しい視点から着目し、物語の根底にもってきている珍しい作品、内容も面白いのだが、キャラの何気ないやりとりが楽しめる

HAIR MAKE LOUNGE tetote 代表 / tetote 代表 力丸 真

「天国大魔境」石黒正数

- 軽快さと不穏さが交互にやってきて、笑ってていいのか緊張していいのかわからなくなり、フラフラしてるところを、ズバーとアッパーをきめてくる攻撃力の高いマンガ。「この先どうなるの？」って感覚はたいいのマンガに言えると思うのですが、本当にこの先どうなるかわからんです！

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- 乾いた絵柄、かわいいキャラ。緻密すぎる設定。現代文明が崩壊した後の世界（日本）を舞台に展開する SF ながら、時にのんきとも言いたくなる会話や日常ギャグが唐突に挟み込まれる独特なタイム感に、読んでいてとても引き込まれる。既刊 3 巻。一人称が「僕」の女子キルコ（おねえちゃん）の描写がたいへんに魅力を増してきていて（彼女に惚れる男性読者は多いだろう）、その点でもヒトこまヒトこまを追うのが楽しい。当初からまったく異なるように思えるふたつのストーリーが交互に語られ、連載が進んで次第にその関連が匂わされるにつれ、広げられた風呂敷がさらに広がる感じ。石黒正数先生らしく伏線はきっちり回収するはずで、すごいなー、と感嘆しながら何度でも読み返せる。

日本経済新聞社 企画開発室 / 天野賢一

- なんでしょう、このそこはかとない大友克洋感。この作者さんってこんな絵だったっけ？と思わず前の作品も読み直してしまいました。（結果、違った）絵柄もそうですが、漫画オタクのツボをことごとく突いてくる設定やキャラクターや台詞回し。漫画大賞として薦めるといよりは、漫画大賞の選考員をやっている人たちの中で知らない人がいたら言いたい…っていうほうが強いかもしれません。

バーテンダー / 村井真也

- 世界観すら謎で始まったこの漫画、だんだん外がわかってきて物語の骨格が伝わってきた感じ。石黒ワールドの楽しみは知った後最初を見るとまた新たな発見があるというところ。巻数を重ねるごとにくるこのインパクト、ヤバイぜ！

October Beast・代表 / デザイナー / 北山友之

「となりに」basso

- なんやかんや四半世紀腐女子をしています、今年はボジョレーヌーボーでいったら「近年まれにみる奇跡的な女神の味」的などとして。だってbassoさんの新刊が七年ぶりに出たから！別名義はいわずもがな！なお方だけど、もう新刊に出会えることなんてないんじゃないかと思ってた。男性同士の絡みはないのですが、なんとというかエロい。そして切なさや、戸惑いとか何ともいえない間の描き方がさすがとしか言いようがない。シンプルな線の中に計り知れないくらいいろいろな感情が詰まっている。老若男女問わず読んでほしい。

鳥取県 高等学校 教諭 / 佐川 由加理

「東京入星管理局」窓口基

- 『メン・イン・ブラック』×美少女バディの超密度SFアクションです。とにかくにも奥の奥まで細かく且つ遊び心たっぷりに作りこまれた世界観と、それを細緻に表す超絶画力が目を引きませんが、真骨頂はその世界を縦横無尽に駆け回る主人公・ラインと相棒のアンちゃんをはじめとしたキレッキレのキャラクターたちです。主役を張るのは口は悪いがクールで頭も切れるJK・ラインと、スタイル抜群の長身褐色美女ながら、野生児じみた幼い言動と謎の超パワーをもっているというギャップが素晴らしい正体不明生物・アンちゃんのコンビ。アンちゃんがラインに寄せる無邪気な信頼が垣間見えるシーンがたまらんです。(敵に捕らわれたラインをアンちゃんがお姫様抱っこするとことかあるんですよ…美少女バディ界の至宝！) そのほかにも、ラインが背中から腕だけ召喚する、彼女の師匠であるイケてる超悪オヤジ・ハインをはじめ全員主役を張れるくらいの特濃キャラクターが満載です。彼らがどんな冒険をしていくのか、どんな掘り下げられ方をされるのか、めちゃくちゃ楽しみです。この世界観の書き込みとキャラの立ち方、個人的には『トライガン』『ヘルシング』に並ぶ、ある種の「必修科目」の雰囲気を感じています。これは後世まで読み継がれるべき傑作です！

アニメイト秋葉原 キャラクターグッズ担当 / 岡部 真矢

「峠鬼」鶴淵けんじ

- そこで生活している人が確かにいる、ちょっと不思議な出来事が起こる、それを物語で解決する。これらがきちんと地続きに調和していることで世界にのめり込める。グッドファンタジーだと思います。

往来堂書店 / 往来堂書店・三木雄太

「東島丹三郎は仮面ライダーになりたい」柴田ヨクサル

- 作者の他の作品でも、仮面ライダーが好きなのかな？と思わせる描写が散見していたのですが、今作品ではその愛を柴田ヨクサル節でぶつけてきます。愛ゆえにライダー関連のグッズを売るのかという事や、ショッカー戦闘員の実力の強さについての描写は目からウロコでした。最近仮面ライダー関連の漫画が増えてきて嬉しい限りですが、その中でも大分別ベクトルからの作品の為推させて頂きました。好きすぎて好きすぎて泣いてしまう感情を全肯定してくれる作品です。唯々「愛!!」な漫画なんです。

バンドマン / ターシー

「東独にいた」宮下暁

- 何よりかにより演出の妙に惚れます。マンガがマンガとして表現できることの1つを手探りで追求しようとする凄み。作者本人のTwitterも非常に読み応えあり。副読にぜひ。

往来堂書店 / 往来堂書店・三木雄太

「道産子ギャルはなまらめんこい」伊科田海

- 北海道が舞台のラブコメ。凄くキュンキュンします。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

「図書館の大魔術師」泉光

- 圧倒的な画力はもちろん、それに負けない世界観。本と人を紡ぐ王道ファンタジー！！巻を増しても面白さはかわらず一番おすすめしたいと思いました。

ブックエース上荒川店・コミック担当 / 倉本かおり

- いま巷で蔓延る異世界、転生系のような有象無象とは一線を画す(異世界、転生系は好きですが)、ハイファンタジー。「図書館」をテーマに話が紡がれて行くのですが、作画が緻密で高水準であることに加え、現実感と非現実感のバランスが絶妙な素晴らしさ描かれています。読めば読むほど、ワクワクします。

広告会社 プランナー / 平沼 良章

- 2019 年末時点での既刊 3 巻で第 1 章が終わったのですが、これでまだ 3 巻だったのかと驚くくらい、濃厚なストーリー。キャラクターも描かれている世界も生き生きと感情豊かで、読み手の気持ちを揺さぶってきます。軽い気持ちでページをめくり始めたのに、読み終えたときにはその世界にハマっている、そんなステキな作品です。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

「ドラフトキング」クロマツテツロウ

- 即戦力より数年後チームの主力を担う素材を確保する難しさ。他球団を出し抜く駆け引きも面白い。才能を見出す才能とはどういうものか。

マンガ研究 / フリーライター / 会田洋

- スカウトマンが主人公という異色野球マンガ。人を見抜き、キャリアに付き添い、責任を取るという姿は人間関係に含まれるドラマチックの凝縮なのかもしれない。

往来堂書店 / 往来堂書店・三木雄太

- 「スカウトマン」は、ただ将来有望な選手を見つけてくるだけじゃない。同業者との駆け引き、アマ球界への人脈作り、引退選手へのサポートなど、多岐にわたる仕事。球団を裏で支えるプロたちのドラマを描いたこの作品は、いま一番面白い野球マンガです！

Books アイ茗荷谷店 / 野口忠義

- 野球ビジネスの根幹は素材選別にあり！思わず納得。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

「とんがり帽子のアトリエ」白浜 鷗

- 常にドキドキワクワクと心躍り、先の展開が気になるストーリー。本当に実在してほしいと願ってしまうくらいに魅力的な世界観。それらを構築する作者の作りこみ、書き込みには感服。個人的には、記憶を消されてもいいから彼らのアトリエや大講堂に足を踏み入れてみたいものだ。登場人物たちも生き活きとしており、ページをめくるとが純粋に楽しくなる、素晴らしい作品。

元書店員 / 杉 佳尚

- 魔法の世界の成長物語。伏線がどうなっていくのか楽しみな作品。

自営業 / 小野裕子

- 魔法の世界と絵柄が絶妙で凄く贅沢な気分。魔法陣に込められた魔法の理論や魔法使いの知恵が素敵で、じわじわきます。

教師 / 持丸宏司

- 読み始めた当初は、“かわいいファンタジーもの”という印象が強かったけれど、回を重ねるごとに各キャラクターが抱える闇のようなものの輪郭がはっきりしてきて、陰影が濃くなっていく。物語がどんどん深まっていくのがたまらなく面白い一冊。主人公の女の子や彼女をとりまく周囲の人々の成長の物語でもあって、ハラハラしながら励ましながら読んでます。

ライター / 老年学研究者 / 島影真奈美

「風のお暇」コナリミサト

- 続きが気になって今年も追いかけてました。ドラマにもなったけど、漫画はまだ続いてますよ。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

「夏目アラタの結婚」乃木坂太郎

- ネットで見かけた煽り文を読んで「絶対面白い」と確信し、即購入を決意しました。散りばめられたキーワードが強くて狡い。まだ1巻しか刊行されてませんが、期待値が高まりすぎた為選びました。

デザイナー / 金輪英恵

- 品川真珠の笑った時の歯並びがガタガタなのが非常にインパクトある上に、夏目アラタの結婚しようには驚かされた。先が読めず、ぞくぞくする。

SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

「ならしかたなし」雪野下ろせ

- 見た目の強さで引かれる方もいると思いますが、しゃな子と鹿男の噛み合わない深い会話をお楽しみください。

ロングランプランニング株式会社 / 小森和博

「二月の勝者 - 絶対合格の教室 -」高瀬志帆

- 中学校受験は誰のものか。子ども自身か、それとも親か。イマドキの受験事情を塾、家庭、子供、学校などさまざまな角度から描き出し、子供を取り巻く家庭の問題点などさまざまな示唆に富む。教える側の葛藤、子供たちの苦悩、進学塾の実情など、おそらくは作家ご本人の体験も含んだ綿密な取材の痕跡が伺える。

有限会社馬場企画・編集者 / 松浦達也

「鈍色のカメレオン」春日井明

- 時代設定とキャラデザが絶妙。キャラクターの関係性等について、最初の段階では不親切な程に多く語らず、話が進むに連れて少しずつ見えてくる状況が、分かり易さ優先のTwitter漫画等では得られない没入感を与えてくれます。じっくり読んで、色々考えながら、この先どうなるのかわくわくする余裕も生まれる、久々に繰り返し読み応えのある作品でした。

首都圏 TSUTAYA / 井出 麻悠美

「ニュクス の 角灯」高浜寛

- 〈大丈夫／悪い時代の後には／きっといい時代が来るから——……〉 本作のテーマを表すフレーズとして、上記のセリフがよく出てきますが、完結第6巻の、あのラストシーンにこの言葉がかぶさるのは衝撃的でした。改めて第1巻から読み返すと、作者が最初からこれをやるつもりだったとわかる。もともとかなり好きな作品でしたが、これで評価がさらに一段上がりました。 明治初期の長崎を舞台に、モノの持ち主を透視する能力を持つという少女が、謎の青年が経営する西洋道具屋に雇われるところから物語が始まります。軽めの「アンティーク趣味+事件解決もの」かと思いきや、舞台はたちまちパリにまで広がって、ジャポニズムと浮世絵ブームの黎明期を目撃するという、文化的にも壮大な物語になっていきます。 これを、高浜寛という、デビュー時から日本とフランスを自在に往還してきた異能の作家が描くのと、なおさら意味がある。現代のマンガ文化が、いにしへの浮世絵とダブって見えてくるわけです。どっちかという「バンド・デシネ」寄りだった高浜さんが、ど真ん中の「マンガ」を描ききったという意味でも画期的な作品だと思います。

読売新聞文化部編集委員 / 石田 汗太

- 時代の進歩とともに主人公の成長を見守るカタルシス。わくわくする気持ちや、それとは対比的に陰のあるキャラクター達、でもみんないい人でちょうどいい塩梅です。ゆっくり見守ってきましたが2019年完結。ラストは以外な展開でしたが、あとがきを読んで納得しました。装丁も含めて、本として手にとって読んでほしい作品です。

(株)来知・WEBデザイナー / 河本 智芳

- 去年に引き続きの投票です。今回が最終巻。最後のコマ衝撃的でした。と、思ったら後書きを読んで納得。思えば高浜寛先生は一貫してリアルを追及していたな、と。。アンティークをはじめ出てくる全てのものが刺激的で膨大、且つ豊かな知識を垣間見れたのもこの漫画の醍醐味でした。物語二人のヒロインの邂逅が「ニクスの角灯」の意味だったとは思いませんでした。美世の渡した言葉が、幸の希望となったことを祈ります。最後まで余韻の残る作品でした。高浜寛先生、長きに渡る連載、本当にお疲れ様でした。

会社員 / 佐々木つむぎ

「人形の国」 式瓶勉

- 式瓶勉サーガにつらなる作品であることは見て取れる。この世界にはこの世界の中でのさまざまな「能力」があるのだけど、そのありかたをビジュアル的に表現されてそれを読むのは強い快樂がある。

本読み / マサトク

「鵺の絵師」 猪川朱美

- 刊行ペース、巻数的に今年が最後の投票。2015年に1巻が出た時から繰り返し読み直している大事な作品です。アニメ化、実写化しても魅力的だと思う。男女問わず広く読まれて欲しい。

三省堂書店 / 内野智未

「信長を殺した男～本能寺の変 431年目の真実～」 藤堂裕、明智憲三郎

- 日本史の謎の中でも最も興味深い本能寺の変が何故に行われたのか、明智側の視点で描かれているのがとても新鮮で、戦国の乱世に織田信長に仕えた明智の宿命がせつない。

ロングランプランニング株式会社 / 小森和博

「儂いくん SUBARASHIKI KANA JINSEI」 柳内大樹

- 人生は儂い。人生は素晴らしい。その時々を大切にしていけないといけないのに、私はずいぶん無駄に過ごしてしまっただのではないだろうか。この作品は主人公の小日向希儂の人生を淡々と振り返りながら、読者に「生きていくこと」をストレートに問いかけてきます。普段はマンガを読んでも泣かない私が泣きました。

Books アイ茗荷谷店 / 野口忠義

「ハクメイとミコチ」 樫木祐人

- 背伸びしない身の丈にあった生活の中で無理することなく生きることの大切さ、素晴らしさを教えてくれる名作。

医師 / 岸本倫太郎

- 身長9センチメートルのこびと女の子であるハクメイとミコチの日常を綴った作品。作りこまれた世界観と圧倒的な作画力、魅力的な登場人物達に心を奪われます。

システムエンジニア / 三浦佑樹

「バジーノイズ」むつき潤

- 作品から漂う空気、奏でられる音の描写が非常に心地よい。今の時代らしさ溢れる、しかし今も昔も変わらず在り続ける音楽の魅力を味わえる作品だと感じています。Sportifyで著者さんがセレクトしたBGMリストが公開されているのも「ならでは」という感じで、作品を別角度からも楽しませてくれます。

会社員 / 伊東敬祐

「はしっこアンサンブル」木尾士目

- 合唱というジャンルを選択した故、マニア色が薄く感じられる。が、それだけに木尾士目先生の「巧さ」が光っている。もっと注目されてよい作品。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

「裸一貫！つづ井さん」つづ井

- 今年の私のマンガ爆笑レース圧倒的1位！他の作品、出走してない感じすごいあるけど！！「推し」をめぐるリアルなヲタク、つづ井さんとその周辺の奇行録。その行動の一つ一つのリアリティとバカのスケール感と語り口の鮮やかさで、あるあるとワンダーのギリギリのところを毎回攻めてくる。まあ、まとめてリアクションすると、マジで笑っちゃう瞬間しか、来ないんですけどね！！このへんなオタクは、まだ日本にいます。たぶん。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

- つづ井さんの日常を描いたコミックエッセイ。こんな世界があるのかーと思えるか共感出来るかで読み方が変わります。

ブックファースト新宿店 / 渋谷孝

「はたらくすすむ」安堂ミキオ

- 誠実であるという事がどれほどカッコいいかという事を思い出させてくれた作品。じんわりと胸が暖くなる。

元書店員 / 金田健太郎

「はっぴーえんど」魚戸おさむ、大津秀一

- 自宅で終末期を迎えようとしている患者を支える“看取りの医師”が主人公の作品。人がひとり、亡くなるのはそうたやすいことではなくて、本人が何か希望しても、家族の理解が得られなかったり、そもそも家族同士の意見が真っ向からぶつかりあったりもする。そんな中でどうすれば、満足のいく死を迎えられるのか。自分だったらどうしたいだろうか、考えるきっかけを与えてくれる一冊でもあります。

ライター / 老年学研究者 / 島影真奈美

「果ての星通信」メノタ

- 懐かしい70年代少女マンガの優れたSF作品を読むようだ。主要キャラの「局長」のまん丸頭に目がぎょろりとした造形は、花郁悠紀子の名作「アナスタシアとおとなり」に登場するオルバー・ケロムを思い出させる。懐かしい、けれど新しい。そんな普遍性こそSFの神髄だと思う。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

「バトウーキ」 迫稔雄

- カポエイラは大体が格闘漫画では敵役として出てくる事が多く、やられ役ばかりで強さが分かりにくい格闘技という印象でしたが、先生の描写によって最も美しい格闘技なのでは？と思わせる内容となっています。音楽と情景を交えながらの戦闘シーンが新鮮でした。格闘技とは思えない不気味とも思える動きからの鋭い一撃必殺の技が美しく、現実初めて目の当たりにした格闘家達の気持ちはどうだったんだろうかと思いを馳せます。また、あまりシリアスになり過ぎず適度にギャグが入っているのも好みます。最後に、女性キャラクター達の腹筋が「美!!」です。

バンドマン / ターシー

「バトルグラウンドワーカーズ」 竹良実

- 主人公は、人知れず世界を救うパイロット（もと失業者）の30代男性。めちゃくちゃ人が良くてまじめ。その地味さ加減が全然ヒーロー感がなくて好き。お人よしにもほどがあるわ！って呆れ気味だった周囲が結局、その人の好さに巻き込まれていく感じもいい。でも、戦況はシビア。しかも、上層部は戦う彼らを「駒」としか見てない。その世知辛さと理想論がないまぜになっている感じがむしろリアルで目が離せない。いろいろ理不尽なことも乗り越えて働いてるひとみんなに読んでほしい一冊。

ライター / 老年学研究者 / 島影真奈美

「花園君と数さんの不可解な放課後」 胡原おみ

- 家がアダルトショップを営んでいて性知識は豊富だけどしごくまっとうに育った花園君と、家が厳格なために性知識が乏しいけどなにごとも好奇心旺盛な数さん。そんな立場の違うけれど、どことなく似たもの同士な二人が織りなすドタバタ劇。

鳥取県立図書館・司書 / 野間勤

「花と頬」 イトイ圭

- 大きな事件が起こるわけでもないが、高校生男女の出会いと、距離が縮まる過程と葛藤が、とても丁寧に描かれている作品。愛してるってなに？繰り返し出てくるその言葉の答えが出たところで、主人公と一緒に泣いてしまった。図書館で筆談したり、甘酸っぱいなー！うらやましいなー！と、青春コンプレックスが刺激されました。読後感は、静かな邦画を一本見終えたときのそれと似ている。

主婦 / 赤坂真実

- 豊田徹也先生の作品「アンダーカレント」の様に、まるで映画を見ているような気持ちにさせる作品でした。一話一話の終わり毎に作中に出てくるミュージシャンの音楽が流れてエンドロールが流れる、というイメージを毎話していました。図書館の二人のコミュニケーションは本当に「良いよねえ」の一言ですし、作中の何気ない仕草の描写や「間」が魅力に感じました。色んなの設定で作者の作品読んで見たいと強く思います。この先も描き続けて欲しい、この作品が世に出てくれて本当に嬉しいです。

バンドマン / ターシー

「花野井くんと恋の病」 森野萌

- 可愛い高校生カップルの花野井くんとほたるちゃん。ゆっくり気持ちが通じていくのを見ていると優しい気持ちになります。行く末を見守っていきたいふたりです。

主婦 / 紺野 泉

「春とみどり」 深海紺

- 上手く言語化できないふわふわもやもやした感じが好き。喜怒哀楽のどれも混じりあったような…ああ、これが「エモい」という事なのかな。

元書店員 / 金田健太郎

「ピーチボーイリバーサイド」クール教信者、ヨハネ

- グロイシーンが多数出てきてちょっと読みづらい方もいるかと思いますが、読み進めていくとファンタジーものとしてハマっていきます。絵はまだまだ向上の余地がありそうな気もしますが、段々読みやすくなってきていると感じました。

株式会社スマイルアクス・営業大臣 / 岡村光徳

「微熱空間」蒼樹うめ

- 親の再婚によって急にほぼ同い年の異性と姉弟になったら……。 家族、異性という関係に揺れ動いて、迷って考えて。とても心温まる作品です。

リプロ ecute 大宮店 / 首藤 瑛

「卑弥呼 - 真説・邪馬台国伝 -」中村真理子、リチャード・ウー

- 3世紀に倭国に君臨したとされる女王、卑弥呼。その主人公を生まれついでのカリスマとして描くのではなく、どんな思考と論理と行動でカリスマ性を獲得することができたのか、大胆なフィクションで描き下ろされている。当初、我欲のために動いていたダークヒロイン（女性なのでヒーローではない）が、戦いの中で協調性や人間性を高めていく。込められたエッセンスはある種の成長譚。細密で力強い画風、物語のスケール感など惹きつけられる要素がてんこ盛り。名作になる予感ひしひし。

有限会社馬場企画・編集者 / 松浦達也

- エンタメ目線で卑弥呼の謎に挑む意欲作。権謀術数に読み応えを感じる。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

「ひやくえむ。」魚豊

- 走っている時間自体は10秒程度。しかし、明暗が分けられるのは僅か100分の1秒の差。その一瞬に込められた年月が、激アツです。

教師 / 持丸宏司

「百姓貴族」荒川弘

- 農業を題材にしたエッセーマンガだが、それでいてクスクス笑えるギャグマンガとして成立していること。大賞を受賞した「銀の匙」と同じテーマで、同じ作者が書いているのに、よくここまで違う内容にして、さらに「こちらが上かも」と思われることに驚く。

サブカル専門ライター / 河村鳴紘

「ふしぎの国のバード」佐々大河

- 以前も一度推薦した作品ですが、巻を重ねるごとに、さらに注目すべき良作になっているので再度押します。イザベラ・バードの『日本奥地紀行』を原作にするというだけでもすごいですが、博物館の取材や文献資料を駆使して「それ以上」のものに仕上げていることに感嘆します。舞台は明治日本の東北ですが、私たち読者の視線は当時の日本人ではなく、英国人のバードの方に近い。つまり、「未開の国・日本」を、金髪で青い目の冒険家の目を通じて「探検」する。この逆転というか、倒錯した感覚が本作の独創性で、最大の魅力と言えます。バードが旅した日本は、今はもう地上にない国、とうに滅亡した「文明」であることに気づかされます。 通訳として同行する若者・伊藤鶴吉がまたクールで魅力的に描かれており、バードとの「主従関係」は“萌え”要素満載。バードはこれから蝦夷地にも渡り、アイヌの人々とも交流する。いわば「異国の中のさらに異国」という未知の世界に入っていく。この作者ならやってくれる。ますます期待が高まります。

読売新聞文化部編集委員 / 石田 汗太

- 前回は推させて頂きましたがしつこく推させていただきます。実在した海外の冒険家が、実際に日本を冒険したときの手記を基にしたお話です。(主人公は実際よりも若く設定されていますが)江戸から明治に移る時代の中で日本政府によって消された歴史って結構あるらしいです。それが最近、海外の手記から明らかになっているという事実。これが本当に日本にあったことだと見せられると考えさせられることが沢山あります。今の自分が開発途上国に持っているイメージが、まんま過去の日本に置き換えて見られるもの面白いです。知識系としても楽しめますし、ストーリーもキャラクターがコミカルに動くので読みやすく良いです。

バーテンダー / 村井真也

「ふたりソロキャンプ」出端祐大

- とにかくキャンプに行きたくなる！焚き火をしたくなる！ハウツー漫画としてもグルメ漫画としても楽しめる内容だし、今のトレンドにもがつつりハマりそうなので、これからキャンプを始めたい人にはうってつけだと思います。

会社員 / 小野塚博之

- 読めばキャンプをしたくなる！アウトドアファンならずともおススメの作品。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

- ひとりキャンプもいいけどふたりも面白い。ずっと一緒じゃなくてちょっと離れた一緒。ひとりもいいけどちょっと誰かときょうゆうもいいですね。キャンプに限らず。わたしキャンプはしたことありません。読んでいるとキャンプに行きたくなくなってきます。

ブックエース上荒川店・コミック担当 / 倉本かおり

- タイトルだけみると「出落ち」かな？ってなるものの、読んでみると全くそんなことはなく、世代も性別も違うふたりが「ふたり」で「ソロキャンプ」を楽しんでいる様子にほっこりさせられる良作です。生まれてこのかた、アウトドアライフを嗜んだことがありませんので、読むことで疑似体験させていただいております。おそらくリアルキャンプにも役立つ情報満載（実践したことないからわからない）なので、キャンプ好きにもそうでない人にも喜んでいただける作品だと確信しております！

オリオン書房 ノルテ店 / 池本美和

「ふたりが家族になるまでに」黒麦はぢめ

- わたしの持っていた「ストーリー4コマ」への印象を大きく変えてくれた作品です。この本を何冊仕入れようかなと考えている時にネットで試し読み、「あ！これはすごい！」と心臓が高鳴った漫画です。絵柄を見てなんとなく「雰囲気のふわふわを楽しむ系の4コマかと思ったら全然違った！」という衝撃に包まれました。キーワードは「変わった」。作中で周りのいろんなひとたちから主人公のあさひが言われる言葉。あさひの意識の変化の過程を追うことでこちらも身が引き締まる思いになります。ジローさんと二人暮らしで、人のために動けるように心が成長していくあさひ。そんなあさひに大人であるジローも何かを気づかされ、「家族」としての二人の形が徐々に出来上がっていく過程がとても好ましいです。絵柄も可愛らしくて、心が洗われるようでした。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

「ブラックナイトパレード」中村光

- 初め中村先生と知らずに読み始め途中、只者ではないな？！と気づきました。はたして、ヘタレコンビニ店員はサントさん（黒 or 赤）になれるのか？！ブラックコメディが炸裂する展開に心酔しました。

漫画家専門鍼灸師 / 碓氷麻里子

「プリンセスメゾン」池辺葵

- とうとう最終巻になってしまいました。『プリンセスメゾン』の新刊を読むときはいつもはじめに深呼吸をして、コンディションを整えて、臨んでいました。染み込むように心に入ってくる作品。家を買う。家売る。人生の覚悟。生きること。自分が大切にしたいこと。言葉にすると、短いけれど、世界には様々な生き方の選択をしている女性達がいる。みんな幸せでありますように。いつも自分自身と向き合い考えさせられていました。沼ちゃんや伊達さんに会えなくなるのが寂しいなあ。

会社員 / 佐々木つむぎ

- 2015年に第1巻が発売されて、実写ドラマ化もされ、知っている人も多いと思いますますが、2019年に最終巻が発売されて今、プリンセスメゾンが好きだと言いたい！読んでほしいと言いたい！孤独も、寂しさも、暖かさも、優しさも全部全部染み込んで柔らかく心に残っている。ずっと大好きで大切な作品です。

声優 / 富岡美沙子

- ドラマ化されましたが実際漫画を手にした人はどのくらいなんだろう？この方の作品はぜひ漫画で、できれば紙で読んでほしい。あの雰囲気、優しさに毎回魂の癒やしを感じてきました。たくさんの作品に感銘されましたが感謝を込めての1票。

(株)来知・WEBデザイナー / 河本 智芳

「ブルーロック」ノ村優介、金城宗幸

- 日本に最強のエースストライカーを誕生させてW杯優勝を目指す、そのために全国から将来有望な高校生のFWを集めて最後の1人になるまで戦わせるという設定が、もう熱さ以外の何ものでもない！エゴとエゴがぶつかり選手がみるみる進化していくストーリーもとても面白い。サッカーって、こんなにかっこよくマンガで表現できるんだ、と思えるような熱い作品です。

デザイナー・シンガーソングライター / 平松新

「平穩世代の韋駄天達」クール教信者、天原

- まず設定が面白いと思った作品でした。絵は少し苦手に思えましたが、作品としては面白く読み進められました。正に「平穩世代」的な主人公たちですが、何となく今の日本の戦争を体験していない私達の世代が戦火に巻き込まれたことを少し想像してしまうような部分もありました。

株式会社スマイルアクス・営業大臣 / 岡村光徳

「休日のわるものさん」森川侑

- お休みを満喫する悪の秘密組織のわるものさん。その設定が最高です。癒されるし、パンダにほっこりします。

ブックエース上荒川店・コミック担当 / 倉本かおり

「ヘテロゲニア リングステイコ ～異種族言語学入門～」瀬野反人

- ドリトル先生異世界編。本当の異種族との交流の様子が淡々と描かれる。NHKスペシャル「シルクロードへの道」といったドキュメンタリーのように、特にストーリーがあるわけではないのに、ずっと見てしまう。他にない独特なジャンルの漫画。

丸善ジュンク堂書店 営業本部 / 小磯洋

- 異種族コミュニケーションの難しさと面白さ。マンガの会話描写のお約束（ホンヤクコンニャク状態）を許さない誠実さが魅力です。人間との混血児・ススキがかわいい分、ミイラ取り的な期待感もあります。

マンガ研究 / フリーライター / 会田洋

「ペリリュー - 楽園のゲルニカ -」 武田一義

- 太平洋戦争のペリリュー島の戦いで、戦争のつらさ、悲惨さを訴えかけるディティールのあるストーリーでありながら、コミカルな絵柄の mismatch ゆえに読者に訴えかけるものがある。反戦的な内容で、今のトレンドではないが、それを承知で書いたであろう作者、掲載した編集部にもエールを送りたい。

サブカル専門ライター / 河村鳴紘

- 地獄をくぐり抜けて8月15日。ページを開いて、のど元で詰まっていた息が変な音をたててひゅるひゅると体から抜けていくようだった。さて、ではどこでどうこの物語を終わらせるのか。作者の挑戦心と、志の高さに期待が高まる。

朝日新聞記者 / 小原篤

「忘却バッテリー」 みかわ絵子

- 前回の「彼方のアストラ」もそうですが、ジャンプ+のみで連載されている漫画は面白いものが多すぎます。なかでも「スパイファミリー」がやたら推されていますが、私はあえてこちらをお勧めしたいです。いまさら野球漫画でここまで面白いものが作られるのかと感動しました、圧倒的センスの高いギャグと、シリアスなストーリーのバランスが絶妙で、声を出して笑うことも嗚咽を漏らすほど泣くことも出来ます。それに加えて現代の高校野球の問題点の想起やイップスなどの選手の悩み苦しきもしっかり描かれているのが凄いです。天才的な選手たちの努力の部分も見ている気持ちいいですが、平凡な主人公っぽいキャラが活躍したり仲間に認められたりすると最高に気持ちいいです。

バーテンダー / 村井真也

「望郷太郎」 山田芳裕

- 気候変動に襲われた地球で、500年後に目覚めた男が遭遇したのは……。1巻で描かれるのはまだ物語の序盤。なのでノミネート作品に選ぶのは時期尚早かしら…とちりり思ったのですが、この圧倒的な面白さの前には選ばざるを得ませんでした。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 「へうげもの」の作者による近未来 SF。文明が破壊されて荒廃した近未来世界という「北斗の拳」を思わせる舞台に繰り広げられるドラマだが、ここには悪人善人の区別はない。作者独自の世界が今後どのように展開していくか楽しみである。

弁護士・三村小松法律事務所 / 三村 量一

「ホーキーベカコン」 笹倉綾人、谷崎潤一郎

- 原作と作画の極まったマリアージュ。笹倉綾人の描く圧倒的美(少女)と、それを信奉することで生命を立てる究極のマゾヒズム。この境地にもはや己の存在はない。

往来堂書店 / 往来堂書店・三木雄太

「ホームルーム」 千代

- ド変態しか出てこない漫画なのに、純粋な清々しさを感じる怪作。

PENICILLIN / HAKUEI

「僕と君の大切な話」ろびこ

- 連載はすでに終了したそうで、単行本も残り1巻の発売を待つのみ。なので、推せるのも今年が最後なのがとても悲しい。もうちょっと続くかと思っていたのだけど…。単行本の発売をこれだけ心待ちにしたマンガは最近なかった。最初は高校の最寄り駅のホーム（のベンチ）に舞台が限定された特異な設定。僕と君、つまり男子と女子の、あまりにというにも程があるくらいに異なる感覚のズレさ加減を会話だけで見せる（だからこそ表情を描き込む画力が重要になるのかな）という離れワザ的・実験的なマンガで、そういうところもワクワクだった（いま振り返ると懐かしい…。）。物語が進むにつれて舞台は普通の学園もの的なものに移行したが、それにつれてストーリーの深みや、サブキャラクターも含めた登場人物それぞれの心情の掘り下げや、主人公ふたりの気持ちにぎやかなエピソードの数々を経て着実に近づいていくところなど、総合的に読み応えが増していったように思う。東くんの朴念仁ぶりは「あるある」だし、のぞみの心理描写は「ドキドキ」。ろびこ先生の絵がなにしろ好き。4年間、とても楽しませてもらいました！

日本経済新聞社 企画開発室 / 天野賢一

- もはや「トーキングラブコメディ」の看板も外れかかっているけれど、彼氏彼女になる前のジワジワとじれったい感じは少女マンガの醍醐味、王道。書き文字の上でしか存在しない「女の子言葉」って実にいいなあと、相沢さんを通じて思い知らされました。

朝日新聞記者 / 小原篤

「僕のジョバンニ」穂積

- 自分が愛したものにおいて、その実力を否定されてしまったら。これほど残酷なことはない。それが順位付けされるものや評価されるものであれば尚の事。誰もが周囲からの評価や劣等感と闘いながら生きているが、この作品の登場人物とて例外ではない。その愛を音楽という手段を用いて、表現し続けるものがいれば、その愛が憎悪に変わる前に身を引く者もいる。茨の道を進み続けるのか、折り合いをつけるのか。彼らの関係が今後どのように進んでいくのか、非常に楽しみである。頁が光に満ちている、と感じるような作者の絵も魅力。

元書店員 / 杉 佳尚

「北北西に曇と往け」入江亜季

- 日常の空気感と、壮大なスケールを感じさせる情景描写は圧巻の一言。特殊能力的な要素も良い意味で浮いており、そのバランスが絶妙。ゆるく進むストーリーに盛り込まれたスリルは狂気が際立ち、さらに引き込まれます。映画のような、素晴らしい漫画。

広告会社 プランナー / 平沼 良章

- ミステリー的なストーリー展開が楽しい作品。

自営業 / 小野裕子

- 基本、能力使い漫画だが、そのストーリーのなかに素晴らしいアイスランドの世界観。自然、食べ物、人間たち。すべてが美しく表現されている。

HAIR MAKE LOUNGE tetote 代表 / tetote 代表 力丸 真

- 巻が進むごとに深まる謎！主人公とその弟の能力が気になるところ。アイスランドの広大な舞台も見所の一つ。いつか行ってみたいと思った人も多いのでは？

LIBRO PLUS / 土屋修一

「ほしとんで」 本田

- 何か好きなんですよ、この雰囲気俳句って日本人なら誰でも知ってて学校で習った事もあったけど、意外と詳しくは知らない事ばかりこんなものが見方ができると毎日が違った景色が見えるんだろうなあ

(株) エフ・ジェイ エンターテインメントワークス / 阿部 大介

「ぼんぽこ書房 小説玉石編集部」 川崎昌平

- 「シンプル過ぎる絵柄で描かれる熱血出版業界ドラマ」という形容は前作でも使ったけれど、きちんと違う設定でも同じテーマで唸らせる。それは川崎昌平という作家が、愚直?にもそのテーマ「小説の力」を信じているからだと思うのだ。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

「マチネとソワレ」 大須賀めぐみ

- 役者である主人公の誠は、同じく役者で亡くなった兄・御幸と常に比較されてきた。突然、兄が生きていて自分が死んでいるパラレルワールドに飛ばされた誠は、その世界で兄を超える役者になることを目指す舞台演劇漫画。主要な登場人物の演劇に対する愛は狂気染みており、その狂気から描かれるシリアスとコメディのバランスが上手く、テンポ良く話が進んでいく。舞台の描写の迫力は凄まじく、息を吞まされる。

弁護士・三村小松法律事務所 / 三村 量一

「魔法の天使 クリィミー マミ 不機嫌なお姫様」 三月えみ、スタジオピエロ

- 幼い頃ハマったクリィミー マミの、個人的には一押し大好きだっためぐみを主演にした、今流行りの悪役令嬢なもの。原作では当然描かれていない、めぐみの涙ぐましい努力や社長への思いに胸熱です!

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

「御手洗家、炎上する」 藤沢もやし

- 物理的な炎上とネットでの炎上を上手く絡めた作品だと思います。実際にこういう事あってもおかしくないよな…と思わせるリアリティがあります。

会社員 / 畑中瀬路奈

「娘の友達」 萩原あさ美

- 面白い冗談を聞きました。このマンガの”いやらしい描写”がフェミニストの批判にさらされている、と。是非読んでみてください。このマンガが描くのは、その真逆です。女子高校生にいいように振り回されるオジサンというこのマンガの描写は、女性蔑視の染みついた(そしてスケベな)オジサマ方にとっては許せない描かれ方なのでしょう。その醜悪さは、このマンガを必死に批判するおじさま方の姿にダブります。若い女なんかいいようにされてたまるか、いいようにするのは我々だ、と。

衆議院議員山尾志桜里事務所政策担当秘書 / 三葛敦志

「ムラサキ」 巖男子

- 面白い漫画も、よくできた漫画も、この世には溢れかえっているけれど、やはり商業ベースに乗るとどうしてもマスへのアプローチから似た印象を受ける作品が増えがちだとも思う。そんな中、この「ムラサキ」という作品は、超異端。尖りまくった発想。「漫画」という自由な発想を表現できるフィールドにおいて、「そうそう、この自由さ! こういうのを待っていた!!」と思わせられる。

イロイロ屋 / 杉本善徳

「メイドインアビス」つくしあきひと

- 読み終わると深く息を吐き出して、また読み返したくなるような深みが大好きです。深淵に辿り着くのが楽しみでもあり、怖くもあります。

教師 / 持丸宏司

「目黒さんは初めてじゃない」9℃

- スクールカーストがマンガのストーリーを成立させる基礎（土台）になって久しい。いまや前景にそれを織り込まなければ読み手はマンガを読むことすらできないくらいだ。本作はラブコメの体裁をとりながらも、同じ学校に通っていても階層が違えば接点がない、視界にすら入らないというシリアスな現実を踏まえ、主人公が少しずつ前に踏み出し、その壁を乗り越えることと、乗り越えた先には成長があるんだよ、というポジティブな作者の思いが原動力になっている。さえないメガネ男子の古賀くんが、経験豊富な「ビッチ」と言われている目黒さんと付き合うことに。恋愛が力になること、恋愛によって自分自身が成長したと感じられる実感はおそらく誰にもあるけれど、本作はそんな境地に至る過程を丁寧に描くことで、ちぐはぐで不釣り合いだと周囲に目される2人が、それぞれに相手の良さを見つけ、影響され、変わっていく様子を温かい雰囲気のある物語として読ませる。コミュ障で最初はまともにしゃべれなかった古賀くんが、目黒さんと付き合うようになってからしっかり自分の言葉で、自分の気持ちを、相手に、クラスに、伝えるようになっていくようすは心に響く。「俺は二度目でも三度目でも百度目でも目黒さんとするのは全部とくべつなんだ／だからぜんぶ大事にしていきたい」（2巻）という古賀君のステートメントに対し、目黒さんの「私は経験したことのないことを想像することがあまりできませんけれど、何かが変わったときにその変化を古賀さんが喜べるのなら私もそれを一緒に喜べたらいいなと思います」（3巻）という冷静な自己認識の裏表にある熱が描かれる。名台詞多数。ふわっとかわいらしい絵柄もあって、それを照れずに読めるところがいいと思う。

日本経済新聞社 企画開発室 / 天野賢一

「めしにしましょう」小林銅蟲

- これは果たしてグルメマンガなのか、料理マンガなのか、それ以外のなんなのかまったくわからんが、読んで腹も減れば料理もしたくなるという点で良作。「とにかくよくわからんがすごいことが起こっている（気がする）」という意味ではSFでもある。読まれるべき作品だし、作者である。

本読み / マサトク

「メタモルフォーゼの縁側」鶴谷香央理

- おばあちゃんがBLにハマる…それだけでなんか幸せになります笑でもいくつになっても新刊が待ち遠しいって感覚はとても幸せなことで、きっと長生きできると思う。年齢を超えて心を通わせる2人がとても微笑ましく美しい作品。

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- やはり続きが気になって入れました。更新をドキドキしながら見ております。

ブックファースト新宿店 / 渋谷孝

「めもくらむ 大正キネマ浪漫」赤石路代

- 大正時代の演劇をテーマに、主人公乙次郎が女優として歩む中で起こる切なくもドラマティックなストーリーに目が離せません。

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

「メランコリア」道満晴明

- 12pのSF短編オムニバス上下巻です。ひとつひとつの作品の面白さに引き込まれつつも、下巻を読むとまた新たな面白さに気がきます。改めてまた上巻から読み返したくさせてくれる作品。

会社員 / 工藤圭

「もういっぽん！」村岡ユウ

- 『キャプテン』『柔道部物語』『あさひなく』いつだって僕たちは等身大で成長していく漫画に憧れていた。天才は勿論かっこいい、でも自分だって何者かになりたいんだ！そんな少年少女のココロをぐっと鷲掴みにしてくれるスポーツの王道漫画！

October Beast・代表 / デザイナー / 北山友之

「モブ子の恋」田村茜

- 地味でおとなしかった主人公が恋をすることによって、心も行動も変化していきます。勇気を出して1歩ずつ前に進んでいく姿に感動します。モブ子の純情さに胸を打たれ、何度も応援したくなるほど素敵な恋が描かれた物語です。本当に素敵。

デザイナー・シンガーソングライター / 平松新

「ヤオチノ乱」泉仁優一

- 前情報一切なしで表紙買いして大当たり漫画。今年の一押し。現代日本を舞台に、忍者が諜報戦を繰り広げます。描かれているコトと、それを描く絵柄、線、そしてキャラクター、これらのマッチングっぷりが完璧なのです。現代日本を舞台にした忍者モノでヒロインがこのスレンダーな三白眼だけ？ 最高か？そんでアクションが渋いのよ。ド派手な超能力戦でも能力バトルでもなく、知略なのよ、謀略なのよ、チェスゲームなのよ。でも頭でっかちな感じがしないでスタイリッシュなのよ。それで、たった3巻で状況描ききったら、バシッと、なんの銜もなく、残心して終わっちゃうのよ。切れ味抜群よ。しびれたわ。

ソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

- 現代に生きる忍者の諜報戦という設定は目新しくはないが、淡々としたリアリティと漫画的浪漫とのバランスがよく、画風も個性的。諸外国との本格的な攻防が始まる前に終了となっており、連載の復活が待ち望まれる。

漫画読み / yama-gat

「やがて君になる」仲谷鳩

- 描写の美しい百合マンガ、という評価をはるかに超えて、去年はブームを巻き起こしたように思います。青春の内面描写がとにかく素敵。でも、様々なジャンルへの展開を見た後に、是非現実世界における同性カップルの受難も知ってほしいです。「人が人を好きになること」はただただ素晴らしいです。

衆議院議員山尾志桜里事務所政策担当秘書 / 三葛敦志

- 作画、キャラクターの心情の描写、言葉選び、ストーリー、各話のタイトルまで、全てに無駄がなく恋を知らない少女達の物語を描き切りました。多くの感動を貰った。これからも多くの方にやがて君になるを知ってもらいたいです。

リプロ ecute 大宮店 / 首藤 瑛

- 全8巻で、美しく完結したので推す。言ってしまうと百合漫画なんだが、そのように、ただの一言で括ってしまうのはこの漫画で描かれていることどもに対して不誠実であるように思う。(なぜならば、そのような「簡単に名付けられない想い」をめぐる物語であったと思うからだ。) 年若きひとのころにある、かそけき想いを、丁寧に、誠実に、しなやかに描いた、美しい漫画であった。しかも連載してたの『月刊コミック電撃大王』なのね。オタク向け一般誌で、ガリガリと市場を開拓してたタフな在り方もしてたのだ。たいしたものだよ。アニメもよかったねえ、最終回永遠に続けと思ったもの。その、永遠に続けと願ったものが、媒体は違えど、美しく、見事に終わってくれたのが素晴らしいっすわ。

ソフトウェアエンジニア / 第式齋藤

「有害無罪玩具」詩野うら

- 理知と幻想の溶け合うファンタジーを思索的に綴る鬼才の初作品集。独創的な語りにも圧倒される。

ライター / 福井健太

- 独特な絵柄と世界観。哲学的なのにすらすらと読める「金魚の人魚は人魚の金魚」が特にすごい。絵柄や雰囲気は全く違うが小田空さんの漫画を思い出した。しん、とした語り口調は絵本や短編小説のような雰囲気。読み心地。途中に実写背景を組み込ませるなどの手法を使ったり、作品の世界の説明に使用する画面の構図などがとても斬新で、記憶に残るし、なぜか癖になる。

会社員 / 西尾 美里

- 今年の「ああ、とんでもないもの読んじゃったなあ」枠。著者の情念と情緒と思索と思考とが、そのまま漫画に焼き付いている系の不可思議漫画。SFだ。思弁小説漫画と言っている。読むと、当てられてしまう。こちらの情念と情緒と思索と思考にも、やはり焼き付けられてしまう。『偽史山人伝』もほぼおんなじ感じかんじだが「金魚の人魚は人魚の金魚」が収録されているこちらを選んだ。コマ一つで億年を超えられてしまうともうだめよ。ぐっときちゃう。あかんよ。

ソフトウェアエンジニア / 第式齋藤

「ゆりあ先生の赤い糸」入江喜和

- 「大人のための少女漫画を描きたい」という入江先生の言葉どおり、かつて少女漫画雑誌を心待ちにしていた気持ちが再燃するような漫画。ジェットコースターのような怒涛の展開もリアルに感じられるのは、主人公の人となりがかつて描かれているがゆえでしょうか。巻が進むごとにさらにドキドキが増していくので、マンガから離れてしまった世代の女性たちにもぜひ読んでいただきたい作品。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

「ゆるキャン△」あfろ

- 地に足がついてる世界なのにこの極上のファンタジー感。キャラクターのバランスとハーモニーもうまい。

朝日新聞記者 / 小原篤

「夜明けの旅団」片山ユキヲ

- 第二次大戦下のヨーロッパを舞台に、死霊(ゾンビ)に父親を殺された少女と、その少女に幼い弟の姿を重ねる青年の旅を描いたダークファンタジー。これがもう、めっちゃダークで死闘に次ぐ死闘だし、死んでほしくないキャラが死ぬし、ちょっと待って!!! と言いたくなる回数多数。でも、不思議と読後感が悪くないのは、きっとそこに救いがあるから。悲しいのに、読んじゃう。前に進み続ける主人公たちに伴走したくなる。次巻が待ち遠しい一冊です。

ライター / 老年学研究者 / 島影真奈美

「ようかい居酒屋 のんべれケ。」 nonco

- 昨今では妖怪ジャンルは隆盛ながら、純然たるギャグ作品というのは少なく、少なからず学術的な要素との組み合わせが多い中、ハイテンションなギャグで突っ走る勢いに光るモノを感じます

住職 兼 ライター / 蟬丸 P

「来世は他人がいい」小西明日翔

- 思考が壊れている異常なイケメンにふるまわされるヒロインの話とおもいきや、ヒロインの方が異常だった。最初のストーリーの見せ方が抜群で、それだけでも見る価値あり。今後の二人の着地点が見えないのもいい。

サブカル専門ライター / 河村鳴紘

- ヤクザの息子娘という、結構よくあるかもしれない（でも案外そんなたくさんはない？）題材から予想外の裏切りを最初の1巻で何度も見せてくれます。続きが気になる！

Migimimi sleep tight / 涼平

「ライドンキング」馬場康誌

- 絵がひたすらカッコよく、ユーモアと爽快感溢れる物語。異世界ものはこうでなくちゃ！

元書店員 / 金田健太郎

- 表紙とタイトルから受けた印象と、中身が全く違っててまず度肝を抜かれた。ライドンキング・・・知らない言葉だけど、何か西洋の？伝説の？王？くらいの感覚で、何度か店頭で見るとに気になってきて見て、読んでビックリ。「騎乗（ライドン!）」からの「未知の・・・騎乗感・・・」というところで続刊購入を決めた。え？これギャグマンガなの・・・？SFファンタジーなの・・・？小学校中学校時代に大好きだったファンタジー物を少し思い出させてくれ、通勤時間の癒しとなっている。

会社員 / 西尾 美里

- 痛快シュールギャグ。ゴリラーマンあたりのセンスの良い面白さの新バージョン的な感覚。

PENICILLIN / HAKUEI

- キャラ設定勝ちかと思いきや、ストーリー展開・ファンタジー観もしっかりしていて読み応えがあります。画力も凄い！絵柄的にガチガチな話かと思いきや、割とギャグよりなのも意外でした。久々にワクワクするファンタジーものです。

会社員 / 畑中瀬路奈

「ラグナクリムゾン」小林大樹

- 今時には珍しいファンタジー系の純バトル漫画です。特徴は何と言っても熱いバトルシーンにつきます。昨今の転生系に近いジャンルだと思いますが、雰囲気は“一昔前”のエースやガンガン系で、青少年向けファンタジー作品です（実際ガンガン系ですが）。特筆すべきはバトルシーンで、作者の圧倒的画力が冴えわたり“見たいシーン”に無駄なくいきつく超スピーディーな展開。さらに言えば、読者が知っている他の漫画の“好きなシーン”とラグナクリムゾンで“見たいシーン”をイコールに結び付け熱く読ませてる圧倒的構成力が凄い！

会社員 / 佐藤優

「リボーン」の棋士」鍋倉夫

- 主人公は将棋のエリート棋士育成機関である奨励会員……だったが、実力を認められながらもプロになる夢叶わず、将棋を離れてフリーター生活へ。しかし、ある日ひょんなきっかけから、再起に向けて歩き出す。努力が必ず報われるとは限らないが、一見ムダにしたように思える時間でも、経験には必ず得るものがあり、やり直しは効くということを教えてくれる。

有限会社馬場企画・編集者 / 松浦達也

「ルパン・エチュード」岩崎陽子

- 二重人格者のアルセーヌ・ルパンが活躍する " 古典アレンジもの " の佳作。全四巻での完結が惜しまれる。再開を期待したい。

ライター / 福井健太

「レイリ」室井大資、岩明均

- 堂々としたラストで2019年完結した作品。原作・岩明均の空気感を迫力の画力と丁寧さで形にした力作です。もっと評価されてほしい！誠実なキャラクター達の意志の強さと痛々しいくらい真っ直ぐな眼力に泣きました。素晴らしい最後だった。奇をてらった作品ではなく、堅実な時代モノですが、ぜひ一気に読んでほしい作品です。

(株)来知・WEBデザイナー / 河本 智芳

- 岩明均さんらしい生き死にに肉薄した物語、ずっとドキドキしながら読み進めました。世は戦国時代、度重なる戦の残酷な余波により天涯孤独になった少女レイリ、その命を救ってくれた君主のために死ぬことだけが夢だと言う。そんなレイリが、人間として女性として戦人として、命を燃やし、命を使い尽くした、という言葉が浮かびます。主人公だけでなく、登場人物全員それぞれの「命の使いみち」について描かれていきます。死に様は惨たらしくはありますが、それぞれの「生のうえに成り立つ死」であり、結局はどう生きるか、誰のために生きるか、ということを考えさせられました。今季完結作品ということでもあり、このタイミングで是非たくさんの人に推したい作品であります。

公務員 / 宇田川 結衣子

- 武田信玄の頃には戦国最強とうたわれたが、そのあとを勝頼が継ぐとあれよあれよという間に滅んでしまう。その原因は、長篠の戦いなのか、それとも北条家との同盟解消にあるのか、はたまた別のことなのか…。そんな武田家が滅んでいくさまを、武田信玄の孫信勝の影武者になったレイリという架空の人物から見た物語。岩明均先生の原作が分厚くて、室井大資先生の描く表情にも深みがあって、ついつい架空の物語だということを忘れてしまう。

鳥取県立図書館・司書 / 野間勤

「レキヨミ」柴田康平

- 姉の名前はレキ、妹はヨミ。1巻を通じてもう何回死んでいるんだろう。もう生物なのかどうかも分からないほどの扱いを受けている。作者のアイデアがぶっ飛びすぎていて爽快感。それでいてマンガ、絵に対する熱意がすごい。アナログで細やかに引かれた線の量が圧倒。ルール無用な物語展開も未知の絵を引き出し、読んでいる最中の興奮に拍車をかける。

往来堂書店 / 往来堂書店・三木雄太

「レディ&オールドマン」オノ・ナツメ

- あらためてオノ・ナツメのストーリーテラーぶりに脱帽。明白な伏線を貼りながら、スパッとエピソードをストーリーから切り取り、そしてラストシーンで見事に回収する。この胆力に痺れた。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

「ローカル女子の遠吠え」瀬戸口みづき

- 一度でも地元を離れて生活した事のある人間が郷里に帰ったときに感じる違和感やズレというものを余すところなく表現しており、Uターン組のみならず地元では無い異郷に暮らすことになった人間の心情を描ききっている。

住職 兼 ライター / 蟬丸 P

「ロボ・サピエンス前史」島田虎之介

- 「すごい傑作」と言うのは簡単だが、そのすばらしさを具体的に言語化するのが極めて困難な作品。普通なら相矛盾するはずの感覚が、いくつも同時に表現されているというか……。例えば「冷たさと温かさ」。一切ムダを排して様式化された画面は極めてクールなのに、その「線」にはぬくもりが感じられること。例えば「愚かさといとおしさ」。放射能が無害化するまで25万年(!)かかる核廃棄物施設(オンカロ)を作ってしまうのも、それを最後までロボットに見届けさせるのも、人間であること。例えば「古さと新しさ」。個々のエピソードはどこかで見たような懐かしい感じなのに、読み終わった後で「こんなの見たことない」と思わせること。上下たった300ページ弱で、これだけの時間的スケールを表現し、深い余韻を残したのも見事としか言いようがない。『ラスト・ワルツ』も大傑作でしたが、本作はついにそれを超えたのではないのでしょうか。

読売新聞文化部編集委員 / 石田 汗太

- ダンプラウンのオリジンの様な怖さと、現状を見るとそうだなあ、きっとそうなるなど、預言者の様なマンガ。

マネージャー / 樋口健

「惑星クローゼット」つばな

- 静かに狂った世界観にしばれるコズミックホラー。「かわいい」と「怖い」を両立する絵の力たるや!

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

「惑星の影さすとき」八木ナガハル

- ダイソン球体に地球貫通トンネルと、SFのそれもニーヴンだとかイーガンだとかベンフォードといったハードSFあたりに出てきそうなアイデアや、ヒルベルトのホテルと名付けられた無限集合、ユース・バジルと呼ばれる特定世界の膨らみといった用語を、可愛い女の子とか眼鏡のお姉さんとか鳩の頭の男たちとか得体の知れない存在だとかが並び現れる物語の中に盛り込んで、センス・オブ・ワンダーの物語を漫画によって紡ぎ上げる。そう聞くととても小難しそうだけれど、語り口が判りやすく何かが起こっていると感じさせてくれるから、あとはその展開に沿って読んで行けば驚きを得られて理解ももたらされる。これぞハードSFコミックの金字塔にしてメルクマールと言えるのが八木ナガハルの「惑星の影さすとき」(駒草出版、1050円)だ。「2.999」は正しくは2の999乗として表記すべきタイトルの作品で、ひとりの少女がじゃんけん999連勝すれば終わるといふ、それだけの作品だけれどそれだけの数を連勝するためには、いったいどれだけの相手が必要かが問われている。負けたらあとは参加できないルールだったら、32連勝するためだけに43億人、それこそ地球の人口に近づくくらいの人数が必要になってくる。間に合わなくなったら少女は宇宙へと出てダイソン球体、恒星の周囲をリングワールドめいたものがぐるりと取り囲む星へと出向いてそこで60勝目を上げる。まだ60勝。999勝には遠く及ばない。銀河ですら90勝がやっと。このあとといったいどうなるの? そんな興味に挟まって、偶然性物理学なものが生み出した車、すべての分子が完璧に再現されてどこも壊れていないにもかかわらず動かない車なんてものが語られる。その動かない車を分子レベルで完全にコピーしたのなら動くといったエピソードが後の短編に盛り込まれているように、宇宙や物理をめぐる不思議なエピソードがそこかしこに挟まれ、読んでいるうちに何か教えられたような気になる。やがてじゃんけんの行き着いた先に現れたのは? それは宇宙がいったいどういふもので誰のために作られたものかを示していた。そんな物語を、2008年のウルトラジャンプという商業誌でも王道に寄った雑誌で掲載していただいたのだから、八木ナガハルも集英社もなかなか凄い。ウルトラジャンプでは「地球貫通トンネル」というものも掲載していて、地球のコアを貫くトンネルを掘ったら者を投げ入れれば途中まで自由落下で落ちていき、そして引っ張り上げられるようになって反対側に速度0で到着するといった甘言に乗り、政府が掘った穴に大気が吸い込まれて大変なことになるエピソードが繰り広げられる。

コアとまではいかないけれど、地殻を湾曲に掘り抜いて重力で走らせる弾丸列車の構想など、20世紀のドリームにあった落とし穴が描かれる。帰還が50年後になるのを承知で遠く離れた星へと戦争に出かける青年たちが戦う相手は、人間の頭を使った戦闘兵器だったりするエピソードもある。そうした商業作品とは別に、同人誌即売会のコミティア向けに用意された短編では、無限工作社なる存在、子ども達が仕切ってテクノロジーを与えては惑星を大きく変えるようなことを繰り返している集団を追って、かつて星を滅ぼされたドキュメンタリー作家が取材を続けるエピソードも綴られている。衆人だけが繰り返す惑星を尋ねてリポーターが知ったことは脇に置き、外にも世界があると知ってなお囚人として惑星に止まる少女の決断に、冒険より安住を求める心理を見る。目が一つしかないからこそ、相手の心理を読むことができる人たちの話。いったん着火したら絶対に消えず惑星すら燃やし尽くしてしまう火の話。驚きの現象やガジェットが繰り返され、そして無限工作車によるとてつおないテクノロジーが提示され、個々のエピソードをつないで宇宙全体に謎をもたらす。そんなSFコミックが詰め込まれた「惑星の影さすとき」が星雲賞を獲得する時は来るか。見守りたい。

書評家／ライター／タニグチリウイチ

「ワンダンス」珈琲

- ダンス未経験の自分にも分かりやすく、親近感を覚える丁寧な描写が素敵な作品。青春ものとしても Good !

元書店員 / 金田健太郎

- ダンスのことは詳しくないのですが、それでも画面から伝わる熱量や息遣いに圧倒されました。ダンス経験者が読んだらまた見え方が違うんじゃないかと思います。女の子たちがみんな可愛いのも良い!

会社員 / 畑中瀬路奈

「ワンルームエンジェル」はらだ

- え??? はらださん??? が第一印象。あまりに好きになりすぎて、電子と単行本両方購入しました! しょうもない男が死にかけた時に、天使が空から降りて来た。その出会いによって、クサってた男の心情、生活が変化する。実はシリアスな内容ながらも、はらださんらしい笑いが挟まれ、救いもある優しいお話でした。最後まで読むと、あー! それで目次があれだったのか。とか、これ、劇中に出てきたけど…あ!!! とか、書籍自体にしかけがあったのも楽しかった。電子限定の秘密のセリフ入りネームも必読です。

主婦 / 赤坂真実